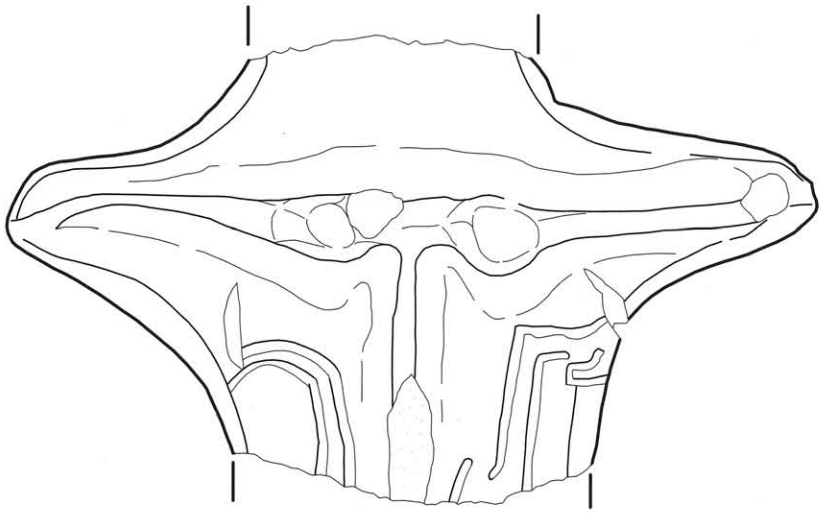
ISSN 1341-6952

東北大学埋蔵文化財調査年報20

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点
青葉山Ｅ遺跡第７次調査
青葉山Ｅ遺跡第８次調査



東北大学埋蔵文化財調査研究センター
2006

東北大学埋蔵文化財調査年報 20　正誤表

頁	行	誤	正
20	34	1号溝が埋まった後、	1号溝Aが埋まった後、
27	24	東西セクションでは 6a 層、	南北セクションでは 6a 層、
27	24	南北セクションでは 6②層が	東西セクションでは 6②層が
45	22	長く間議論となっているところであるが、	長い間議論となっているところであるが、

東北大学埋蔵文化財調査年報20

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点
青葉山Ｅ遺跡第７次調査
青葉山Ｅ遺跡第８次調査

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
2006

序

東北大学の青葉山北キャンパスの理学研究科構内には、縄文時代早期後葉の集落が存在し、青葉山Ｅ遺跡と呼ばれている。仙台平野では、青葉山Ｅ遺跡のような、高位段丘に存在する遺跡はあまり知られておらず、縄文早期の集落も調査例が少ない。

本年報は、2002年度における埋蔵文化財調査の報告で、この青葉山Ｅ遺跡の第７次・第８次調査などの成果を掲載した。青葉山Ｅ遺跡については、今回の報告によって、一連の調査は、一応の区切りを迎えたこととなる。

青葉山Ｅ遺跡での縄文時代早期の遺構・遺物は、1993年度の第２次調査で初めて確認され、第３次調査では当該期の住居跡２棟が発見された。さらに続く調査において、住居跡が存在する区域より、かなり広い範囲まで同時期の遺物が分布することが明らかとなった。このように、早期の住居跡の周辺を、広範囲に調査した例は少なく、学界に貴重な資料を提供することになるだろう。また、今回の調査では、縄文時代早期後葉だけでなく、縄文時代早期中葉、中期、晩期などの遺物も出土している。中でも早期中葉の土器は、これまでに実態が充分明らかになっていない時期のもので、その点でも重要である。これらの成果が、広く活用されることを願うものです。

また、小規模ではあったが、川内北キャンパスでも調査を実施し、仙台城二の丸の北方に広がる武家屋敷地区の様相の一端も明らかとなった。あわせて、ご活用いただければと願うものです。

おわりに、これらの調査を進める上でご指導ご助言をいただいた、大学内外の関係者および関係機関に厚くお礼を申し上げます。とりわけ、調査の実施から報告書の刊行に至るまで、多くの協力を賜った本学の施設部、理学研究科をはじめとする関係各位には、ここに厚く御礼申し上げる次第です。

埋蔵文化財調査研究センター長

阿子島　香

例　言

1．本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが2002年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。

2．報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下の通りである。

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（ＢＫ８）

本調査　2003年３月13日～３月19日　藤沢敦・柴田（旧姓京野）恵子・高木暢亮

青葉山Ｅ遺跡第７次調査（ＡＯＥ７）

本調査　2001年11月１日～11月19日　高木暢亮

2002年５月７日～11月22日　藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮

2003年３月10日～３月28日　藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮

青葉山Ｅ遺跡第８次調査（ＡＯＥ８）

本調査　2002年７月26日～８月21日　藤沢敦・柴田恵子

3．調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが行った。

4．本年報の編集は、阿子島香の指導のもとに、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮が担当した。

5．本文は、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮・小野章太郎（東北大学大学院生）が分担執筆した。本文執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章・第Ⅱ章：藤沢敦

第Ⅲ章５(1)・(2)、６、第Ⅳ章：柴田恵子

第Ⅲ章１～４：高木暢亮

第Ⅲ章５(3)：小野章太郎

英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。

6．発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略・50音順）

相原淳一（宮城県教育庁文化財保護課）、菅野智則（東北大学考古学研究室助手）、杉山陽亮（八戸市教育委員会）、須藤　隆（東北大学考古学研究室教授）、千葉直樹（宮城県教育庁文化財保護課）、早瀬亮介（東北大学考古学研究室大学院生）

仙台市教育委員会、東北大学考古学研究室

7．出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターで保管・管理している。

凡　例

1．方位は真北に統一してある。

2．図１と図２は、それぞれ国土地理院作成の、２万５千分の１地形図「仙台西北部」と「仙台西南部」、１万分の１地形図「青葉山」を使用した。

3．川内地区の仙台城跡二の丸地区、および二の丸北方の武家屋敷地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」（縮尺500分の１）を使用した。

4．国土座標値を用いる場合には、日本測地系と世界測地系の別を、それぞれ記入した。

5．遺物の実測図および写真の縮尺は、それぞれに示した。

6．引用・参考文献は、巻末にまとめた。また本文中で、『東北大学埋蔵文化財調査年報』を引用する場合は、年報１という形で略記した。

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（2002年度）

委員長	センター長（文学研究科　教授）	阿子島　香
委　員	川内地区協議会協議員（文学研究科　教授）	海野道郎
	青葉山地区協議会協議員（理学研究科　教授）	橋本　治
	星陵地区協議会協議員（医学研究科　教授）	伊藤恒敏
	片平地区協議会協議員（金属材料研究所　教授）	平賀賢二
	文学研究科　教　授	須藤　隆
	文学研究科　教　授	今泉隆雄
	文学研究科　教　授	大藤　修
	東北アジア研究センター　教　授	入間田宣夫
	理学研究科　教　授	藤巻宏和
	工学研究科　教　授	飯淵康一
	総合学術博物館　教　授	柳田俊雄
	施　設　部　長	加太孝司
幹　事	施　設　部　企画課長	大西知子

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会（2002年度）

委員長	センター長（文学研究科　教授）	阿子島　香
委　員	文学研究科　教　授	須藤　隆
	文学研究科　教　授	今泉隆雄
	文学研究科　教　授	大藤　修
	東北アジア研究センター　教　授	入間田宣夫
	理学研究科　教　授	藤巻宏和
	工学研究科　教　授	飯淵康一
	総合学術博物館　教　授	柳田俊雄
	調査研究員（文学研究科　助手）	藤沢　敦
	調査研究員（文学研究科　助手）	京野恵子
	調査研究員（文学研究科　助手）	高木暢亮
	施　設　部　企画課長	大西知子

目　次

序
例言
凡例
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　2002年度（平成14年度）事業の概要 …… 1
1．はじめに …… 1
2．運営委員会・専門委員会 …… 1
3．埋蔵文化財調査の概要 …… 4
(1) 川内地区の調査 …… 4
(2) 青葉山地区の調査 …… 9
4．遺物整理作業 …… 10
5．保存処理事業 …… 12
6．資料保管状況 …… 12
7．研究活動 …… 12
(1) 受託研究・共同研究等 …… 12
(2) 学会発表等 …… 13
(3) 資料調査 …… 13
(4) 科学研究費採択状況 …… 13
8．教育普及活動 …… 14
(1) 非常勤講師 …… 14
(2) 保管資料の貸出 …… 14
(3) 外部からの派遣依頼等 …… 14
(4) 広報活動 …… 14
第Ⅱ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（ＢＫ８）の調査 …… 15
1．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史 …… 15
2．調査経緯 …… 15
(1) 2001年度までの調査 …… 15
(2) 調査地点の位置 …… 16
(3) 調査の方法と経過 …… 16
3．基本層序 …… 16
4．検出遺構 …… 20
5．出土遺物 …… 21
(1) 江戸時代以前の遺物 …… 21
(2) 江戸時代以降の遺物 …… 21
6．まとめ …… 22
第Ⅲ章　青葉山Ｅ遺跡第７次調査（ＡＯＥ７） …… 25
1．位置と環境 …… 25
2．調査経緯 …… 25
(1) 2001年度までの調査 …… 25
(2) 調査地点の位置 …… 25
(3) 調査の方法と経過 …… 25
3．基本層序 …… 27
4．検出遺構 …… 27
5．出土遺物 …… 35
(1) 遺物の出土状況 …… 35
(2) 縄文土器 …… 41
(3) 土偶 …… 46
(4) 石器 …… 59
6．まとめ …… 72
第Ⅳ章　青葉山Ｅ遺跡第８次調査（ＡＯＥ８） …… 76
1．調査経緯 …… 76
(1) 調査地点の位置 …… 76

(2) 調査に至る経緯 ……76
(3) 調査の方法と経過 ……76
2．調査結果 ……76
3．出土遺物 ……80

引用・参考文献
英文要旨

写真図版

図 目 次

図1 東北大学と周辺の遺跡 ……2
図2 仙台城と二の丸の位置 ……3
図3 仙台城跡二の丸・武家屋敷地区調査地点 ‥5
図4 青葉山地区調査地点 ……7
図5 千貫橋石垣全景 ……9
図6 応用薬学総合研究棟新営に伴う試掘調査区の配置 ……11
図7 応用薬学総合研究棟新営に伴う試掘調査状況 ……11
図8 収蔵遺物量の推移 ……13
図9 武家屋敷地区第8地点調査区の位置 ……17
図10 武家屋敷地区第8地点検出遺構平面図・断面図 ……18
図11 武家屋敷地区第8地点外周壁断面図 ……19
図12 武家屋敷地区第8地点出土遺物 ……23
図13 青葉山E遺跡第7次調査区・第8次調査区の位置 ……26
図14 青葉山E遺跡第7次調査調査区配置図 ‥‥28
図15 青葉山E遺跡第7次調査検出遺構配置図 ‥29
図16 青葉山E遺跡第7次調査断面図(1) ……30
図17 青葉山E遺跡第7次調査断面図(2) ……31
図18 青葉山E遺跡第7次調査検出遺構(1) ……32
図19 青葉山E遺跡第7次調査検出遺構(2) ……33
図20 青葉山E遺跡第7次調査グリッド別遺物密度図(1) ……36
図21 青葉山E遺跡第7次調査グリッド別遺物密度図(2) ……37
図22 青葉山E遺跡第7次調査グリッド別遺物密度図(3) ……38
図23 青葉山E遺跡第7次調査グリッド別遺物密度図(4) ……39
図24 青葉山E遺跡第7次調査グリッド別遺物密度図(5) ……40
図25 青葉山E遺跡第7次調査出土土器(1) ……47
図26 青葉山E遺跡第7次調査出土土器(2) ……48
図27 青葉山E遺跡第7次調査出土土器(3) ……49
図28 青葉山E遺跡第7次調査出土土器(4) ……50
図29 青葉山E遺跡第7次調査出土土器(5) ……51
図30 青葉山E遺跡第7次調査出土土器(6) ……52
図31 青葉山E遺跡第7次調査出土土器(7) ……53
図32 青葉山E遺跡第7次調査出土土器(8)・土偶 ……54
図33 青葉山E遺跡第7次調査出土早期土器の類例 ……55
図34 青葉山E遺跡第7次調査出土石器(1) ……62
図35 青葉山E遺跡第7次調査出土石器(2) ……63
図36 青葉山E遺跡第7次調査出土石器(3) ……64
図37 青葉山E遺跡第7次調査出土石器(4) ……65
図38 青葉山E遺跡第7次調査出土石器(5) ……66
図39 青葉山E遺跡第7次調査出土石器(6) ……67
図40 青葉山E遺跡第7次調査出土石器(7) ……68
図41 青葉山E遺跡第7次調査出土石鏃の形状 ‥71
図42 青葉山E遺跡出土土器の分布図（縄文早期後葉） ……73
図43 青葉山E遺跡出土土器の分布図（縄文早期後葉以外） ‥74
図44 青葉山E遺跡第8次調査区の位置 ……77

図45　青葉山Ｅ遺跡第８次調査
深掘調査区平面図・断面図　‥‥78
図46　青葉山Ｅ遺跡第８次調査出土剥片　‥‥‥‥79

表　目　次

表１　2002年度調査概要表　‥‥‥‥

第Ⅰ章　2002年度（平成14年度）事業の概要

1．はじめに

東北大学には、仙台市内の各キャンパスに加えて、多くの研究施設がある。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財が存在している（図１）。特に川内地区は、ほぼ全域が近世の仙台城跡二の丸地区と二の丸北方武家屋敷地区にあたっている（図２）。東北大学構内での施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が組織されて以降、その実務機関である埋蔵文化財調査室が、調査の任にあたってきた。1994年度には、埋蔵文化財調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いでいる。

2002年度においても、青葉山地区で大規模な調査が実施され、新たな資料を提供することとなった。本年報は、これらの調査成果、および同年度のセンターの研究教育活動など、各種事業についてまとめたものである。

2．運営委員会・専門委員会

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、センターの運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する専門委員会が設置されており、両委員会の審議をもとに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、そこで年間の事業予定・予算等を審議し、調査に関わる具体的な事項は、専門委員会をその都度開催して審議することとしている。

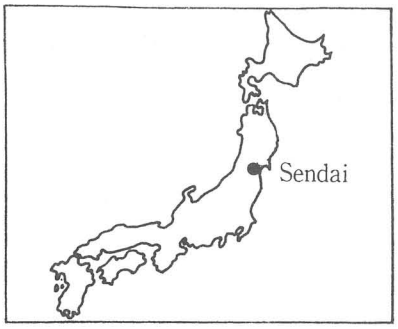
2002年度（平成14年度）は、運営委員会を３回、専門委員会を１回開催した。それぞれの開催月日・議事内容は以下の通りである。

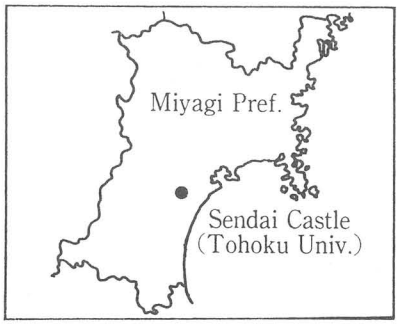
埋蔵文化財調査研究センター運営委員会

４月11日　　審議事項　（１）平成14年度埋蔵文化財調査計画について
（２）平成14年度センター運営費について
（３）平成14年度整理作業計画について
（４）東北大学埋蔵文化財調査研究センターの組織見直しについて

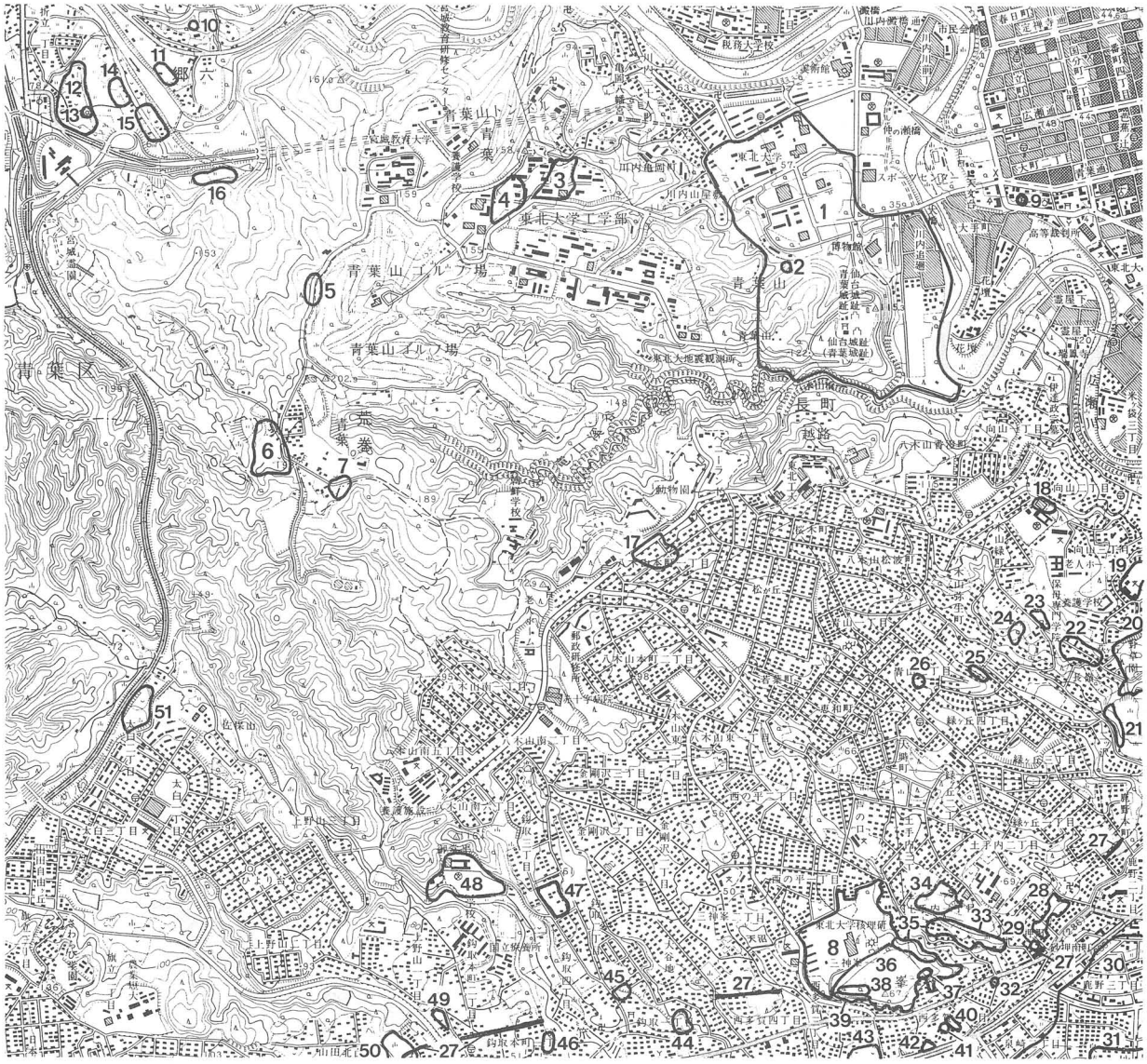
表１　2002年度調査概要表
Tab.1　Excavations on the campus in the fiscal year 2002

調査の種類	調　査　地　点（略号）	原　　因	調査期間	面　積	時　期
本調査	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（BK8）	川内北地区厚生会館前上屋取設工事	3/13～19	28.6㎡	近世
	青葉山Ｅ遺跡第７次調査（AOE7）	理学研究科総合研究棟（Ⅲ期）新営	5/7～3/28	1800㎡	縄文早期～晩期
	青葉山Ｅ遺跡第８次調査（AOE８）	工学研究科共通駐車場整備	7/26～8/21	750㎡	縄文
試掘調査	応用薬学系（2002－1）	総合研究棟新営	3/18～4/17	68㎡	－
立会調査	学際科学研究センター（2002－2）	学際科学研究センター新営	9/17	－	－
	川内南地区南西端（2002－3）	送水管取替	12/2～12	－	－
	理学研究科生物棟北側（2002-4）	管理棟外部改修その他工事	2/10～12	－	－
	川内北地区厚生会館南側（2002－5）	屋外排水管改修工事	2/1	－	－
	川内記念講堂西側（2002－6）	屋外消火配管改修工事	2/3～5	－	－
	東北アジア研究センター西側（2002－7）	実験棟（プレハブ）新営	2/3～5	－	－
	工学研究科環境科学研究棟北側（2002－8）	プレハブ新営	2/25	－	－
	工学研究科機械・知能系研究棟北側（2002－9）	プレハブ新営	2/25	－	－
	工学研究科工学系研究棟西側（2002－10）	総合研究棟新営	2/25	－	－
	工学研究科マテリアル・開発系実験研究棟東側（2002－11）	プレハブ新営	2/25	－	－





1 : Ruin of Sendai Castle
2 : Kawauchi steles
3 : Aobayama Site Loc. B
4 : Aobayama Site Loc. E
5 : Aobayama Site Loc. C
6 : Aobayama Site Loc. A
7 : Aobayama Site Loc. D
8 : Ashinokuchi Site



1：仙台城跡　2：川内古碑群　3：青葉山遺跡B地点　4：青葉山遺跡E地点　5：青葉山遺跡C地点　6：青葉山遺跡A地点
7：青葉山遺跡D地点　8：芦ノ口遺跡　9：片平仙台大神宮の板碑　10：郷六大日如来の碑　11：葛岡城跡　12：郷六城跡
13：郷六建武碑　14：沼田遺跡　15：郷六御殿跡　16：郷六遺跡　17：松ヶ岡遺跡　18：向山高裏遺跡　19：萩ヶ丘遺跡
20：茂ヶ崎城跡　21：二ツ沢横穴墓群　22：萩ヶ岡B遺跡　23：八木山緑町遺跡　24：二ツ沢遺跡　25：青山二丁目遺跡
26：青山二丁目B遺跡　27：杉土手（鹿除土手）　28：砂押屋敷遺跡　29：砂押古墳　30：富沢遺跡　31：泉崎浦遺跡
32：金洗沢古墳　33：土手内窯跡　34：土手内遺跡　35：土手内横穴墓群　36：三神峯遺跡　37：金山窯跡　38：三神峯古墳群
39：富沢窯跡　40：裏町東遺跡　41：裏町古墳　42：原東遺跡　43：原遺跡　44：八幡遺跡　45：後田遺跡　46：町遺跡
47：神瀧山遺跡　48：御堂平遺跡　49：上野山遺跡　50：北前遺跡　51：佐保山東遺跡

図1　東北大学と周辺の遺跡
Fig.1　Archaeological sites and Tohoku University

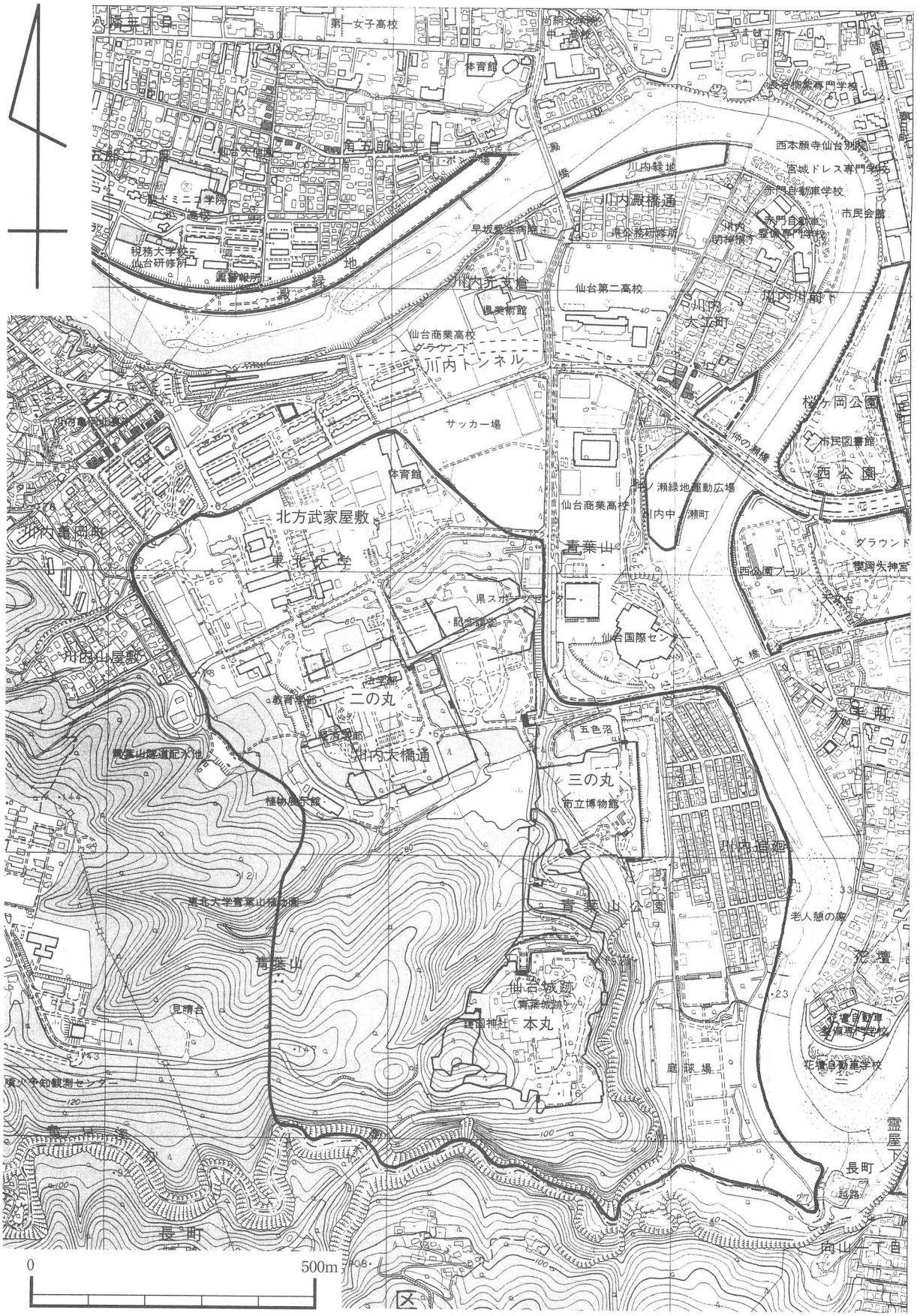


図２　仙台城と二の丸の位置
Fig.2　Distribution of Sendai Castle

（５）埋蔵文化財調査研究センター長について
（６）その他
報告事項　（１）平成13年度埋蔵文化財調査結果について
（２）平成13年度センター運営経費決算について
（３）平成13年度整理作業について
（４）その他
８月29日　審議事項　（１）法人化に伴う組織のあり方について
（２）その他
２月10日　審議事項　（１）調査研究員の流用定員措置について
（２）法人化への対応について
（３）整理作業・報告書刊行経費について
（４）その他
埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会
４月11日　審議事項　（１）平成14年度埋蔵文化財調査計画について
（２）平成14年度整理作業計画について
（３）その他
報告事項　（１）平成13年度埋蔵文化財調査結果について
（２）平成13年度整理作業について
（３）その他

３．埋蔵文化財調査の概要

2002年度は、川内地区・青葉山地区において、本調査３件、試掘調査１件、立会調査10件の、合計14件の調査を実施した。（表１）。

(1) 川内地区の調査

川内地区では、本調査１件と立会調査４件を実施した（図３）。

本調査を実施したのは、川内北地区厚生会館前上屋取設に伴う、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（ＢＫ８）の調査である。これについては、次の第Ⅱ章において報告する。

立会調査は、川内南地区が２件、川内北地区が２件であった。

川内南地区の内の１件は、送水管改修に伴う調査である。川内南地区の平坦面の南西隅付近から、丘陵に若干上った所のポンプ室まで至る送水管を改修するものであった。既設送水管の取り替えであったため、立会調査とした。掘削は、新しい盛土の範囲内に留まり、遺構・遺物は発見されていない。

川内南地区のもう１件は、記念講堂西側の消火用配管の改修に伴うものである。既設管設置の際の掘削範囲内に、新しい配管を入れる工事であったため、立会調査とした。掘削は既設管の掘り方内に留まり、遺構は発見されていない。攪乱土から、瓦が若干出土したが、江戸時代に遡るものかどうかは判らない。

川内北地区の２件の内の１件は、川内北厚生会館南側の排水管改修に伴うものである。既設排水管を入れ替えるものであるため立会調査とした。工事に伴う掘削は、既設排水管設置の際の掘削範囲内に収まり、遺構・遺物は発見されなかった。

もう１件は、東北アジア研究センターの実験棟建設に伴うものである。建設される実験棟が、軽量鉄骨プレハブ構造のため、基礎は布基礎で、掘削も深くないため、立会調査とした。工事による掘削は、近代以降の盛土の

（５）埋蔵文化財調査研究センター長について
（６）その他
報告事項　（１）平成13年度埋蔵文化財調査結果について
（２）平成13年度センター運営経費決算について
（３）平成13年度整理作業について
（４）その他
８月29日　審議事項　（１）法人化に伴う組織のあり方について
（２）その他
２月10日　審議事項　（１）調査研究員の流用定員措置について
（２）法人化への対応について
（３）整理作業・報告書刊行経費について
（４）その他
埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会
４月11日　審議事項　（１）平成14年度埋蔵文化財調査計画について
（２）平成14年度整理作業計画について
（３）その他
報告事項　（１）平成13年度埋蔵文化財調査結果について
（２）平成13年度整理作業について
（３）その他

３．埋蔵文化財調査の概要

2002年度は、川内地区・青葉山地区において、本調査３件、試掘調査１件、立会調査10件の、合計14件の調査を実施した。（表１）。

(1) 川内地区の調査

川内地区では、本調査１件と立会調査４件を実施した（図３）。

本調査を実施したのは、川内北地区厚生会館前上屋取設に伴う、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（ＢＫ８）の調査である。これについては、次の第Ⅱ章において報告する。

立会調査は、川内南地区が２件、川内北地区が２件であった。

川内南地区の内の１件は、送水管改修に伴う調査である。川内南地区の平坦面の南西隅付近から、丘陵に若干上った所のポンプ室まで至る送水管を改修するものであった。既設送水管の取り替えであったため、立会調査とした。掘削は、新しい盛土の範囲内に留まり、遺構・遺物は発見されていない。

川内南地区のもう１件は、記念講堂西側の消火用配管の改修に伴うものである。既設管設置の際の掘削範囲内に、新しい配管を入れる工事であったため、立会調査とした。掘削は既設管の掘り方内に留まり、遺構は発見されていない。攪乱土から、瓦が若干出土したが、江戸時代に遡るものかどうかは判らない。

川内北地区の２件の内の１件は、川内北厚生会館南側の排水管改修に伴うものである。既設排水管を入れ替えるものであるため立会調査とした。工事に伴う掘削は、既設排水管設置の際の掘削範囲内に収まり、遺構・遺物は発見されなかった。

もう１件は、東北アジア研究センターの実験棟建設に伴うものである。建設される実験棟が、軽量鉄骨プレハブ構造のため、基礎は布基礎で、掘削も深くないため、立会調査とした。工事による掘削は、近代以降の盛土の

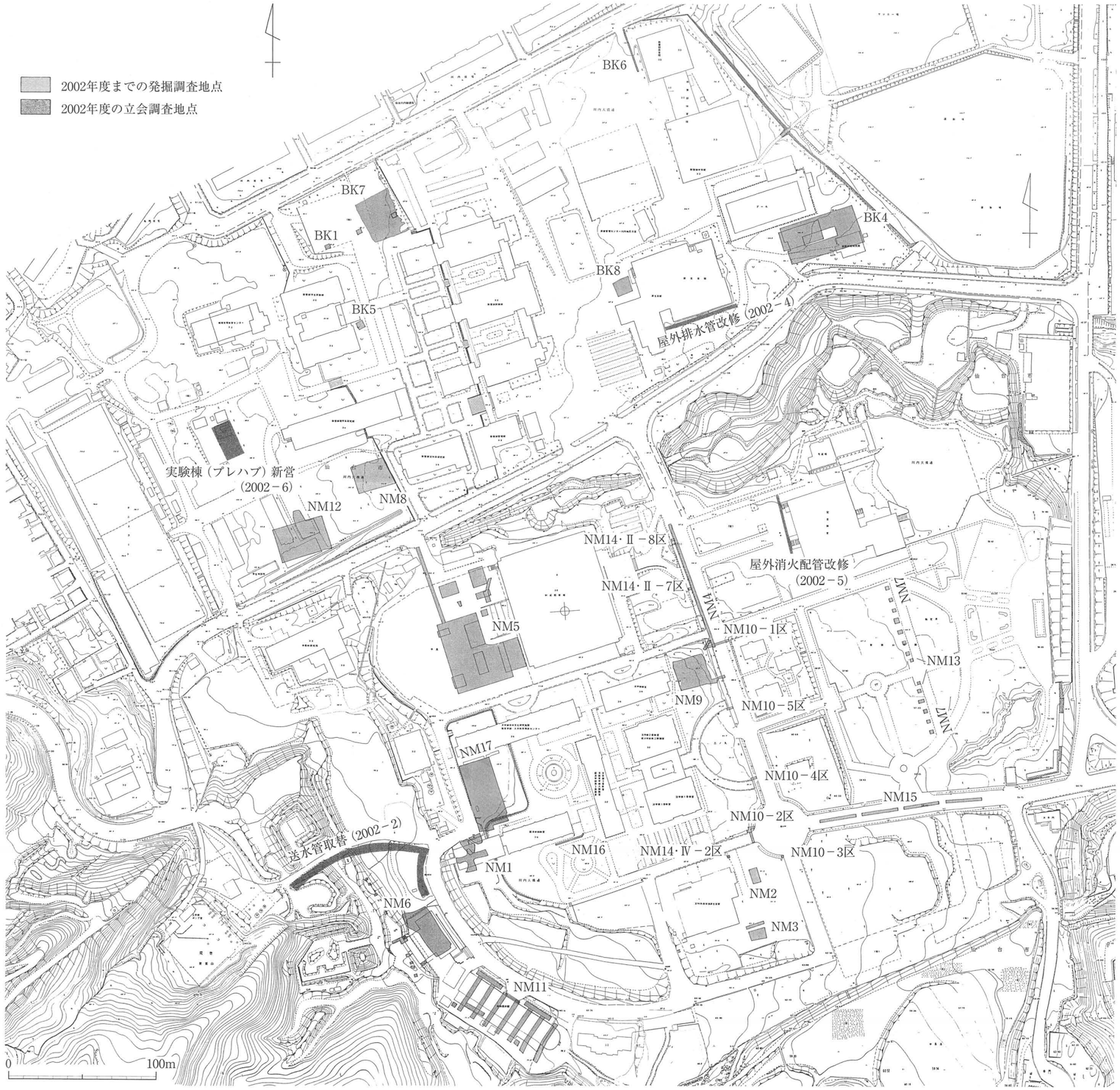


図３　仙台城跡二の丸・武家屋敷地区調査地点
Fig.3　Location of excavations until 2002 at *Ninomaru*（NM i.e. Secondary Citadel）and *samurai* residence（BK）

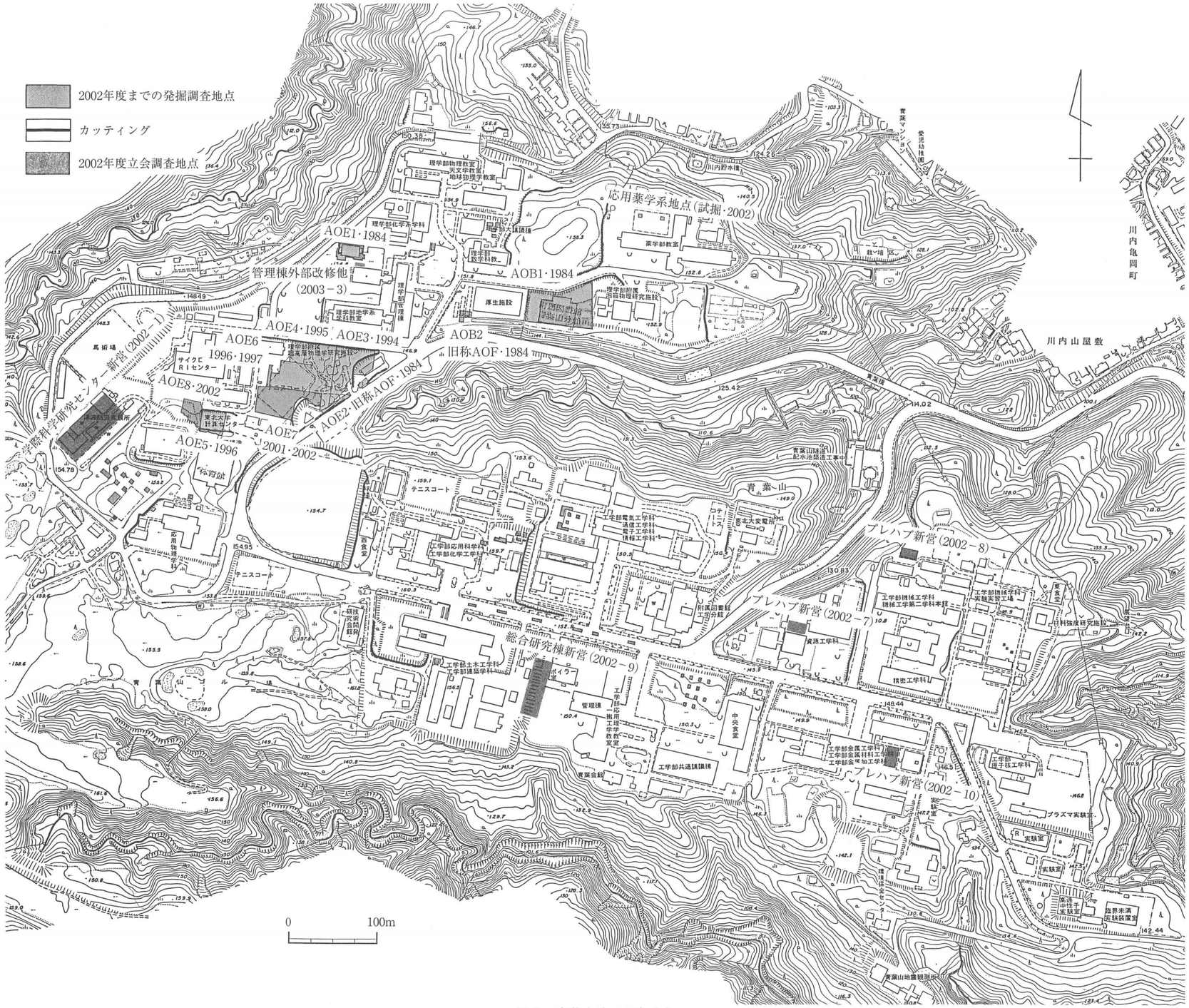


図4　青葉山地区調査地点
Fig.4　Locations of excavations at Aobayama campus

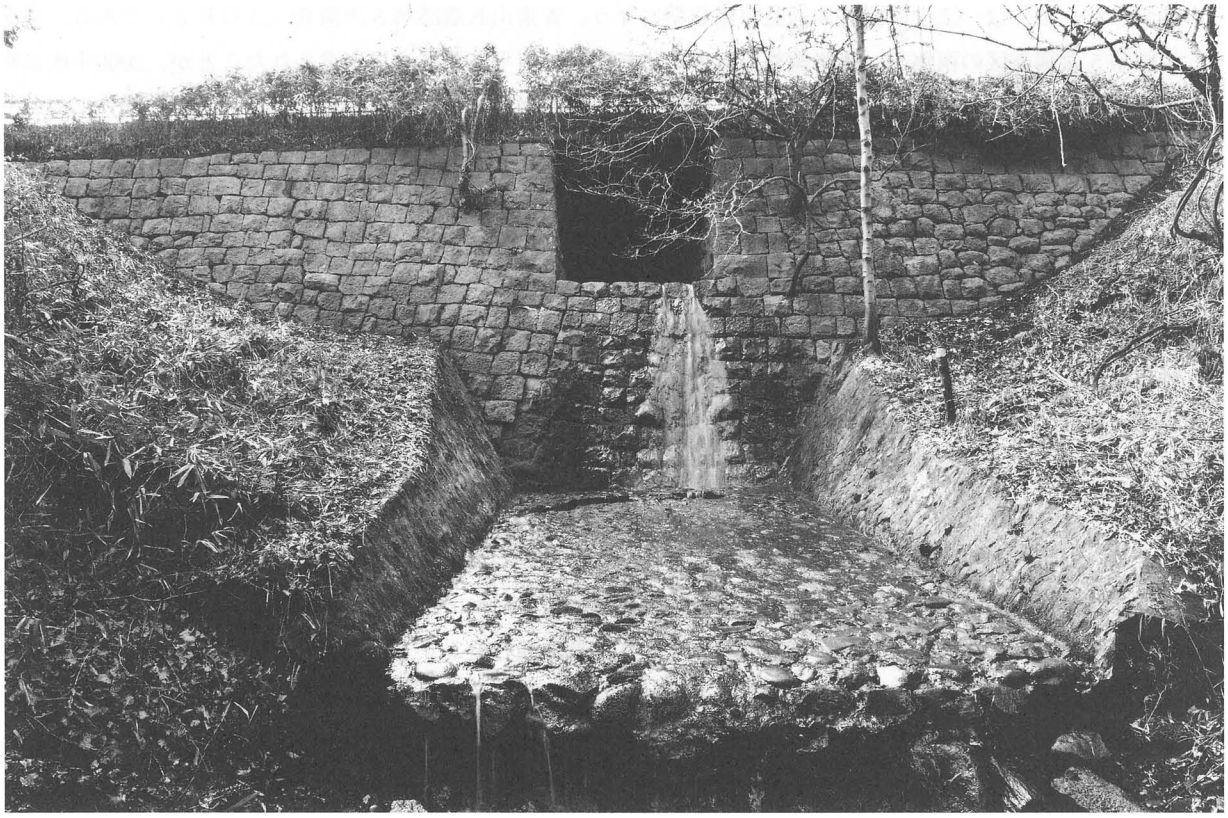


図５　千貫橋石垣全景
Fig.5　View of a stone wall at *Senganbashi* bridge

範囲に収まり、遺構・遺物は発見されなかった。

当年度は、前述した調査以外に、千貫橋石垣の現状調査を行った。

東北大学では、創立百周年記念事業の候補の一つとして、千貫沢沿いに散策路を造ることが検討対象にあげられていた。その検討のための調査の一環として、理学研究科附属植物園が担当して、樹木調査が実施された。その際、植物園からの依頼を受けて、当センターで樹木調査のための測量基準点を設置した。千貫沢は、通常は人が入ることがほとんど無く、下草などが繁茂している。この基準点設置の際に、下草を刈り払ったため、見通しが良くなり、立ち入りが容易となった。この機会をとらえて、千貫沢を渡る道路の下に残っている、石垣の現状調査を行った。江戸時代には、二の丸の北方から二の丸の裏門である台所門に至る道路の、千貫沢を渡るところに土橋が造られており、千貫橋と呼ばれていた。下流側である東側に、石垣が残されている。2002年12月16日に、石垣が見えている範囲を略測するとともに、石材や石組の状況を観察し、写真撮影を実施した（図４）。

(2) 青葉山地区の調査

青葉山地区では、本調査２件、試掘調査１件と立会調査６件を実施した（図５）。

本調査を実施した内の１件は、理学研究科実験研究棟新営に伴う、青葉山Ｅ遺跡第７次調査（ＡＯＥ７）である。この調査は、前年度から継続して実施している。理学研究科実験研究棟については、１～３期に分けて建設工事を進める計画である。前年度の2001年度に、２期工事分の事業化が認められたため、この２期工事と一部並行しつつ、３期工事区域の調査を実施することとなった。しかし、2001年度は、他の調査を優先させて進める必要があったため、２期分の工事との関係で、先行して調査を進める必要のある区域のみの調査を実施した。2002年度は、残る範囲の調査を実施した。これについては、2001年度と2002年度に実施した調査を合わせて、本年報の第Ⅲ章において報告する。

本調査のもう１件は、工学研究科共通駐車場整備に伴う、青葉山Ｅ遺跡第８次調査（ＡＯＥ８）である。青葉山Ｅ遺跡第５次調査区の西側が、連絡調整もれのため無届けで削平され駐車場が造られたことが、2000年度に明らかとなった。直ちに対処策を検討した結果、工事による破壊の範囲・程度を明らかにし、必要な部分については記録保存のための調査を実施することを決定していた。しかし、優先して実施しなければならない調査が立て込んでいたため、先送りとなっていた。この調査を、第７次調査と一部並行しながら、当年度に実施した。これについては、本年報の第Ⅳ章において報告する。

試掘調査を実施したのは、薬学研究科応用薬学総合研究棟新営に伴う調査である。工事が行われる範囲が、青葉山Ｂ遺跡の東端から外側にあたる区域であったため、建設予定地に遺跡が広がっているか否かを確認する目的で、試掘調査を実施した。

調査は、青葉山Ｂ遺跡の東端にかかる部分に約3.5m×10mの調査区を設け、１区とした。さらに東側には、４m×４mの調査区を２ヶ所配置し、西側を２区、東側を３区とした（図６・７）。なお、基本層序を確認するため、各調査区で深掘り部分を設けた。

１区では、表土以下の地層が確認された。削平は受けていなかったが、縄文時代などの包含層は検出されなかった。また、ローム層の上面で、戦前の陸軍演習場時代の塹壕跡が検出されたが、他に遺構・遺物は発見されなかった。２区は、大学造成時に大規模に削平されており、愛島軽石層より下位の地層だけが残存していた。３区では、もとの表土の上に大学造成時の盛土がなされており、削平はされていなかった。この３区では、ローム層の上面においてピットが１基検出された。このピットからは遺物は出土していないが、埋土にしまりがなく、極めて柔らかいことから、新しい時期のものと判断した。これ以外には、遺構・遺物は発見されなかったため、それ以上の調査は行っていない。

立会調査は、２件が青葉山Ｅ遺跡の範囲内か周辺、残る４件が工学研究科構内の、周知の遺跡からは離れる場所であった。

理学研究科生物棟北側の外部改修に伴う調査は、青葉山Ｅ遺跡の範囲内であったが、既設貯水槽によりほとんど破壊されている場所であったため、立会調査とした。工事による掘削は、既に掘削された範囲に収まり、遺構・遺物は発見されなかった。

学際科学研究センター新営に伴う調査地点は、青葉山Ｅ遺跡の南西に隣接する。既に大規模に削平や盛土が行われていた可能性が高かったため、立会調査とした。工事範囲の北東側では、掘削範囲のほとんどが厚い盛土であった。南西側では、愛島軽石層の上は２次堆積層で、遺構・遺物は発見されなかった。

残る４件は工学研究科構内で、周知の遺跡からは離れるが、学内での措置として立会調査を行ったものである。４件の内、工学系総合研究棟は恒久建造物であるが、環境科学科・機械知能系・マテリアル開発系での３件は、軽量鉄骨造のプレハブ建物の新営に伴う調査である。これらいずれの調査においても、遺構・遺物は発見されなかった。

４．遺物整理作業

2002年度は、2000年度に調査を実施した、仙台城跡二の丸第17地点の整理作業を、前年度に引き続いて実施した。当初は、２年間で整理作業をおこない、２ヶ年目にあたる当年度の末に、2000年度に実施した調査を始めとする事業を取りまとめる年報18として、報告書を刊行する予定であった。また、前年度に調査を実施した、二の丸北方武家屋敷地区第７地点の出土遺物の、水洗や注記などの基礎的整理作業も行う計画であった。

しかし、2002年度は整理作業のための予算の確定が大幅に遅れた。そのため、当年度予算で印刷経費が確保できるかどうかが、年末をすぎても不確実なままであった。作業の点では、二の丸第17地点の出土遺物量が多く、報告書に掲載することが必要となる遺物点数も多数に上ることから、全体に進行状況は遅れ気味であった。また、

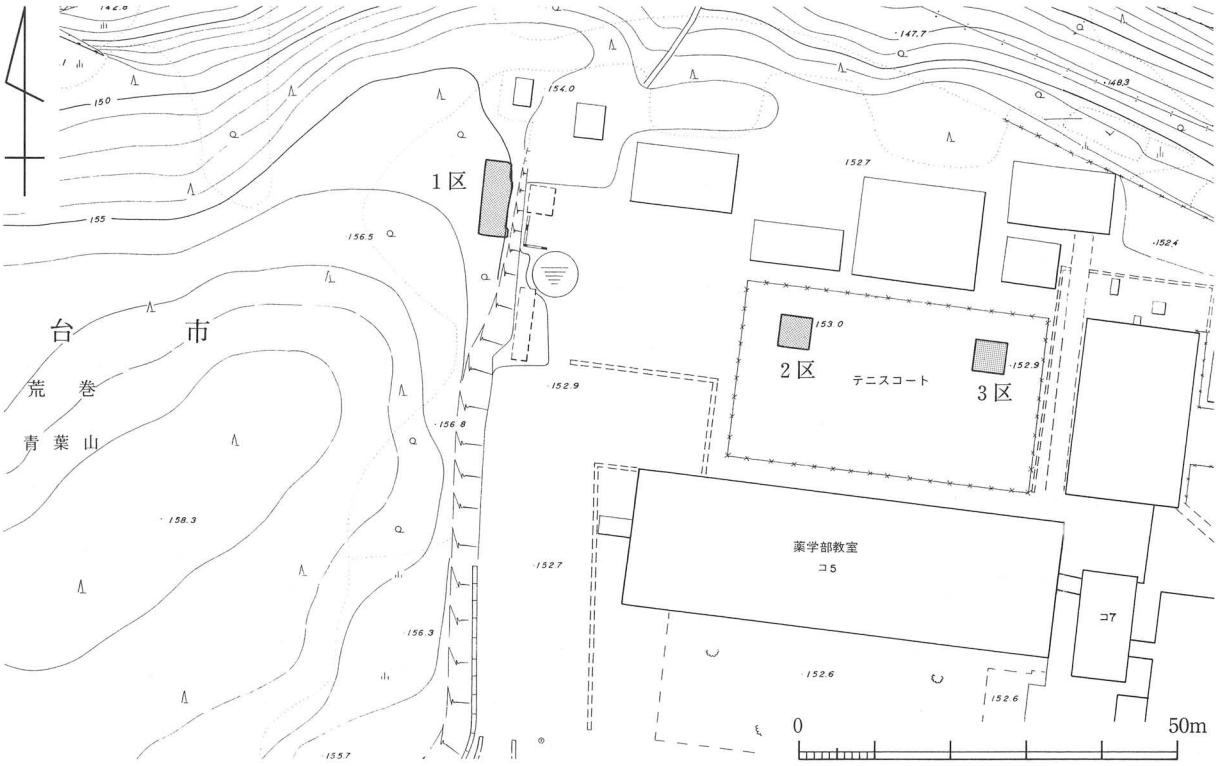
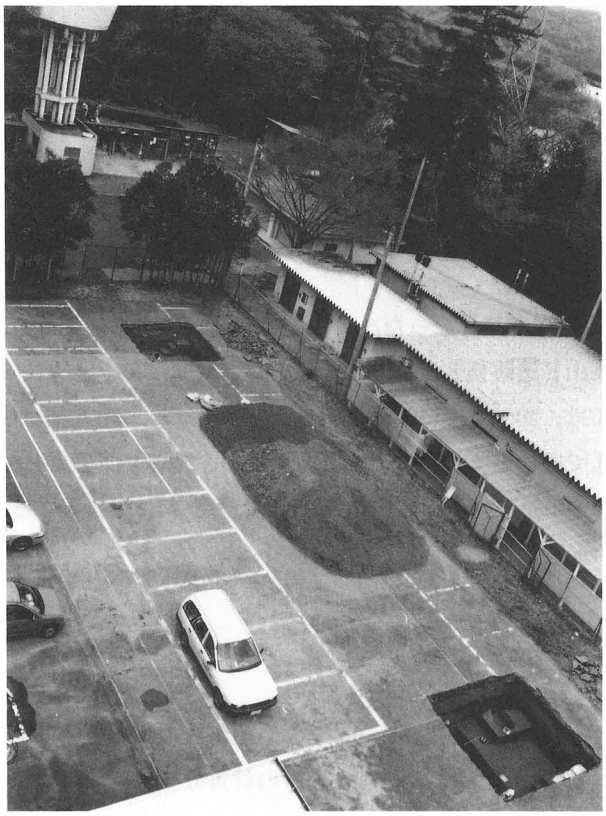
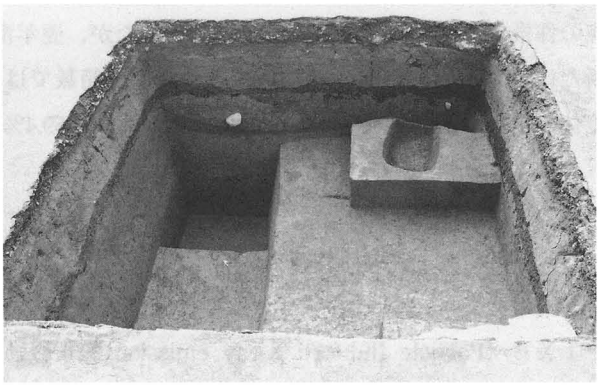


図6　応用薬学総合研究棟新営に伴う試掘調査区の配置
Fig.6　Location of trial trenches at the campus of Faculty of Pharmaceutical Sciences



1．調査区全景（南東から）

2．1区全景（南東から）



3．3区全景（東から）

図7　応用薬学総合研究棟新営に伴う試掘調査状況
Fig.7　Views of trial trenches at the campus of Faculty of Pharmaceutical Sciences

2001年度に調査を実施した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点においても、大量の遺物が出土しており、特に木製品の水洗など、基礎的な整理作業を急ぐ必要もあった。このような状況を鑑み、整理作業計画を一部組み直し、翌年度まで二の丸第17地点の整理作業を続けることとし、それに伴い年報18の印刷刊行も翌年度以降に先送りすることとした。そのため本年度は、調査年報は刊行していない。

５．保存処理事業

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、仙台城跡二の丸出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。この内、木製品と金属製品については、当センターで保存処理を進めてきている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール（ラクチトール）を利用した処理を行っている（年報16）。

本年度は、以前から実施している仙台城跡二の丸第９地点（1990年度調査・ＮＭ９）の出土木製品の処理を継続して行ったが、年度途中にようやく終了した。引き続き仙台城跡二の丸第12地点（1993年度調査・ＮＭ12）と二の丸北方武家屋敷地区第４地点（1994～1995年度調査・ＢＫ４）で出土した木製品の保存処理を行った。これらについては、処理が必要な木製品の数量が少なかったため、本年度で処理を終了した。

また、前年度に調査を実施した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点においては、植物繊維で編まれた俵、埋設され当初の形状を保っていた桶、犬の全身骨格など、大型で特殊な処理が必要な遺物が出土した。これらについては、早急に保存処理を施す必要があった。そのため、前年度の調査終了直後から対処を進めてきたが、当年度も引き続き作業を行った。

６．資料保管状況

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス＃32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜木箱を作成して収納している。全体の遺物総量を把握するために、容器の大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、これには入っていない。当センターの前身である東北大学埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、図８である。

2002年度末時点で、当センターで保管している遺物総量は3,043箱となった。前年度からは17箱の増加である。内訳は、青葉山Ｅ遺跡第７次調査の当年度分が15箱、青葉山Ｅ遺跡第８次調査が１箱、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点の出土遺物が１箱である。一方整理作業は、2000年度に調査を実施した仙台城跡二の丸第17地点の作業が、当年度で終了する予定であったが、翌年度まで継続して進めることとしたため、整理終了分として新たにカウントしたものはない。その結果、箱数では、1,809箱が整理・報告済みで、未整理は1,234箱となる。全体の箱数の内、整理・報告済みのものの比率は59.4％となった。

７．研究活動

(1) 受託研究・共同研究等

1999年度より、東北大学大学院工学研究科の量子エネルギー工学専攻量子ビーム工学講座からの提案を受けて、ＰＩＸＥ（Particle Induced X-ray emission 粒子線励起Ｘ線分析）による、考古資料の材質分析の共同研究を、同講座の石井慶造教授・山崎浩道助教授・松山成男助手と行ってきた。本年度は、考古科学シンポジウム世話人会事務局からの依頼を受け、その成果の一端を下記の要項で発表した。

第４回考古科学シンポジウム　2003年１月26日　國學院大學

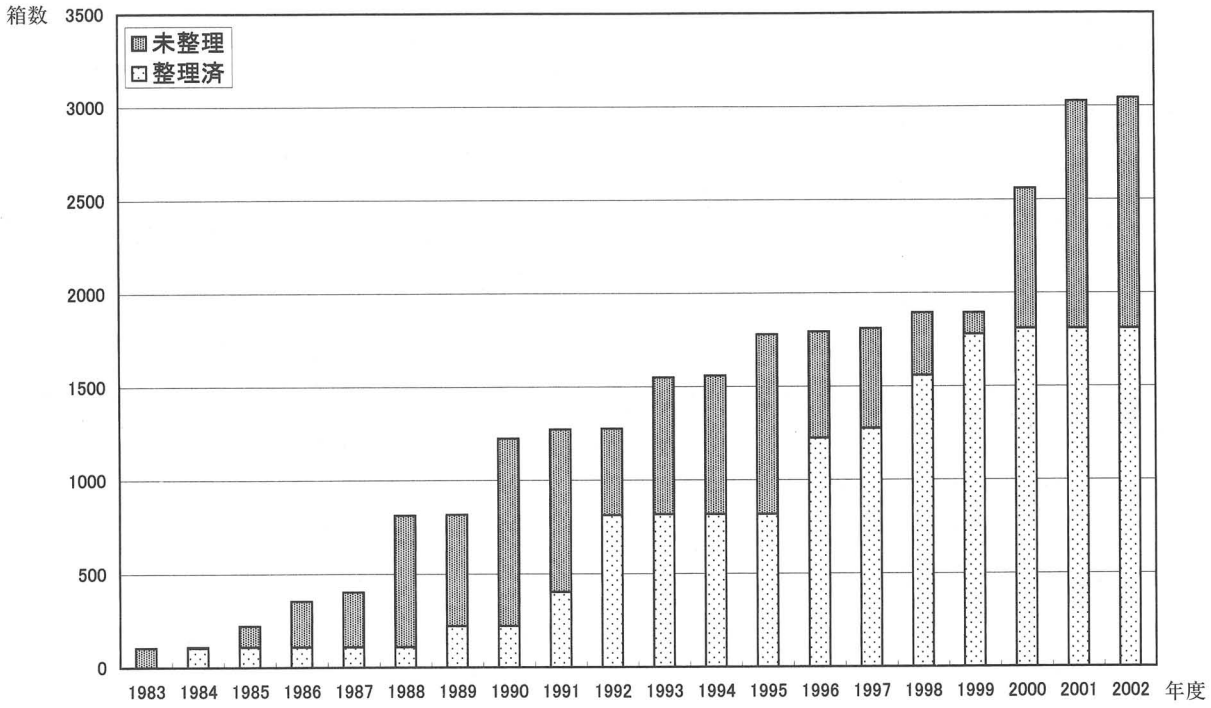


図８　収蔵遺物量の推移
Fig.8 Graph showing transition of amount of artifact in storage（showed by number of case）

松山成男・藤沢敦ほか「大気サブミリＰＩＸＥカメラを用いた仙台城二の丸跡出土遺物の材質分析」
当日の口頭発表も、松山・藤沢の両名で行った。

(2) 学会発表等

センターの業務にかかわる、学会での研究発表等としては、下記のものを行った。

北海道・東北保存科学研究会　2003年１月25・26日　於：東北芸術工科大学
「大型遺物の取り上げと保存処理」　発表者：京野恵子・千葉直美

前年度に調査を実施した、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点においては、俵や桶など有機質の大型遺物が出土した。これらは、発泡ウレタンで包埋して取り上げ、保存処理を行った。その内容について、まとめて発表したものである。

(3) 資料調査

センター業務に関わる資料調査等としては、以下の３件で、それぞれ担当する調査研究員が出張した。

2002年12月19～20日　保存科学研究集会「古代の色」　於：奈良文化財研究所　藤沢敦
2003年２月１～２日　江戸遺跡研究会第16回大会「遺跡からみた江戸のゴミ」
於：江戸東京博物館　高木暢亮
2003年１月21～23日　「考古科学国際会議－新世紀における考古科学－」　於：奈良県新公会堂　京野恵子

(4) 科学研究費採択状況

2002度に、当センター調査研究員で科学研究費等の交付を受けたものは、次のとおりであった。

高木暢亮　科学研究費補助金　研究成果公開促進費　学術図書（代表）
「北部九州における弥生時代墓制の研究」

8．教育普及活動

(1) 非常勤講師

2002年度は、当センターの調査研究員で、非常勤講師を担当したものはいなかった。

(2) 保管資料の貸出

当センター保管の資料の貸出等としては、次のとおりであった。

・貸出先：仙台市富沢遺跡保存館　ビデオ「石器の作り方－石刃」撮影
　貸出資料：青葉山Ａ遺跡採集石器３点
　撮影日時：2002年12月19日

・貸出先：土岐市美濃陶磁歴史館　第15回土岐市織部の日特別展「織部の流通圏を探る－東日本－」
　貸出資料：仙台城跡二の丸第９地点・二の丸北方武家屋敷地区第４地点出土陶磁器・煙管計13点
　貸出期間：2002年12月16日～2003年５月31日
　　合わせて、主催者からの依頼を受け、同特別展図録に、下記の遺跡解説を執筆した。
　　藤沢敦「仙台城二の丸跡・二の丸北方武家屋敷地区」

(3) 外部からの派遣依頼等

当センターの業務に関わって、あるいは調査研究員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があったのは、次のとおりであった。

担当者：藤沢敦

2002年12月４日	郡山市教育委員会　大安場古墳整備指導委員会
2003年３月５日	仙台市史城館部会

(4) 広報活動

2002年度は、当センターで実施した広報活動などはなかった。

第Ⅱ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（BK８）の調査

１．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史

東北大学の川内地区は、沢とその脇を東西に走る道路によって、川内南地区と北地区に分かれている。この川内南地区は仙台城二の丸が置かれた場所であり、北地区は家臣の屋敷が存在した区域に相当する。

仙台城は、仙台藩初代藩主である伊達政宗によって、慶長５年（1600年）12月24日の縄張始めを嚆矢として、本丸の築造が始められる。この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったと伝えられる。元和６年（1620年）には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八姫の居館である「西屋敷」が造られる。政宗死去後二代藩主となった伊達忠宗によって、寛永15年（1638年）に二の丸が造られると、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどは二の丸へ移される。二の丸は、元禄年間の改造によって、もとの「西屋敷」の敷地を取り込んで拡張され、幕末まで仙台城の中枢として機能していく。

仙台城下は、仙台城本丸の造営に伴って造られていく。慶長６年（1601年）の正月11日に、仙台城の普請始めが行われ、同じ日に「御城下地形ノ絵図ヲ以テ諸士等ノ屋敷割仰付ラル。」との記録が残されている（『貞山公治家記録巻之二十一』）。この時以降、城下の建設が進められていったものと考えられる。

正保２・３年（1645・46年）の『奥州仙台城絵図』においては、仙台城の周辺には、「侍屋敷」が広がっていたことが判り、おそらく本丸の造営が開始された頃から、屋敷が造られていったものと思われる。正保絵図は幕府提出用の絵図のため、細かな屋敷割は記されず、屋敷を使っていた人名は判らない。それ以降の藩政用絵図には、屋敷割が記され、人名が書き込まれたものが多くある。川内地区においては、大手門の周囲などに最も上級の家臣の屋敷が置かれ、それ以外の区域にも比較的上級の家臣の屋敷が多い。東北大学の川内北地区も、比較的上級の家臣の屋敷が置かれていた。

明治維新後、明治２年（1869年）の版籍奉還によって二の丸には勤政庁が置かれる。さらに明治４年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り、東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。二の丸建物は、明治15年（1882年）の火災で、ほとんどが焼失する。明治21年（1888年）には、仙台鎮台が廃止され、陸軍第二師団が設置され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には、第二師団の司令部が置かれた。

川内地区の仙台城周辺の武家屋敷地も、明治に入ると取り壊され、その多くは後の第二師団の用地となっていく。東北大学川内北地区には、第二師団の歩兵隊や輜重隊などが置かれていた。なお、この地区での武家屋敷の変遷や、明治以降の変化については、二の丸北方武家屋敷地区第７地点の調査成果を取りまとめた、年報19の第１分冊において詳しく検討しているので、そちらも参照されたい。

戦後は、川内地区一帯が米軍の駐留地となる。昭和32年（1957年）に米軍から返還された後、川内北地区には東北大学教養部が、川内南地区には文系４学部や図書館などが置かれ、現在に至っている。

２．調査経緯

(1) 2001年度までの調査

東北大学の川内北地区は、仙台城二の丸にすぐ隣接し、密接に関連する家臣の屋敷が広がっていたことから、周知の遺跡である仙台城跡の範囲に含められている。当センターでは、この区域を、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区と呼称している。

この二の丸北方武家屋敷地区では、1979年にごく小規模な調査が実施されたことがあるが、それ以外の調査は、当センター（前身の調査委員会を含む）によって実施されたものである。これまでに第１地点から第７地点までの調査が行われている。この内、1984年度に実施した第１地点は、試掘調査である。2001年度に、第１地点と一

部重なる区域で第７地点の調査を実施している（年報19）。1985年度に実施した第２地点と第３地点の調査については、立会調査で終わっているため欠番としている（年報３）。したがって、実質的には、第４地点から第７地点の４ヶ所を調査していることとなる。この内、第５地点（年報７）と第６地点（年報14）は、ごく小規模な調査であった。第４地点（年報13）と第７地点の２ヶ所が、まとまった面積の調査となる。いずれの調査においても、多数の遺構と、膨大な数の遺物が出土している。検出遺構の中には、江戸時代初頭に遡るものもあり、これらの区域における武家屋敷の整備が、江戸時代初頭まで遡ることが明らかとなっている。また、明治時代になり武家屋敷が取り払われた後、軍隊が使うまでの間に、畝状の遺構が広がり、畑として利用された時期があることが判っている。

(2) 調査地点の位置

今回の調査地点は、川内北地区厚生会館のすぐ前の場所で、広場となっており、アスファルト舗装されている（図９）。仙台城二の丸には、通用門である台所門が北側にあり、そこから北へ道路が延びていた。この道路は、千貫沢を土橋で渡り、北側の武家屋敷に続いていた。今回の調査地点は、この千貫沢を渡って、さらに進んだ付近にあたる場所である。

今回の調査地点から、厚生会館をはさんだ東側110m程のところに、第４地点の調査区がある（年報13）。今回の調査地点のごく周辺では、立会調査は多数実施しているが、発掘調査は実施されたことはない。

(3) 調査の方法と経過

2003年２月21日に、当センターのセンター長が、川内北地区厚生会館前で掘削工事が実施されている場所に遭遇した。連絡を受けたセンターから施設部に照会したところ、年度末近くになって実施された営繕工事で、施設部内での連絡調整のミスから、無届けのまま工事が着手されたことが判明した。直ちに工事を中止させるとともに、調査研究員が現地に急行し、現状の確認を行った。

工事は、厚生会館の前に上屋を設けるためのもので、10m×10mの範囲全体を地表下50cmまで掘削した上で、４本の支柱を立てるための基礎部分を、地表下2.5mまで掘削するものであった、全体を50cm下げる掘削は終わり、４ヶ所の基礎の内、３ヶ所については掘削が終了し、北西側の１ヶ所のみが残されている状況であった。

工事で掘削された壁面を精査して検討したところ、一部は攪乱によって破壊されているものの、全体に近代以降の削平は行われておらず、江戸時代の遺構面が残存していたことが明らかとなった。既に深掘りが終了していた３ヶ所については、完全に破壊されてしまっており、壁の断面が残るだけであった。深掘りが為されていない１ヶ所については、江戸時代の遺構面が残存していることが明らかとなったため、この区域については記録保存のための調査を実施することとなった。

仙台市教育委員会と宮城県教育委員会との調整を行い、各種手続きが終了した後の、３月13日から19日の期間で調査を実施した。

調査を行った部分の平面図は縮尺1/20、遺構断面図は縮尺1/10で作成した。外周壁の断面図は、縮尺1/20で作成した。写真は、35mmのモノクロとカラーリバーサルで撮影した。

３．基本層序

ほとんどが平面精査を行っておらず、断面だけでの検討であるため、確実でない部分も多く残る結果となっている。これまでに実施した第４地点・第７地点での知見も合わせて、次のように分層した（図11）。

１層・攪乱

明らかに近代以降と考えられる整地層や攪乱、および現在の表層となるアスファルトとその基盤層を、まとめ

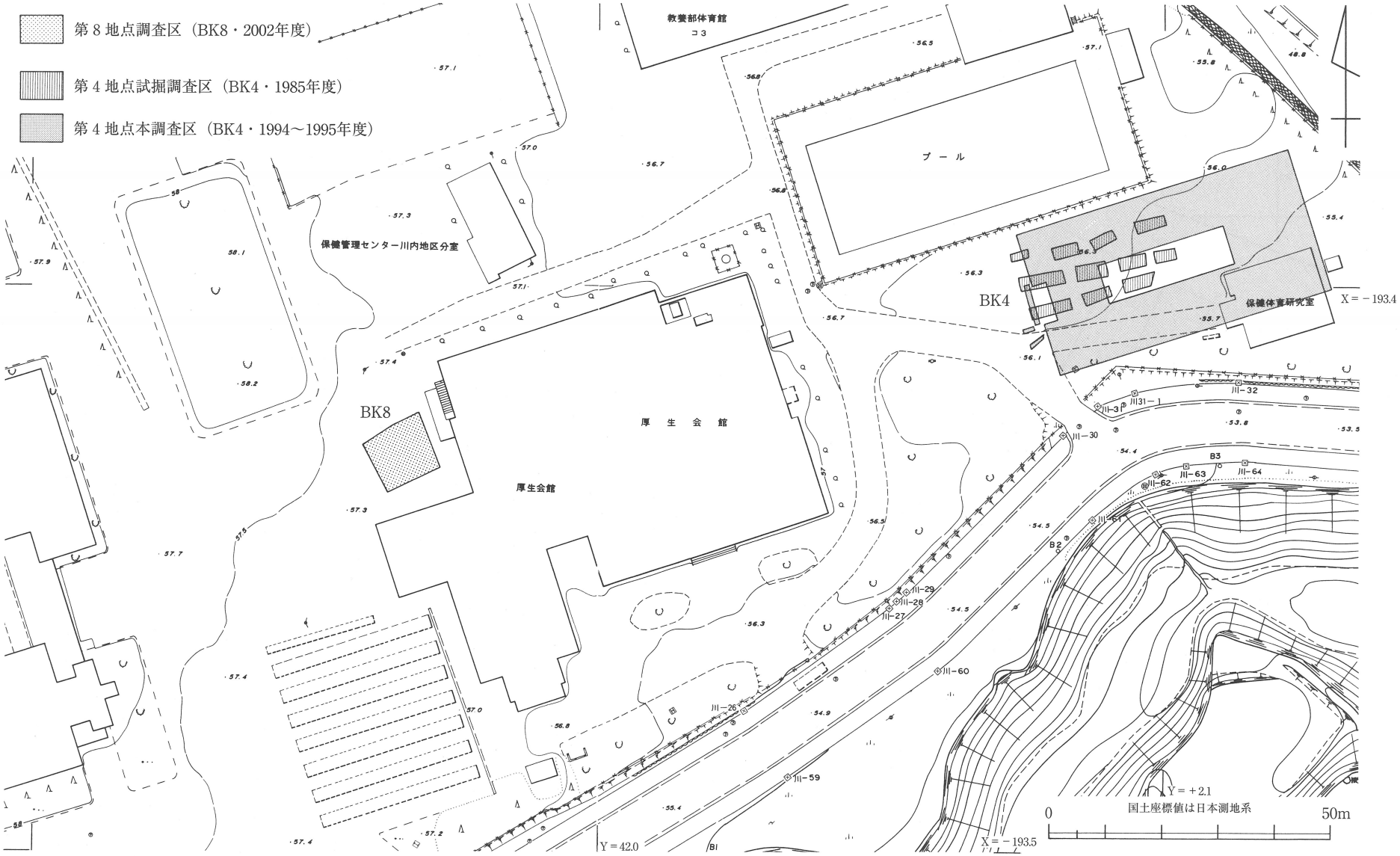
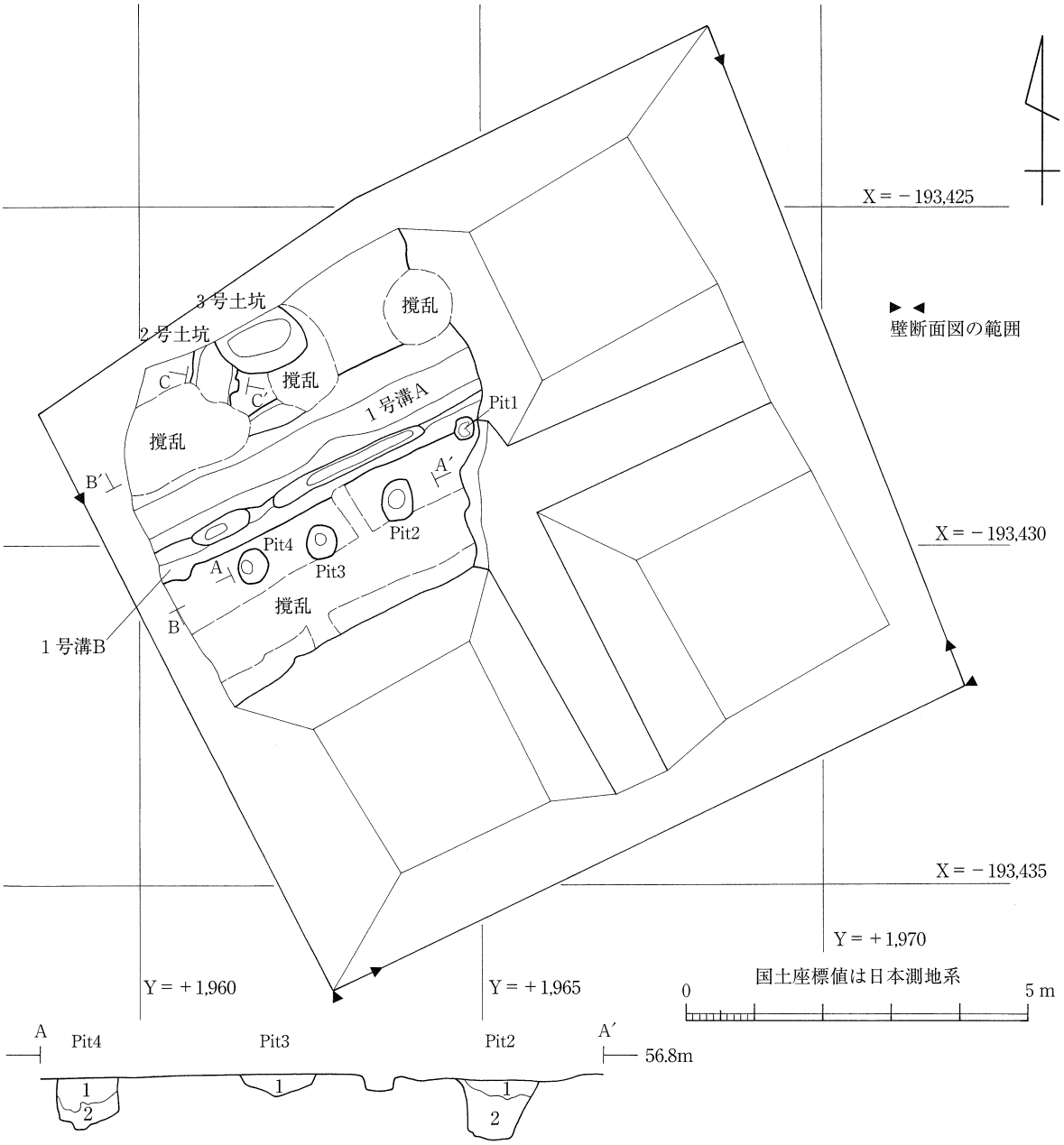
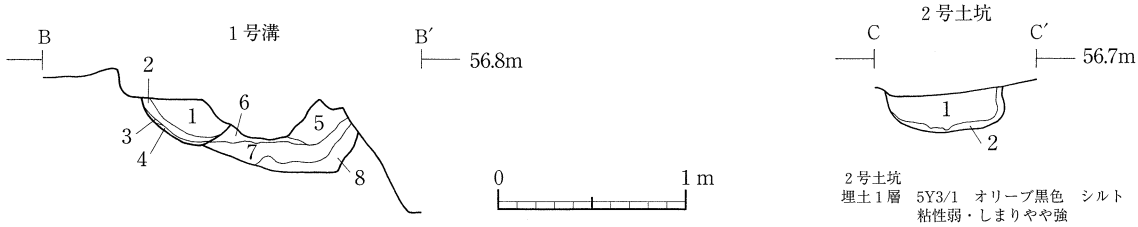


図９　武家屋敷地区第８地点調査区の位置
Fig.9　Location of BK8（BK8 i.e. Location 8 of *samurai* residence）



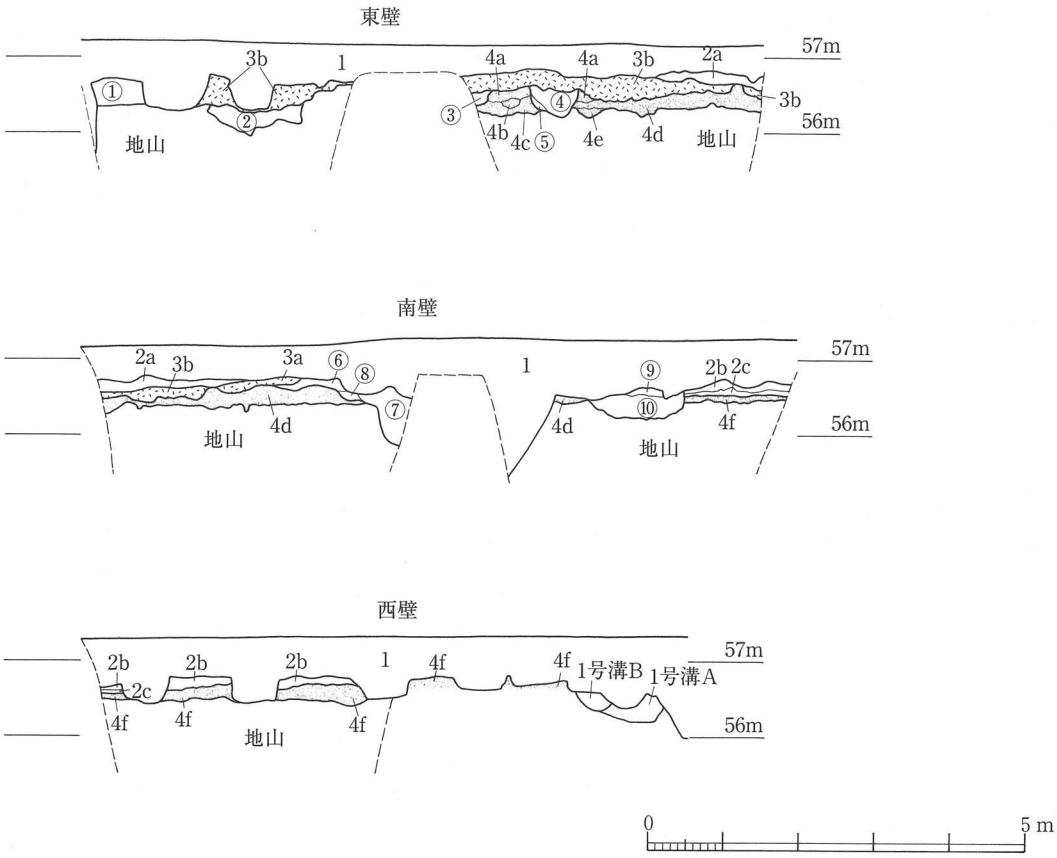
Pit 2　埋土１層　10YR4/2　灰黄色　シルト　粘性弱・しまり強　暗灰黄色シルト含む　小礫・白色粒子を少量含む
　　埋土２層　10YR4/6　褐色　シルト　粘性中・しまり中　暗褐色シルト含む　炭化物・白色粒子少量含む
Pit 3　埋土　5Y4/1　灰色　シルト　粘性弱・しまり強　褐色シルト含む　小礫・炭化物少量含む　白色粒子多く含む
Pit 4　埋土１層　5Y4/1　灰色　シルト　粘性弱・しまり強　オリーブ褐色・暗褐色　シルト含む　炭化物・小礫を少量含む　白色粒子多く含む
　　埋土２層　7.5YR3/4　暗褐色粘土質シルト　粘性強・しまり中　暗褐色シルト含む　炭化物・白色粒子わずかに含む



2号土坑
埋土１層　5Y3/1　オリーブ黒色　シルト
　　粘性弱・しまりやや強
　　黒色・オリーブ黒色土ブロック含む
　　白色・黄色土粒含む　小礫わずかに含む
埋土２層　2.5Y4/3　オリーブ褐色　粘土質シルト
　　粘性やや強・しまり強　黄褐色土粒含む

1号溝
1　1号溝B埋土１層　2.5Y3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり強　褐色シルト含む　小礫・白色粒子わずかに含む
2　1号溝B埋土２層　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり強　褐色シルト含む
3　1号溝B埋土３層　10YR4/6　褐色　シルト　粘性中・しまり強　黒褐色シルト少量含む
4　1号溝B埋土４層　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり強　褐色シルト含む
5　1号溝A埋土１層　2.5Y3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり強　オリーブ褐色シルト含む　白色粒子わずかに含む
6　1号溝A埋土２層　10YR4/6　褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　黄灰色・黒褐色シルト含む　白色粒子わずかに含む
7　1号溝A埋土３層　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり強　褐色シルト・暗褐色シルト含む
8　1号溝A埋土４層　10YR4/6　褐色　シルト　粘性中・しまり強　上部に黄灰色シルト含む

図10　武家屋敷地区第８地点検出遺構平面図・断面図
Fig.10　Plans and cross sections at BK8



1　表土・近代以降の整地層・攪乱
2a　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　にぶい黄色土粒・炭化物わずかに含む
2b　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物粒わずかに含む
2c　10YR6/8　明黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　にぶい黄褐色土ブロック含む
3a　7.5YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色土ブロック・酸化鉄わずかに含む　炭化物を少量含む
3b　7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色シルトブロック・酸化鉄含む
4a　10YR4/4　褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色シルト多く含む　マンガン粒・黄褐色土粒含む
4b　7.5YR4/1　褐灰色　シルト　粘性弱・しまり中　黄褐色粘土小ブロック・酸化鉄・マンガン粒含む
4c　10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　明黄褐色土小ブロック・マンガン粒含む
4d　10YR4/6　褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黄褐色土粒・炭化物粒わずかに含む
4e　10YR6/8　明黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　褐色粘土わずかに含む　黄褐色土粒・マンガン粒含む
4f　10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色土小ブロック・炭化物粒わずかに含む
地山　10YR7/6　明黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　黄灰色シルト・マンガン粒・酸化鉄含む
①　遺構？埋土
10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黒褐色土・酸化鉄少量含む
②　遺構埋土
10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色シルトブロックを含む　酸化鉄多量含む
③　遺構？埋土
10YR4/4　褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　黄褐色粘土ブロック・マンガン粒含む
④　遺構埋土１層
10YR4/2　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　明黄褐色粘土質シルトブロック・酸化鉄含む　炭化物粒・小礫わずかに含む
⑤　遺構埋土２層
7.5YR6/1　褐灰色　粘土　粘性強・しまり強　黄褐色粘土ブロック・マンガン粒含む
⑥　遺構埋土１層
10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色土ブロック含む　酸化鉄・マンガン粒少量含む
⑦　遺構埋土２層
10YR4/6　褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色土ブロック含む　マンガン粒わずかに含む
⑧　遺構埋土３層
10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色土ブロック含む　マンガン粒わずかに含む
⑨　遺構埋土１層
10YR4/6　褐色　シルト　粘性中・しまり中　マンガン粒わずかに含む
⑩　遺構埋土２層
10YR5/6　黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　にぶい黄褐色土ブロック含む　マンガン粒多く含む　白色土粒わずかに含む

図11　武家屋敷地区第８地点外周壁断面図
Fig.11　Cross sections of excavation at BK8

て１層・攪乱とした。

２層

明治初頭の耕作土と考えられる３層より上位にあり、比較的均質な整地層である。第４地点の調査においては、明治時代の第二師団関係の建物建設に伴う整地層が確認されており、一部は今次調査の２層に類似している。そのため、今次調査における２層は、この第４地点の明治時代の整地層に対応する可能性が考えられる。

３層

暗褐色から黒褐色を呈し、黄褐色ブロックを少量含む以外は、均質な層である。第４地点で確認された、明治初頭の畑の耕作土と、層相が類似することから、同様の耕作土と考えた。

４層

場所による変化が大きいが、３層より下位に位置し、江戸時代の表土層と考えられる。地山と接する部分は、漸移的に変化していく場所もある。

精査を行った北西側以外の区域においても、壁面の断面観察から遺構と考えられる落ち込みが確認できる。この内、東壁に現れる図11で②とした遺構は、位置関係から見て、精査を行った北西部の１号溝がここまで延びているものと思われる。ただ、１号溝は新旧２時期に分かれるが、東壁で確認できるものが、そのどちらであるかは判断し難い。

４．検出遺構

今回の調査において確認された遺構は、溝が２条、土坑２基、ピット４基である（図10）。１号溝Ａと３号土坑の間の攪乱は、掘り込み面が判らないため、当初は１号土坑として調査した。ところが、大型のブロックが入る、きわめて不均質な埋土であることが判明した。このような埋土は、近代以降の攪乱と類似することから、１号土坑は欠番とし、攪乱として取り扱うこととした。ここからは、遺物は出土しなかった。

【１号溝Ａ】

１号溝は、ほぼ同じところで新旧２時期の溝が重なっている。溝のほぼ中心に、同じ方向で延びる近現代の土管埋設のための掘り方による攪乱があり、溝の重複を認識できなかった。底面近くまで掘り上げた段階で、新旧２時期に分かれることが判明した。そのため、古い溝を１号溝Ａ、新しい方を１号溝Ｂとした。

南西から北東方向に延びる素掘りの溝で、方向は、Ｎ－64°－Ｅである。ほぼ埋まりきった後に、南岸よりに、１号溝Ｂが掘られている。中央付近の埋土上部は、近代以降の土管掘り方で破壊されている。北岸は、攪乱で壊されているところが多い。南岸が１号溝Ｂで壊されているため、上幅は明らかではないが、おおむね120～130cm程度になるものと推定される。下幅は35～50cmで、深さは50cm前後である。調査範囲内では、底面レベルにはあまり差が認められなかった。埋土は自然堆積と思われるが、水流の影響を受けたような堆積ではない。常に水が流れていた様子は、想定し難い。遺物は出土しなかった。

【１号溝Ｂ】

１号溝Ａの南岸を壊して、造られた素掘りの溝である。当初、１号溝Ａと１号溝Ｂを区分できていなかったため、北岸は検出できていない。断面観察では、土管掘り方によって、北岸はほとんど破壊されているものと思われる。方向は、Ｎ－63°－Ｅで、１号溝Ａとほぼ同じ方向である。1号溝Ａが埋まった後、ほぼ同じところで造り直した溝と思われる。断面での観察では、上幅は60cm程度と推定され、下幅は10cm程度である。底面は、所々がわずかに深くなっており、深さは、30～50cmである。埋土は、自然堆積とも思われるが、水流の影響を受けたような様相は認められない。日常的に水が流れていたとは考え難い。遺物は、埋土１層より、織部の小中皿、瓦質土器の火鉢、石器が各１点出土している他、瓦の小片が11点出土している。

【２号土坑】

攪乱で壊され、全体形状は不明であるが、溝状になる可能性もある。３号土坑を切っている。１号溝Ａとの関係は、間に攪乱があるため判らない。東西の幅は60cm、深さ25cm前後である。壁は垂直に近く立ち上がる。遺物は出土しなかった。

【３号土坑】

南東側の攪乱と２号土坑によって切られ、当初は確認できなかった。攪乱と２号土坑を掘り上げた段階で、さらに深い遺構が北壁沿いに存在することが判明した。やや東西に長い楕円形に近い平面形態と思われ、東西の幅は約120cm、深さは40cm程である。遺物は出土しなかった。

【ピット】

ピットは４基検出した。ピット１が１号溝Ｂを切っている他は、切り合い関係はない。平面形は、円形から隅丸方形で、ピット１は径30cm程と小さいが、ピット２～４は、径50～60cm程である。深さは、ピット１が５cm、ピット３が13cmと浅く、ピット２が35cm、ピット４が30cmとやや深い。当初は、ピット２～４が並ぶため組み合うものかとも考えたが、深さが異なっており、組み合うとすればピット２と４だけであろうか。遺物は、ピット２の埋土より、瓦の小片が１点出土しただけである。

５．出土遺物

(1) 江戸時代以前の遺物

江戸時代以前の遺物としては、石器が２点出土している。

【石器】

２点とも、２次加工が施された剥片である（図12－Ｓ１・Ｓ２）。

Ｓ１は、１号溝Ｂ埋土１層から出土した。剥片の腹面に二次加工を施し、抉りを入れている。石材は頁岩である。

Ｓ２は、１層・攪乱からの出土である。一端が大きく折れているため、本来の形状は明らかでない。背面側に二次加工が施されている。石材は頁岩で、緻密な良質のものである。

二の丸北方武家屋敷地区第４地点では、江戸時代以前に遡る自然の沢状の落ち込みが検出され、その埋土最上部から、縄文時代中期前葉、弥生時代前期後半から中期中頃にかけての、縄文土器・弥生土器と石器が出土している（年報13）。また、二の丸北方武家屋敷地区第７地点においても、縄文時代と思われる陥し穴が検出され、石器も出土している（年報19）。千貫沢を渡った二の丸地区でも、第４地点で石器が出土している（年報５）。このように川内地区では、縄文時代や弥生時代の遺構・遺物が発見されており、まとまった遺構は未発見ではあるが、これらの時期においても生活の舞台となっていたと考えられる。今回出土した石器も、詳細な時期は判らないが、これまで発見されているものと、一連のものである可能性が考えられる。

(2) 江戸時代以降の遺物

江戸時代以降の遺物には、陶器・磁器・瓦質土器・瓦・金属製品がある。ほとんどが、１層・攪乱からの出土で、遺構で遺物が出土したのは、ピット２と１号溝Ｂのみである。

【陶器】

２点出土している。１点は、１号溝Ｂ埋土１層から出土した織部の皿である（図12－Ｃ１）。見込みに高台の熔着痕があり、重ね焼きで作られた大量生産品である。近年の消費地遺跡での研究成果を踏まえると、おおむね1620年頃のものと考えられる。

もう１点は、小片のため図示していないが、１層・攪乱から出土した志野の向付である。

【磁器】

８点出土しているが、全て１層・攪乱からの出土である。小片ばかりであり、図示したものはない。この内の２点は、摺絵が施された、近代以降のものである。

【瓦質土器】

１号溝Ｂの埋土１層より、瓦質土器の火鉢が１点出土している（図12－Ｃ２）。底部付近だけの残存で、口縁部形態などは判らない。

【瓦】

合計18点が出土している。ピット２や１号溝Ｂからも出土しているが、いずれも小片であり、全体の特徴などが判明するものはない。そのため、図示したものもない。年報18で示した分類基準にしたがって集計した。

【金属製品】

古銭６点と煙管の吸口１点が出土しているのみである。いずれも、１層・攪乱からの出土である。

古銭は全て寛永通宝で、新寛永で占められる（図12－Ｍ１～Ｍ６）。この６点は、出土時には錆着して一固まりになっており、紐に通された銭差の状態になっていたものと考えられる。煙管の吸口は、やや小振りなもので、ラウが一部残っている（図12－Ｍ７）。

６．まとめ

今回の調査は、ごく小規模なものであったため、得られる情報は少ない。それでも、いくつかの注目できる成果があった。

川内北地区は、もともとは西から東に緩やかに下っていく地形であったが、明治以降の造成工事によって、平坦面が造られたことが判明している。そのため、段差のすぐ下にあたる場所では削平が大きく、江戸時代の遺構面は残っていない。しかし、今回の調査地点の付近では、このような削平は江戸時代の遺構面までは及んでいないことが明らかとなった。

調査が限られた面積であったため、検出遺構がどのような性格を有しているのかを検討することは難しい。年代が推定できるような遺物もほとんどない。年代が推定できる唯一の遺物は、１号溝Ｂ埋土１層から出土した織部の皿で、1620年頃のものと考えられる。他に年代が判明するような遺物がないため、この織部の皿が、１号溝Ｂに伴うと断定することはできない。しかし、約半分がまとまって出土しており、少なくとも飛び散ったような遺存状況ではない。そのため、確実ではないものの、この１号溝Ｂに伴う遺物である可能性が高いと言えよう。この皿は、重ね焼きで作られた大量生産品であるため、長期間に渡って使われ続けたとは考え難い。従って１号溝Ｂは、17世紀前葉頃に機能していた溝と考えて良いであろう。この１号溝Ｂに先行する１号溝Ａは、さらに遡ることは明らかである。１号溝Ｂの年代を、上記のように考えるならば、１号溝Ａは江戸時代初頭まで遡る可能性があると考えられる。二の丸北方武家屋敷地区では、第４地点と第７地点でも、江戸時代初頭に遡る遺構が検出されている。今回の調査成果を合わせて考えるならば、川内北地区の、かなり広い範囲に江戸時代初頭から遺構が広がっている可能性を想定することもできる。このことは、仙台城周辺の武家屋敷の整備の進み方を考える上で、重要な問題であると言えるであろう。

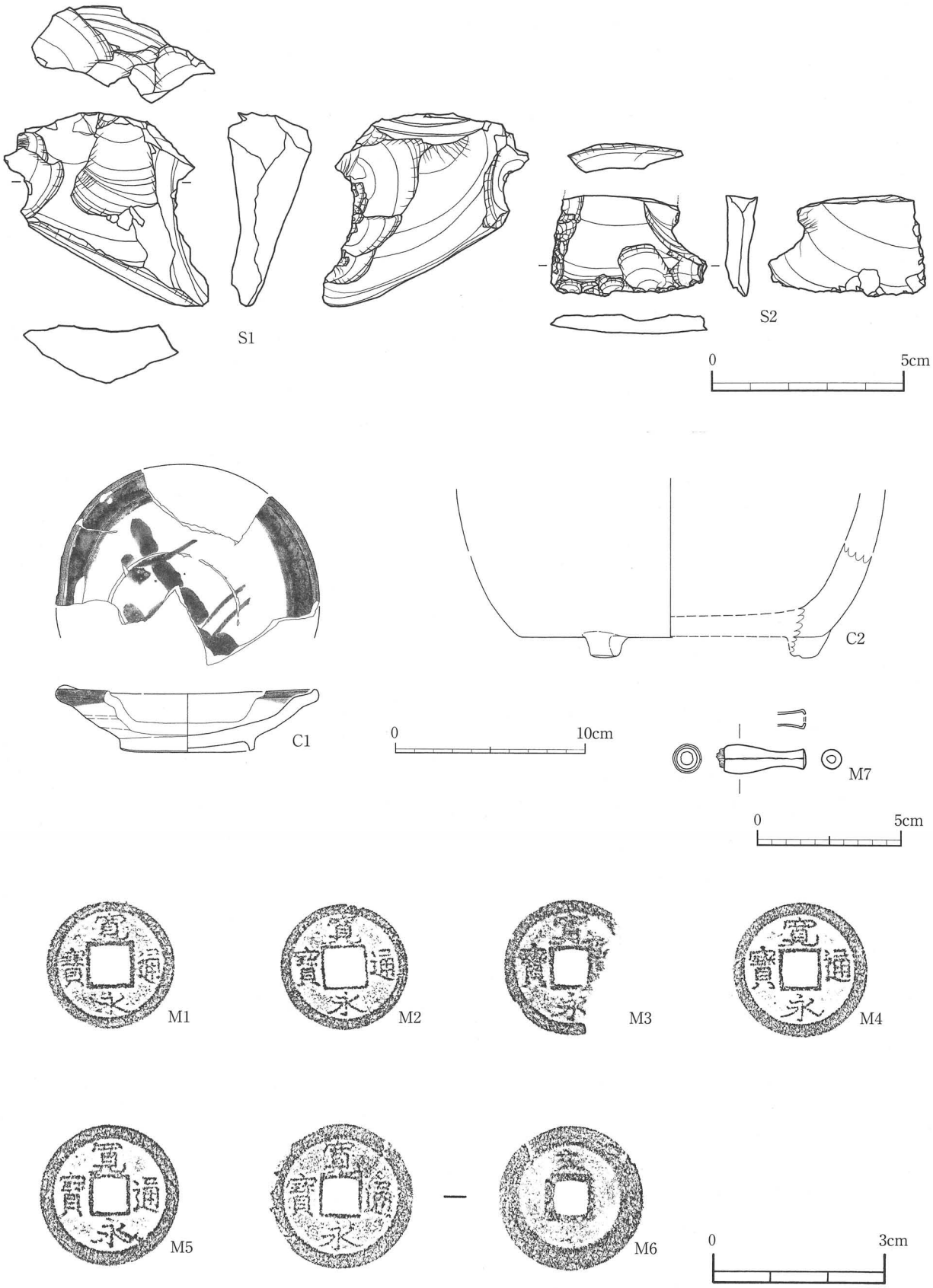


図12　武家屋敷地区第８地点出土遺物
Fig.12　Various implements from BK8

表２　武家屋敷地区第８地点出土遺物集計表
Tab.2　Distribution of various implements at BK8

	陶器		磁器			瓦質土器	石器	金属製品		瓦					
	小中皿	向付	中碗丸形	小碗端反	小中皿	火鉢	2次加工ある剥片	古銭	煙管	丸瓦類	平瓦類	平瓦1類	平瓦2類	桟瓦類	不明
１層・攪乱		1	4	1	3		1	6	1	2				1	1
ピット２															1
１号溝Ｂ埋土１層	1					1	1			1	2	3			5
１号溝Ｂ最下層												1	1		
合計	1	1	4	1	3	1	2	6	1	3	2	4	1	1	7

表３　武家屋敷地区第８地点出土遺物観察表
Tab.3　Notes on various implements at BK8

登録番号	出土場所	種類	法量	特徴	図	図版
Ｓ１	１号溝Ｂ埋土１層	石器	長50.0mm・幅49.8mm・厚15.5mm		12	2
Ｓ２	１層・攪乱	石器	長25.7mm・幅40.0mm・厚6.7mm		12	2
Ｃ１	１号溝Ｂ埋土１層	陶器・小中皿	口径14.0cm・底径7.0cm・器高3.6cm	織部、灰釉（灰色）・青釉流掛、鉄絵松文（暗赤褐色）・見込み高台熔着痕、胎土やや密、美濃（大平系）、17世紀前葉	12	2
Ｃ２	１号溝Ｂ埋土１層	瓦質土器・火鉢	底径15.8cm	外面ミガキ・内面ロクロナデ、三足？	12	2
Ｍ１	１層・攪乱	古銭・寛永通宝	外径22.3mm・穿径6.5mm・重量1.9g	新寛永、完形	12	2
Ｍ２	１層・攪乱	古銭・寛永通宝	外径22.0mm・穿径6.5mm・重量1.8g	新寛永、ごく一部欠損	12	2
Ｍ３	１層・攪乱	古銭・寛永通宝	外径23.9mm・穿径5.9mm・重量1.6g	新寛永・「俯頭永」、1/4欠損・錆化顕著	12	2
Ｍ４	１層・攪乱	古銭・寛永通宝	外径23.5mm・穿径5.7mm・重量2.5g	新寛永・「ハネ永」、完形	12	2
Ｍ５	１層・攪乱	古銭・寛永通宝	外径24.5mm・穿径5.5mm・重量3.2g	新寛永、ごく一部欠損	12	2
Ｍ６	１層・攪乱	古銭・寛永通宝	外径25.3mm・穿径5.6mm・重量3.4g	新寛永・文銭、ごく一部欠損	12	2
Ｍ７	１層・攪乱	煙管・吸口	長28.5mm・ラウ口径9.1mm・吸口径7.0mm	一本の管からなり肩を作出せず、ラウ一部残存	12	2

第Ⅲ章　青葉山Ｅ遺跡第７次調査（ＡＯＥ７）

１．位置と環境

仙台平野を東流する広瀬川の中・下流域には河岸段丘が発達している。広瀬川流域の河岸段丘は、低いほうから、下町段丘、中町段丘、上町段丘、台の原段丘、青葉山段丘に大別される。これらの段丘のうち最も古く形成された青葉山段丘はⅠ～Ⅳ面の４つの面に分かれるが、理学研究科・工学研究科・薬学研究科が所在する東北大学青葉山地区は、低いほうから２つ目の第Ⅲ面、標高約150ｍの地点に位置する。本遺跡が所在する第Ⅲ面には愛島軽石層より上位の指標テフラのみが存在する（大月義徳1987）。

青葉山地区では縄文時代・弥生時代・古代の遺構や遺物が調査・採集されており、東北大学構内には青葉山Ｂ遺跡と青葉山Ｅ遺跡が存在する。今回報告するのは青葉山Ｅ遺跡の第７次調査である。

２．調査経緯

(1) 2001年度までの調査

青葉山地区には青葉山Ｂ遺跡と青葉山Ｅ遺跡が存在し1984年以来発掘調査が行われているが、青葉山Ｅ遺跡ではこれまで６次の調査が実施されている。1984年の理学研究科化学機器分析センター新営に伴う第１次調査では陥し穴状の遺構が検出された（年報２）。1993年の青葉山地区基幹整備に伴う第２次調査では縄文時代早期・縄文時代中期・平安時代の遺物が発見され、青葉山Ｅ遺跡の範囲が大きく広がっていることが明らかとなった（年報11）。1994年に行われた理学研究科自然史標本館の新営に伴う第３次調査では、縄文時代早期後葉の住居跡２棟が発見され、この時期に集落が存在していたことが確認された。また、4000点近い貝殻条痕文土器・石器が出土し、新たな土器型式「青葉山Ｅ式」が提唱された（年報12）。1995年の理学研究科研究実験棟新営（１期）に伴う第４次調査では、陥し穴が検出され、青葉山Ｅ式土器の分布のほか、縄文時代晩期の土器の集中地点が確認された（年報13）。1996年の青葉山基幹整備受水槽・ポンプ室新営に伴う第５次調査では、陥し穴と考えられる遺構を検出している。また縄文時代早期の遺物が出土した（年報14）。1997年の理学研究科研究実験棟新営（２期）に伴う第６次調査では陥し穴状の遺構が検出されているほか、縄文時代早期、中期の土器が出土している。また地すべりによる地層のずれが検出された（年報15）。

以上の調査によって、縄文時代早期後葉の遺物の分布が青葉山Ｅ遺跡の複数地点にまたがって広く分布していることが明らかとなった。また縄文時代中期、晩期の遺物も確認され、これらの時期にも利用されていたことが判明している。

(2) 調査地点の位置

調査地点は、理学研究科地学系学科教室の南を東西に走る道路と、宮城教育大学方面への道路に挟まれた部分に位置し、理学研究科研究実験棟南側の場所にあたり、６次調査地区に隣接する（図13）。調査実施以前は大部分がテニスコートとして使用されていた部分である。調査は理学研究科研究実験棟の３期工事に先立って行われた。調査区北側と東側が６次調査区と接しており、今回の調査では６次調査区で検出されたものに連続する地すべり痕が検出された。

(3) 調査の方法と経過

理学研究科研究実験棟は１～３期に分けて建設工事が進められる計画であった。2001年度に、２期工事分の事業化が認められたため、この２期工事と並行しつつ３期工事区域の調査を実施することとなった。2001年度は２

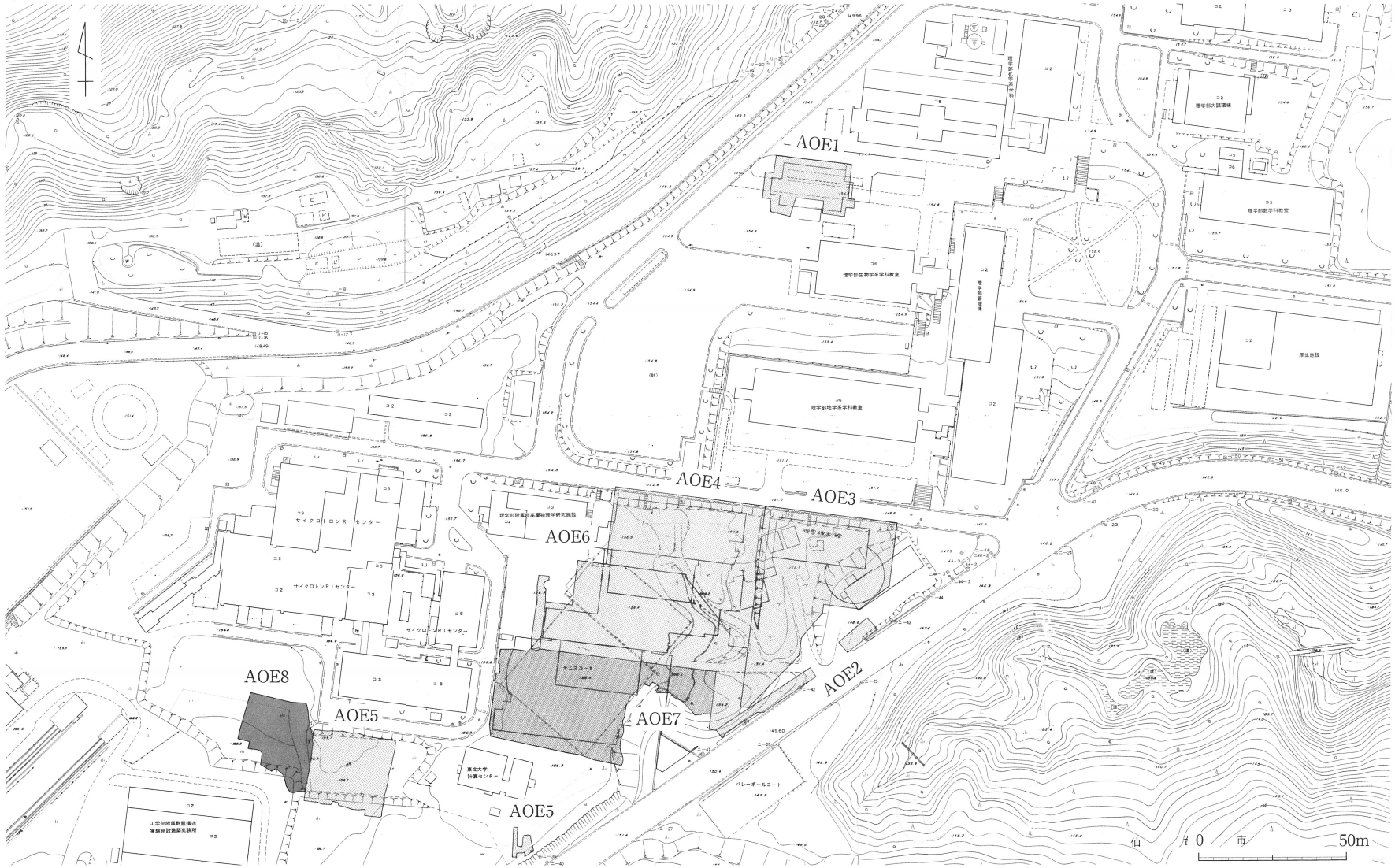


図13　青葉山E遺跡第７次調査区・第８次調査区の位置
Fig.13　Location of AOE7 and AOE8（AOE7,AOE8 i.e. the 7th and 8th excavation of Aobayama site Loc.E）

期分の工事との関係で、先行して調査する必要のある区域のみを11月１日から19日にかけて調査した。2002年度の調査も２期分の建設区域に隣接しており、建設作業に伴う資材置き場や工事関係車両の進入路、建設業者のプレハブの確保などを配慮して調査を進める必要があったため、調査区全域を一度に調査することはできなかった。そのため、建設作業の進行に合わせて複数の調査区を設定する必要があり、調査自体も2002年５月７日～11月22日、2003年３月10日～28日に分けて実施した。

調査区はＩａ区からⅦ区の９区に分かれる。2001年11月の調査ではＩａ区・Ｉｂ区、2002年５月～11月の調査ではⅡａ区～Ⅵ区、2003年３月の調査ではⅦ区の調査を行った（図14）。本調査区は６次調査区の南側に隣接しているため、３～６次調査区の調査グリッドを継続してグリッドの設定を行った。

各調査において、重機で１層を除去した後、２層から手掘りで精査に入った。３層以下のローム層については調査区南壁沿いの３ヶ所と調査区内の７ヶ所、計10ヶ所で、層序と旧石器時代の遺構・遺物の有無を確認するために深掘調査区を設けて試掘を実施した（図14）。深掘試掘区で旧石器時代の遺構と遺物は確認されなかった。

出土した遺物は日時、位置、層位、標高を記録して取り上げた。２層を掘り下げながら遺構の確認を行ったが、遺構プランの確認は２層下部では難しく、ほとんどの遺構は３層上面まで掘り下げた段階で検出している。また前述したように６次調査区で確認された地すべり痕の伸びを検出している。遺構平面図、断面図、遺物の出土位置は縮尺20分の１で実測を行った。写真は35mmのモノクロとリバーサルで撮影した。

３．基本層序

基本層序は１層から10層に分かれる（図16・17、図版４－１～４、８－２～８）。１層は大学による盛土、および盛土以前の旧地表土である。２層は明褐色～暗褐色のシルト層である。２ａ層と２ｂ層に細分される。南北セクションでは２ａ層がさらに２ａ①と２ａ②の２層に分かれる。２ｂ層は漸移層である。２ａ層・２ｂ層からは縄文時代早期～晩期の遺物が出土している。調査区西側では２層は削平されており存在しない。３層以下がローム層である。３層は明褐色のシルト層、４層は黄褐色の粘土質シルト層である。４層上部には川崎スコリア（2.6～3.2万年前：板垣ほか1980）のブロックが含まれる。５層は褐色～明黄褐色の粘土質シルト層である。東西セクションでは４枚、南北セクションでは２枚の層に細分される。６層は南北セクションでは６ａ層と６ｂ層、東西セクションでは６①層と６②層に細分される。南北セクションでは６ａ層、東西セクションでは６②層が愛島軽石層（6.4～８万年前：年報２）である。愛島軽石層は場所によって風化の程度が異なっており、ほとんど確認できない箇所もある。７層は褐色～明黄褐色の粘土質シルト層である。８層は黄褐色の粘土質シルト層、９層は黄褐色の粘土層、10層は礫層である。また調査区北東部で検出された地すべり痕は、南北セクションで地すべりによる層位のずれなどとして確認された（図17、図版５－５）。

４．検出遺構

今回の調査では土坑10基、ピット161基、風倒木痕５基を検出した。2001年度の調査で１号土坑と認識していた遺構は、2002年度の調査で風倒木痕であることが確認されたため、１号土坑は欠番とした。調査区西半分は削平されていたため、確認された遺構は調査区の東半分に集中している（図15）。

【２号土坑】（図18、図版３－３・４）

ＢＧ－21区の３層上面で検出した。長軸220cm、短軸110cmの不整形な楕円形を呈する。検出面からの深さは約50cmである。埋土は４層に分かれる。埋土１層には炭化物粒が多量に含まれる。遺物は出土していない。

【３号土坑】（図18、図版４－５・６）

ＢＣ－22区の３層上面で検出した。長軸90cm、短軸85cmでほぼ正方形を呈する。検出面からの深さは約20cmである。理土は２層に分かれる。埋土２層の下部には炭化物が集中し、壁際に径１cm大の焼土塊が含まれる。

図14　青葉山Ｅ遺跡第７次調査調査区配置図
Fig.14　Location of excavations at AOE7

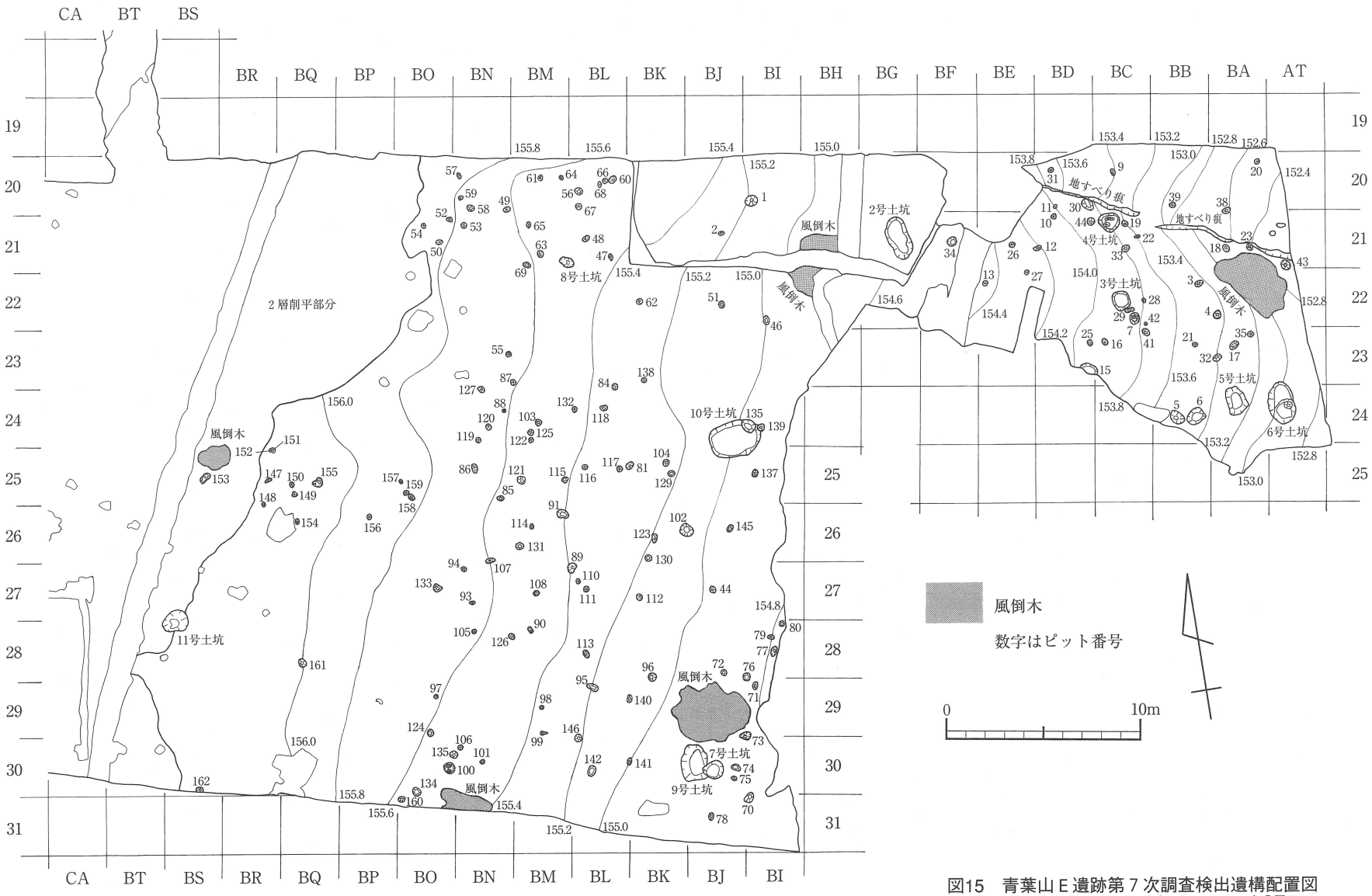


図15　青葉山Ｅ遺跡第７次調査検出遺構配置図
Fig.15　Distribution of features at AOE7

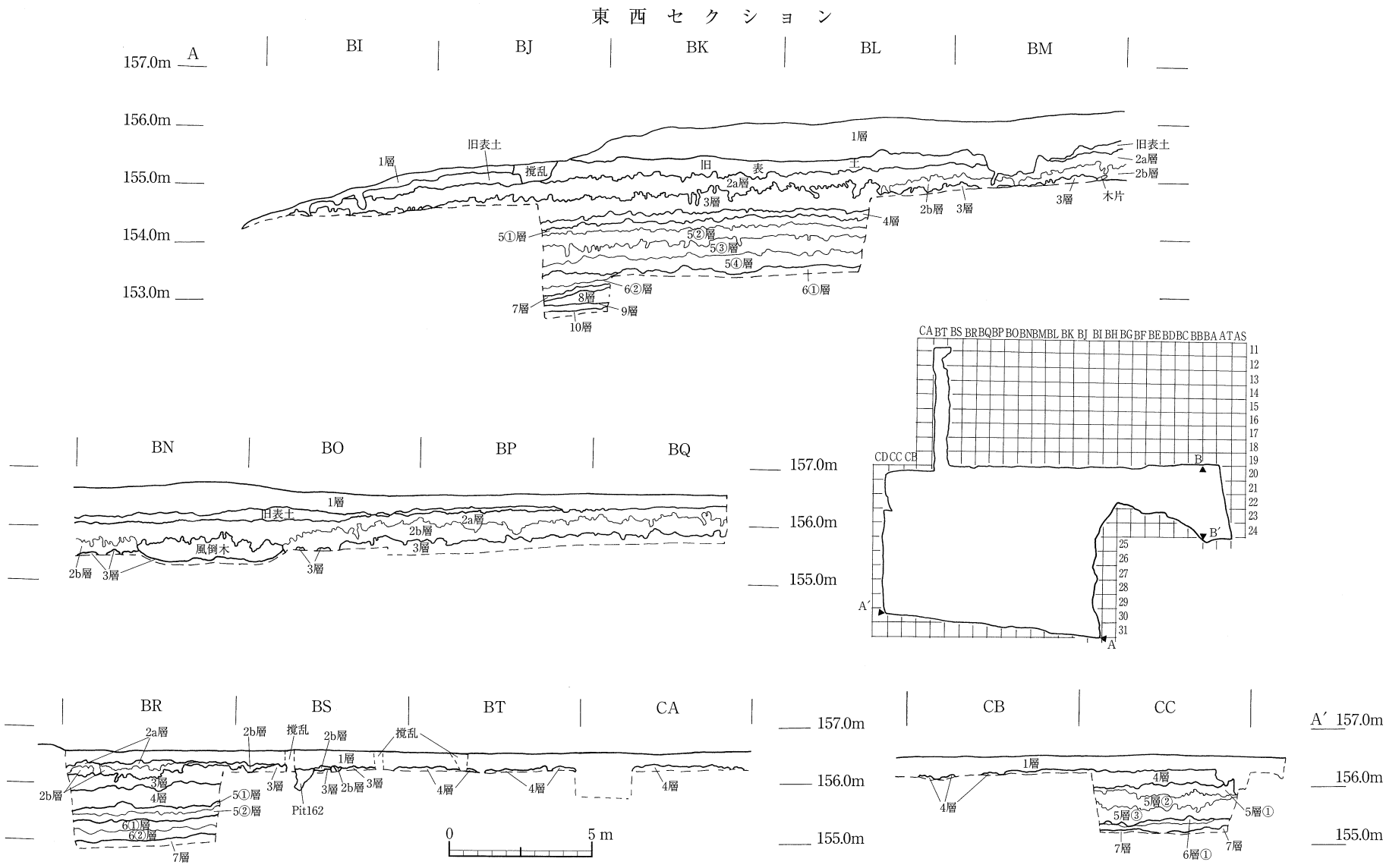
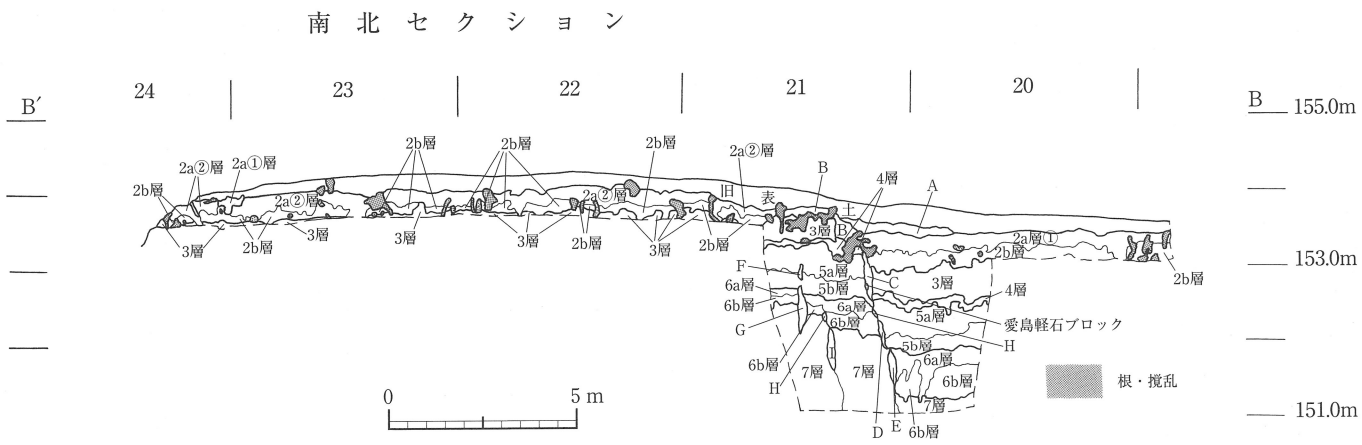


図16　青葉山Ｅ遺跡第７次調査断面図（1）
Fig.16　Cross section of excavation at AOE7（1）



東西セクション
旧表土　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中・しまり強　炭化物を多量に含む
2a　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性やや強・しまり中　炭化物を含む。褐色土をまだらに含む。場所により黒色の強い部分、茶褐色の強い部分があるが明確に区分できない
2b　7.5YR5/6　明褐色　シルト　粘性強・しまり中　炭化物を含む。褐色土をまだらに含む
3　7.5YR5/8　明褐色　シルト　粘性強・しまりやや強　炭化物を微量含む
4　10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　炭化物をわずかに含む。上部に部分的に川崎スコリアがみられる。緑灰色岩片をごくわずかに含む
5①　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　青灰色岩片をわずかに含む。炭化物を少量含む
5②　7.5YR5/6　明褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　緑白色・灰白色岩片をわずかに含む。ごく小さいマンガンをわずかに含む。5①より色調に赤みがある
5③　10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　φ2～10mm程の炭化物をわずかに含む。緑色・灰白色岩片をわずかに含む。5②より色調に黄色みがある
5④　10YR6/6　明黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　緑色・灰白色の岩片をやや多く含む。ごく小さいマンガンを比較的多く含み下部に集中する
6①　10YR6/8　明黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　緑灰色岩片・白色岩片を少量含む。粗砂がわずかに混じる。炭化物を少量含む
6②　緑色・灰白色の岩片を非常に多く含む。マンガンを多く含む。黄色土粒をわずかに含む。愛島軽石層
7　10YR4/6　褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　炭化物をまばらに含む。上部に緑灰色岩片をわずかに含む
8　10YR7/6　明黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　緑色・灰白色岩片を非常に多く含む。黄色土粒を多く含む。マンガンをわずかに含む
9　10YR5/6　黄褐色　粘土　粘性きわめて強・しまりきわめて強　緑色・灰白色岩片をわずかに含む
10　大小さまざまな岩片を多く含む。礫層
風倒木痕埋土　10YR5/8　黄褐色　シルト　粘性強・しまりやや弱　炭化物を含む。φ3mm程度の小礫を微量含む。褐色土を一部にまだらに含む
Pit162埋土　7.5YR4/4　褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強を主体として、褐色粘土質シルトをまだらに含む。炭化物を微量含む

南北セクション
旧表土　7.5YR4/4　褐色　シルト　粘性弱・しまりやや強　炭化物をまばらに含む。白色粒子を含む
2a①　7.5YR3/4　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/4暗褐色シルト・7.5YR3/4暗褐色粘土質シルトをまだらに含む。ごくわずかに炭化物を含む
2a②　7.5YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　部分的に褐色シルトを含む
2b　7.5YR4/6　褐色　シルト　粘性やや強・しまり中　均質な層
4　10YR4/4　褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　緑色岩片を含む。石英を若干含む
5a　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　青灰色小岩片を下部に多く含む。全体的に少量の石英・マンガンを含む
5b　10YR6/8　明黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　青灰色岩片・砂を多く含む
6a　マンガンを多量に含む。石英を部分的に少量含む。φ3cm程の礫をごくわずかに含む。愛島軽石層
6b　10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　6aよりマンガン・石英が少ない。橙色の粒子を含む
7　10YR6/8　明黄褐色　粘土質シルト　砂を多く含む。黒色・赤橙色・白色・青灰色岩片を全体的に多く含む。下部にφ5～10cmの礫を多く含む
A　7.5YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　黒褐色シルト・褐色シルトの粒をわずかに含む
B　10YR4/6　褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　暗褐色土をわずかに含む
C　10YR3/4　暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや弱　黒褐色土を上部にまだらに含む。ごくわずかに軽石を含む
D　10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　青灰色砂粒をわずかに含む
E　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　青灰色砂粒と石英粒多く含む。赤色粒子をわずかに含む
F　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　暗青灰色岩片を少量含む。石英を含む
G　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　青い砂粒と石英を含む
H　10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　マンガンを含む。赤い砂粒を含む
I　10YR6/6　明黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり弱　黒色の小岩片を多量に含む。石英を含む

図17　青葉山E遺跡第7次調査断面図（2）
Fig.17　Cross section of excavation at AOE7（2）

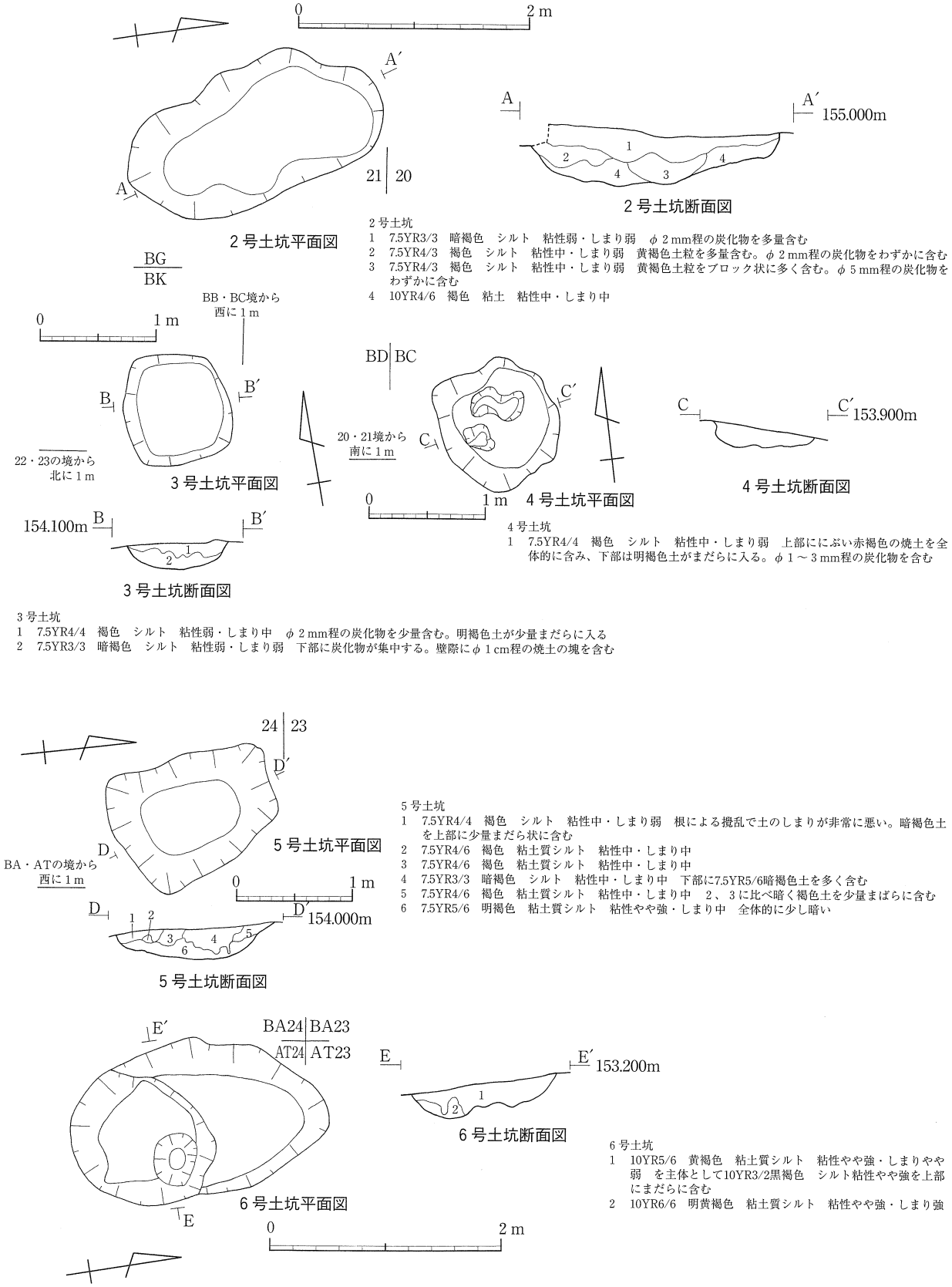
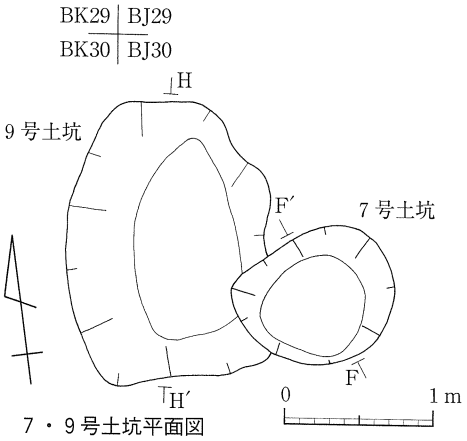
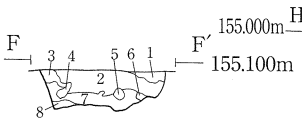


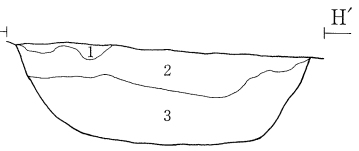
図18　青葉山 E 遺跡第 7 次調査検出遺構（1）
Fig.18　Plans and sections of features at AOE7（1）



7・9号土坑平面図



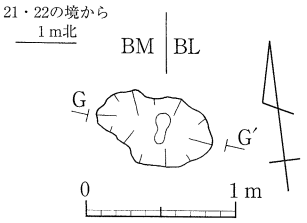
7号土坑断面図



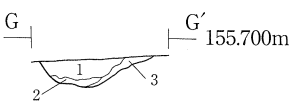
9号土坑断面図

7号土坑
1　10YR4/4　褐色　シルト　粘性強・しまり強　φ2mmのガラス質岩片を微量に含む。上部に炭化物を含む。φ1mm程の明赤褐色土粒を微量含む
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまり強　黒色土をφ1cmのブロック状に上部にまばらに含む。明褐色土をまばらに含む。φ5mm程の明赤褐色土を微量含む。下部に黒色土と明褐色土が厚さ2mm程の互層となる
3　7.5YR3/4　暗褐色　シルト　粘性やや強・しまり強　φ2mm以下の明赤褐色土粒・φ1～3mmのオリーブ灰色土粒を上部に微量含む。φ3mmの炭化物を上部にまばらに含む
4　10YR6/6　明黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　φ1cmの炭化物を含む。φ1mm以下のガラス質岩片を微量含む。黄橙色土を微量含む
5　10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　φ5mmの軽石を微量含む。橙色粘土質シルト・φ1mmの炭化物をまばらに含む
6　7.5YR5/8　明褐色　シルト　粘性強・しまり中　φ5mm以下の炭化物をまばらに含む
7　7.5YR3/2　黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　φ3cm以下の炭化物を多量に含む。　明赤褐色土粒を上部にまばらに含む。中央上部に多量の炭化物がみられる。φ5mm程の明褐色土粒を上部にまばらに含む。黒褐色土と明褐色土粒が下部で厚さ5mm程の互層となる。φ5mm以下のオリーブ灰色土粒を全体にまばらに含む
8　7.5YR5/8　明褐色　粘土質シルト　粘性強・しまりやや強　φ2mm以下のガラス質岩片を微量含む。　黒褐色土をまばらに含む。明赤褐色土粒を上部に微量含む

9号土坑
1　7.5YR4/6　褐色　シルト　粘性弱・しまり中　φ1～2mmのガラス質の粒子を含む。φ5～10mmの軽石を微量含む
2　7.5YR5/6　明褐色　シルト　粘性中・しまり中　φ5～20mmの軽石を全体に含む
3　7.5YR5/6　明褐色　シルト　粘性中・しまり強　φ1～2mmのガラス質の粒子を含む。φ5～10mmの軽石を全体に少量含む

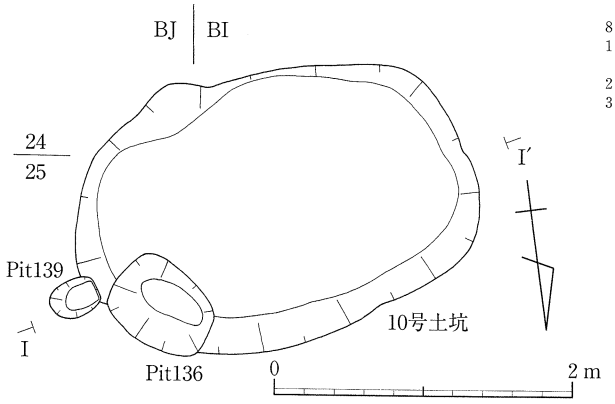


8号土坑平面図

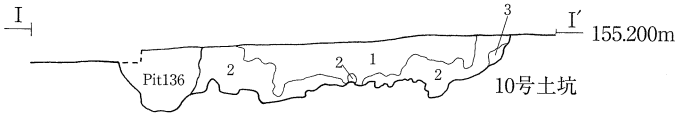


8号土坑断面図

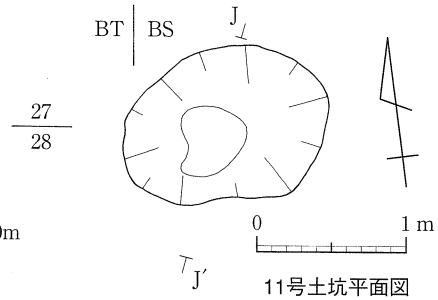
8号土坑
1　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性強・しまり中　黄褐色土をまばらに含む。部分的に明るい色調を呈する
2　10YR5/8　黄褐色　シルト　粘性強・しまり中　褐色土を若干含む
3　7.5YR4/6　褐色　シルト　粘性強・しまり中　全体に暗褐色土をまだらに含む



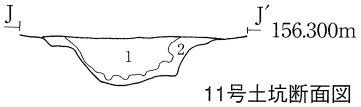
10号土坑平面図



10号土坑断面図



11号土坑平面図



11号土坑断面図

10号土坑
1　7.5YR3/2　極暗褐色　粘性強・しまりやや強　φ1mmの炭化物を少量含む。φ5mmの軽石を微量含む
2　7.5YR4/6　褐色　粘性強・しまり中　φ2mmの炭化物を微量含む
3　7.5YR4/4　褐色　粘性用・しまりやや強　φ5mm程の緑色軽石をごくわずかに含む。φ1～2mmのマンガンをごくわずかに含む。褐色土ブロックをわずかに含む

11号土坑
1　7.5YR4/6　褐色　シルト　粘性中・しまり弱　マンガンをわずかに含む。明褐色粘土ブロックを含む
2　7.5YR5/6　明褐色　粘土　粘性強・しまり弱　マンガンをわずかに含む

図19　青葉山E遺跡第7次調査検出遺構（2）
Fig.19　Plans and sections of features at AOE7（2）

埋土１層から青葉山Ｅ式土器の可能性がある深鉢の体部破片が１点出土している。

【４号土坑】（図18、図版４－７・８）

ＢＣ－21区の３層上面で検出した。長軸120cm、短軸115cmで不整形を呈する。検出面からの深さは約20cmである。埋土は１層である。埋土の上部ににぶい赤褐色の焼土を含む。底面は凹凸が顕著である。遺物は出土していない。

【５号土坑】（図18、図版５－１・２）

ＢＡ－24区の３層上面で検出した。長軸140cm、短軸100cmで不整形な台形を呈する。検出面からの深さは約25cmである。埋土は６層に分かれる。遺物は出土していない。

【６号土坑】（図18、図版５－３・４）

ＢＡ・ＡＴ－23・24区の３層上面で検出した。長軸220cm、短軸130cmのやや不整形な楕円形を呈する。検出面からの深さは約30cmである。底面には凹凸がある。埋土は２層に分かれる。遺物は出土していない。

【７号土坑】（図19、図版５－８、６－１）

ＢＪ－30区の３層上面で検出した。長軸110cm、短軸85cmの不整形な円形を呈する。検出面からの深さは約25cmである。埋土は９層に分かれる。埋土は全体に炭化物と明褐色の焼土粒を含んでおり、特に埋土７層は多量の炭化物を含む。また埋土２層と埋土７層では焼土と黒褐色土が互層をなしている。９号土坑を切っている。土器片６点が出土している。うち２点は大木８ｂ式土器の深鉢の体部破片である。４点は時期・型式不明である。

【８号土坑】（図19、図版６－４・５）

ＢＬ・ＢＭ－21区の３層上面で検出した。長軸80cm、短軸45cmの不定形を呈する。埋土は３層に分かれる。遺物は出土していない。

【９号土坑】（図19、図版６－６・７）

ＢＪ・ＢＫ－30区の３層上面で検出した。長軸180cm、短軸130cmのやや不整形な長方形に近い形状を呈する。検出面からの深さは約60cmである。埋土は３層に分かれる。全体にガラス質粒子と軽石を含む。７号土坑に切られている。遺物は出土していない。

【10号土坑】（図19、図版７－３・４）

ＢＩ・ＢＪ－24・25区の３層上面で検出した。長軸260cm、短軸180cmの隅丸方形を呈する。底面は凹凸が激しく深さはかなりばらつきがあるが、一番深い部分では検出面から約40cmである。埋土は３層に分かれる。埋土１・３に軽石が、埋土１・２に炭化物がわずかに含まれる。ピット136・139に切られている。埋土１層から、早期中葉の深鉢の体部破片が１点、青葉山Ｅ式の深鉢の体部破片が１点、型式不明のものが１点の計３点の土器片が出土している。

【11号土坑】（図19、図版７－８、８－１）

ＢＳ－27・28区の３層上面で検出された。長軸140cm、短軸100cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは約30cmである。埋土は２層に分かれる。遺物は出土していない。

【ピット】

今回の調査では161基と、これまでの調査よりは多くのピットが検出された。しかし、これらのピットは掘方が不明確で浅いものが多く、人為的な遺構であると確定できるものはほとんどない。組み合って建物などを構成するものも確認できなかった。遺物が出土しているものもほとんどないが、ピット32からは青葉山Ｅ式土器の深鉢の体部破片が１点出土している。

5．出土遺物

(1) 遺物の出土状況（図20～24、表４）

２層以下の出土遺物は、出土した位置を記録している。出土遺物の点数は、表４に示す通りである。１層は、現在の表土、大学造成による盛土、それ以前の旧表土が相当するが、集計では、現在の表土、大学造成時の盛土を１層撹乱とし、旧表土とは分けて記載している。土器合計1062点、石器合計120点が出土した。また、受熱の痕跡がある礫が69点出土している。

遺物の出土状況は、土器、石器の出土したグリッド単位で比較し、大まかな出土傾向をとらえることとした。全体的に、今回出土した土器は小破片の資料が多く、接合して比較的大きい破片になるものはほとんどなかった。２層の範囲はおおよそBO20区～BS31区より東側であり、それより西側では２層が既に削平されているため、いずれの時期においても出土は東側に偏っている。また、2a層と2b層では、どちらの層からも各時期の遺物が同等程度出土しており、層位によって出土土器の時期に違いはみられなかった。2a層に比べて、2b層で遺物出土量が若干少ない。

縄文時代早期中葉の土器は、第３次調査、第４次調査、第６次調査で若干出土しているだけであった。本調査区では、2a層、2b層で合計200点強の土器が、BI～BQ列を中心に出土している（図20）。これまで断片的に存在が確認されていた早期中葉の土器が比較的まとまって出土したことになる。

縄文時代早期後葉の土器では、調査区北東側（BL～AT－20～26区付近）に土器の分布がみられる（図21）。これらは、北側に隣接する第６次調査区の分布域と一連であると考えられる。これまでの調査区全体では、第３次調査の住居跡周辺（AC～AQ－１～９区）に顕著な出土の集中が確認されていた。それと比較すると、第７次調査区は出土量の多いグリッドでも10点程度であり、密な土器集中地点からはやや離れた分布域に相当すると考えられる。

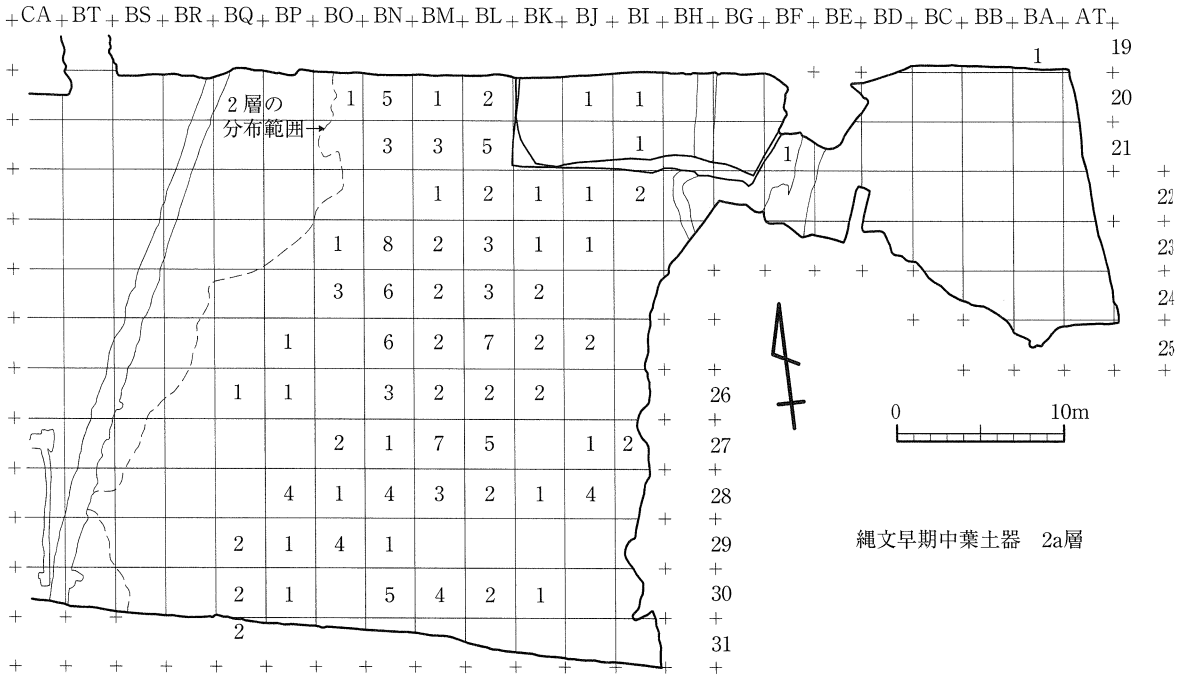
縄文時代中期の土器では、第２次調査区から中期末葉が１点、第６次調査区で中期中葉と中期末葉の土器が１点ずつ出土しているだけで、まとまりをもった出土はみられなかった。今回の調査では、中期中葉の大木8b式土器が調査区南東側（BN～BH－24～30区）に比較的集中して出土している（図22）。

縄文時代晩期の土器では、第６次調査で９点が確認された程度で出土量は少なかった。本調査区でも出土点数はごく少ない。BB20～BC21区で小さなまとまりがあるものの、全体としては散漫な分布を示している（図23）。

石器は、形状から各年代を推定することは困難である。上記のように、層位によって土器の年代を区分できないことから、石器個々の時期を特定することはできなかった。BK～BP－27～31区にある程度のまとまりが認められるが、いずれかの時期の土器の分布と一致するような分布状態ではない（図24）。受熱痕のある礫についても特別な集中地点は認められない。

表４　青葉山Ｅ遺跡第７次調査出土遺物集計表
Tab.4　Distribution of various implements from AOE7

層・遺構	縄文土器									石器																	礫（受熱）	総計
	早期中葉	早期中葉？	早期後葉	中期中葉	中期	晩期後半	晩期	不明	計	石鏃	尖頭器	石匙	石篦	楔形石器	不定形石器（SC）	不定形石器（RF）	不定形石器（NT）	磨製石斧	石皿	磨石	凹石	石核	剥片	剥片（PF）	計		
2a層	148	9	88	64	51	3	6	273	642	3	1	1	4	1	2	1	0	1	2	3	4	1	31	2	57	51	750
2b層	58	3	94	18	8	0	2	82	265	4	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	28	1	36	16	318
３号土坑	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
７号土坑	0	0	0	3	0	0	0	4	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8
10号土坑	1	0	2	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	4
ピット	0	0	2	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	5
風倒木痕	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2
１層撹乱	2	0	4	2	5	0	0	78	91	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	11	0	14	1	106
旧表土	1	0	7	3	3	1	1	24	40	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	4	0	6	0	46
表採	1	0	1	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
不明	1	0	1	2	0	0	0	2	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	0	9
総計	213	12	200	92	67	4	9	465	1062	7	1	1	4	1	4	3	1	1	2	3	7	3	79	3	120	69	1251



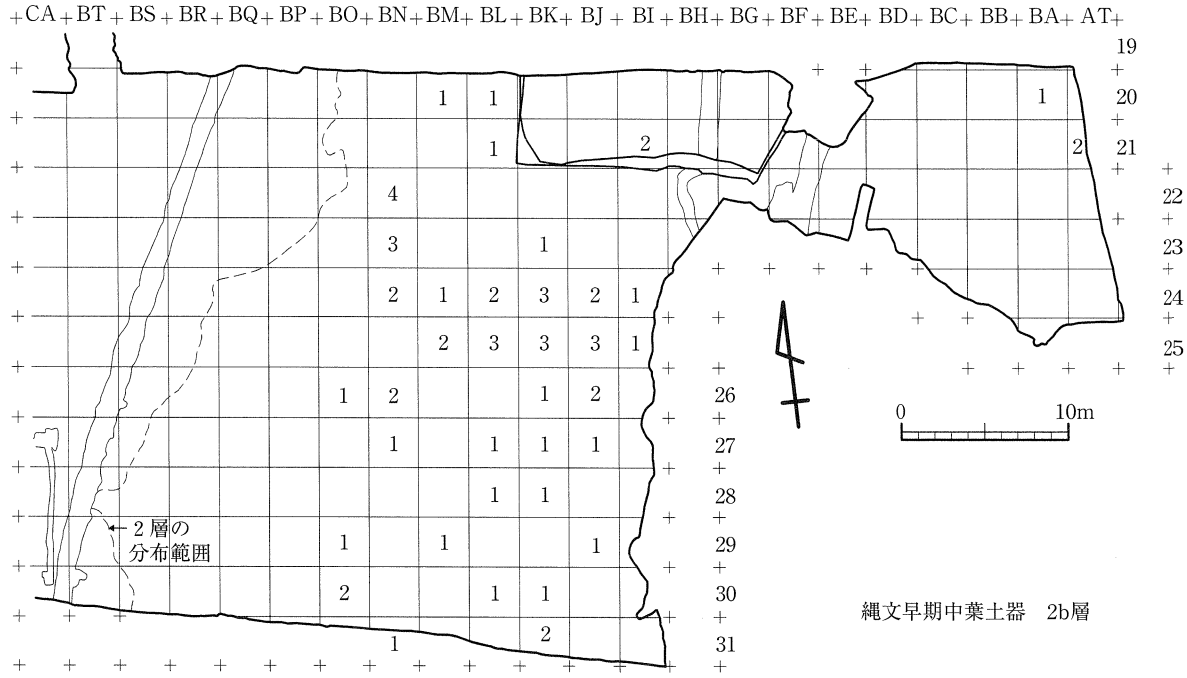
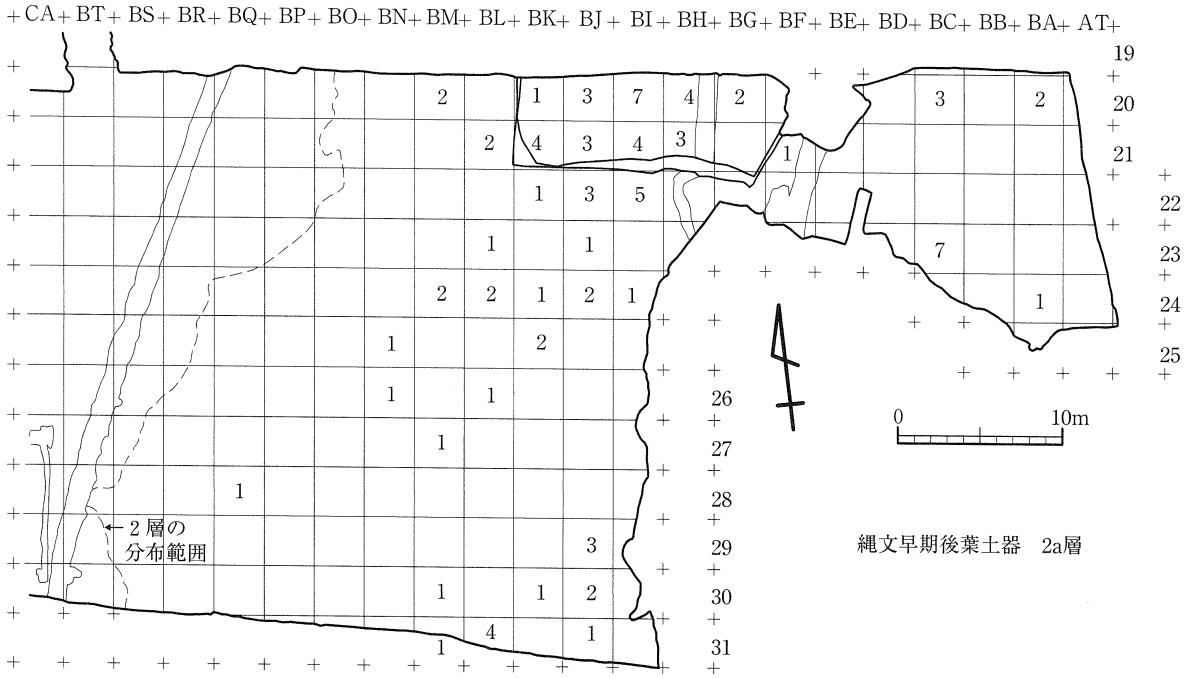


図20　青葉山E遺跡第7次調査グリッド別遺物密度図（1）
Fig.20　Density of remains at AOE7（1）



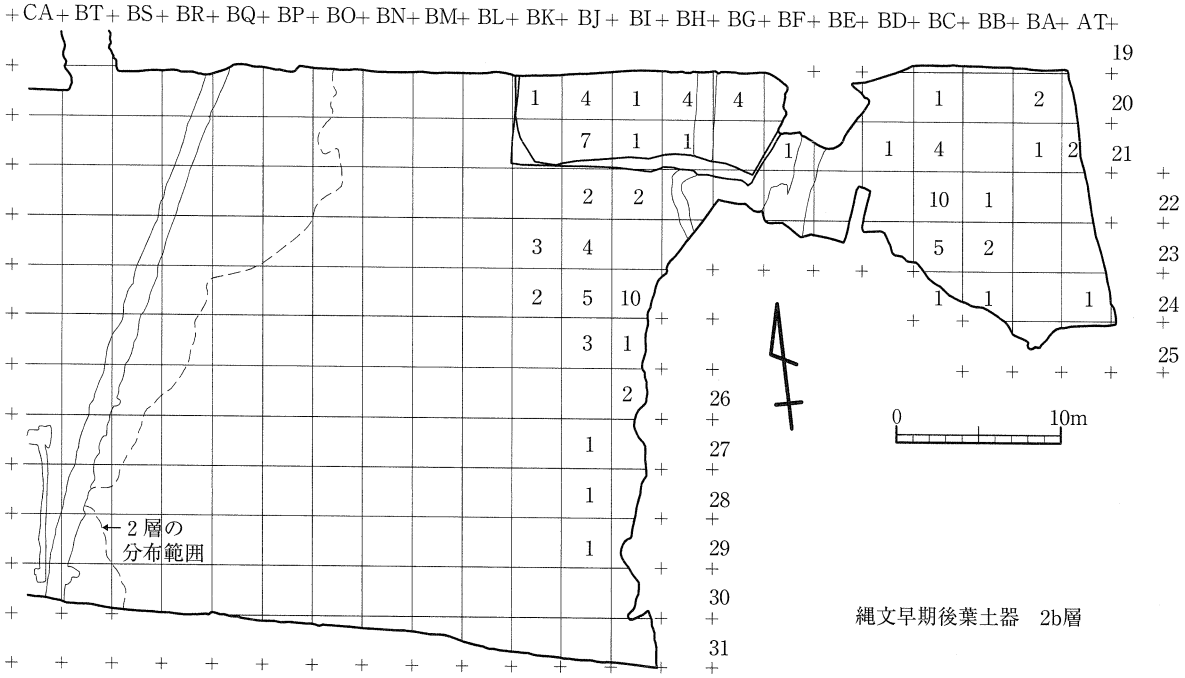
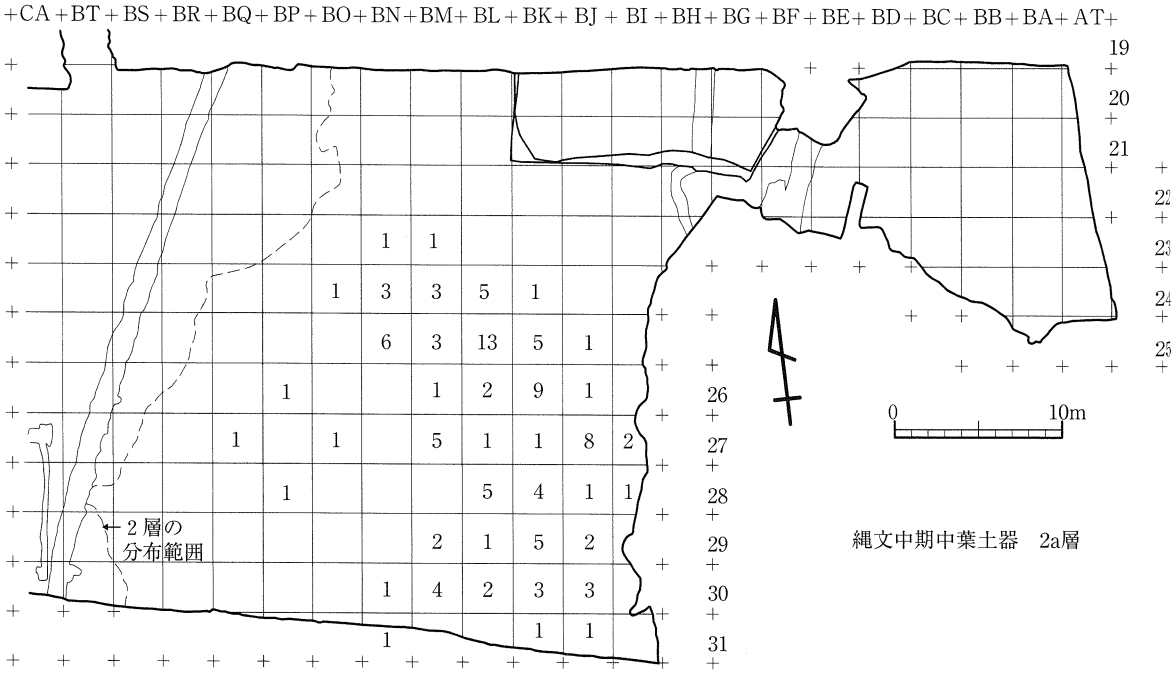


図21　青葉山E遺跡第7次調査グリッド別遺物密度図（2）
Fig. 21　Density of remains at AOE7（2）



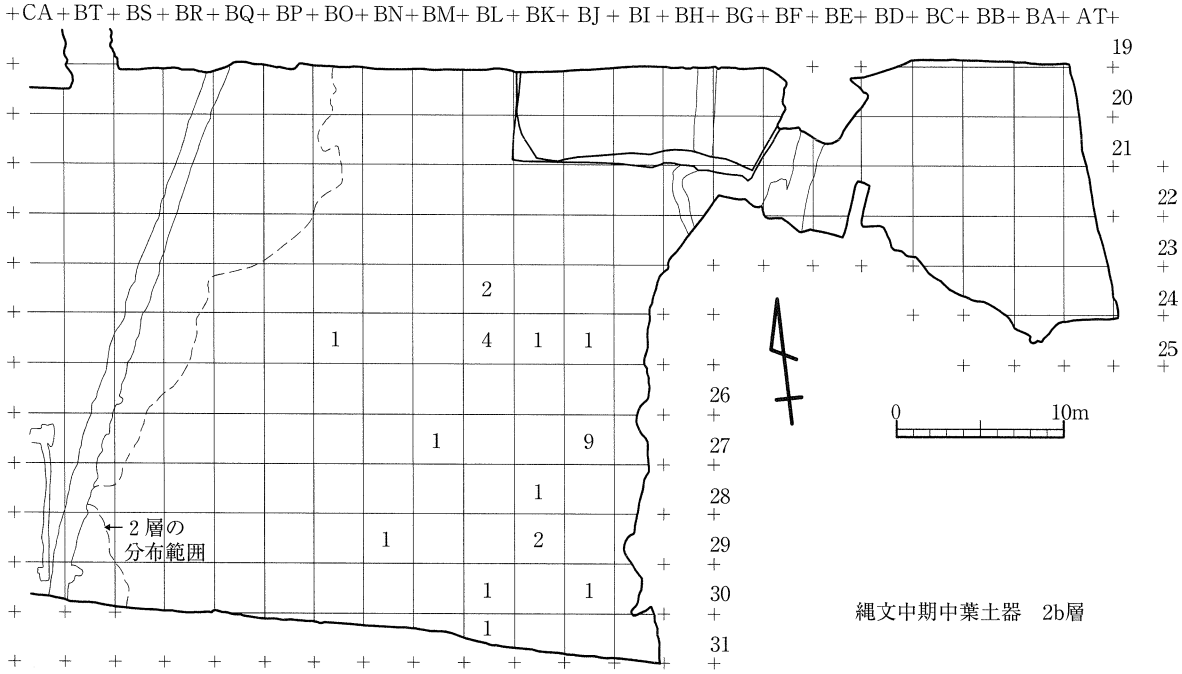
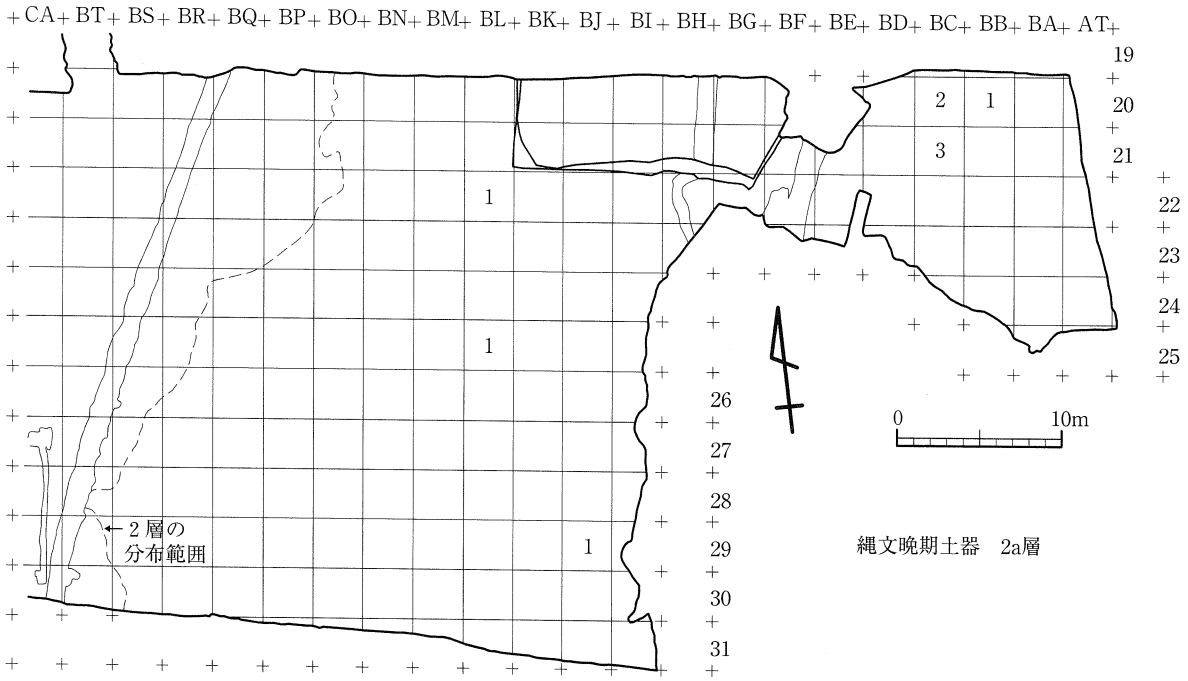


図22　青葉山E遺跡第7次調査グリッド別遺物密度図（3）
Fig.22　Density of remains at AOE7（3）



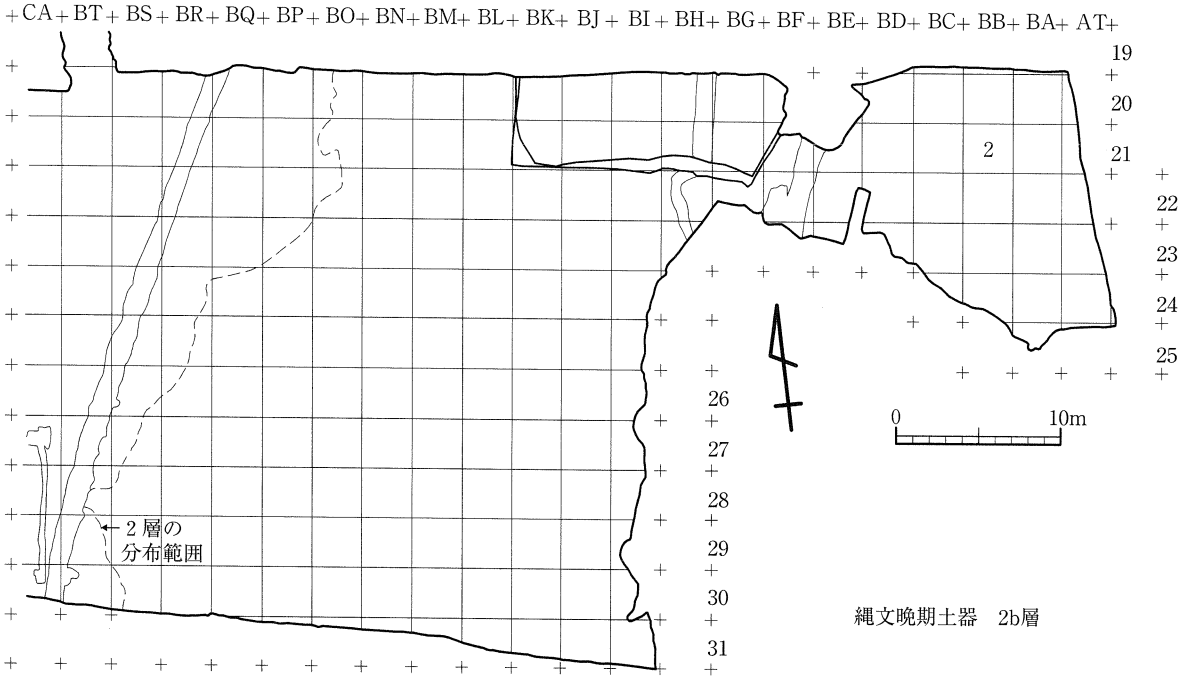
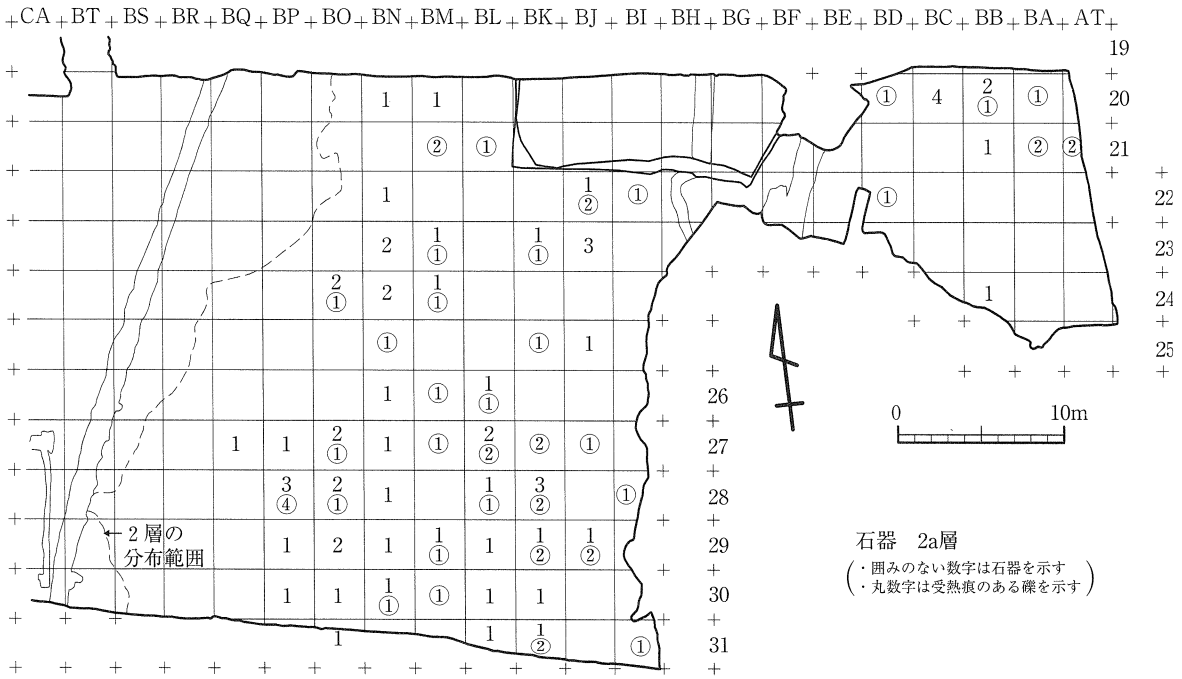


図23 青葉山E遺跡第7次調査グリッド別遺物密度図（4）
Fig.23 Density of remains at AOE7 (4)



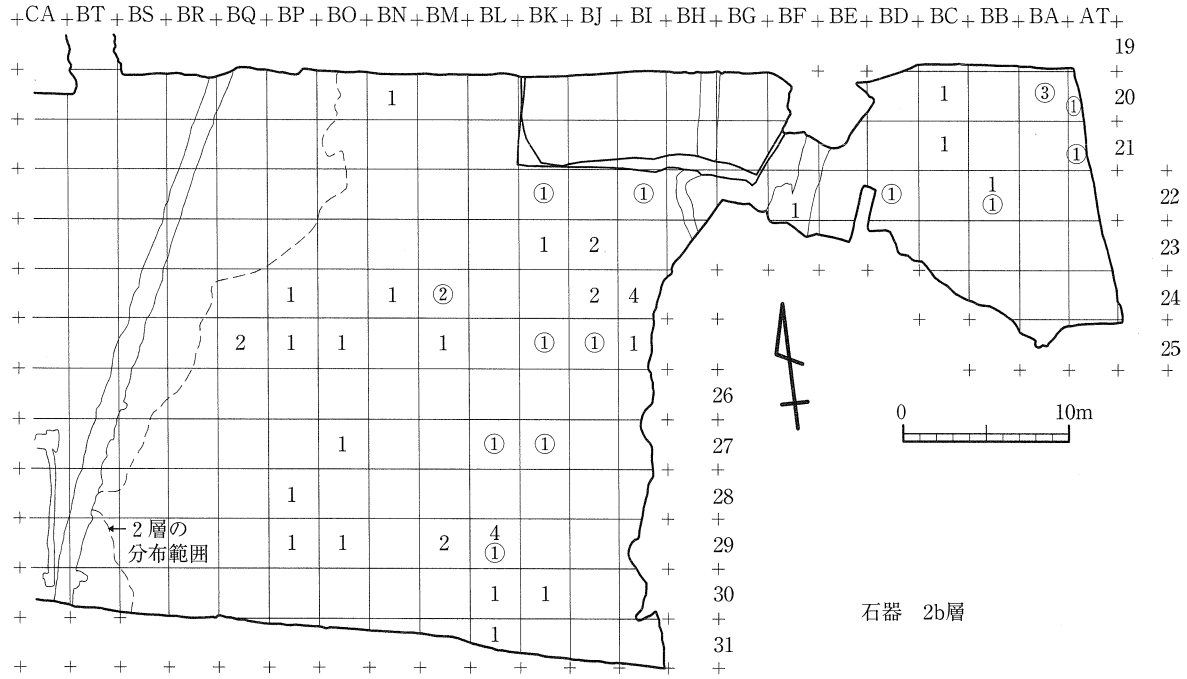


図24 青葉山E遺跡第7次調査グリッド別遺物密度図（5）
Fig.24 Density of remains at AOE7 (5)

(2) 縄文土器

① 整理・分析の方法

出土した土器は脆弱なものが多かったため、アクリル系合成樹脂「バインダーNo.17」を含浸させて補強をしたのち、接合を行っている。表4に示すように、今回の調査で出土した縄文土器は合計1069点である。小破片が多かったため、文様があっても年代を特定できるほど明確でないものも多く、これらについては時期不明とした。また、縄文のみの破片は、縄文の施文の仕方や胎土の様子から、中期の土器、あるいは晩期の土器と判別できるものについては、それぞれ中期細分不明、晩期細分不明としている。

接合、同一個体の同定を行った後、口縁部破片、体部破片のうち有文のものと底部破片を抽出している。抽出した資料は、口縁部破片34点、底部破片8点、体部破片127点の合計169点である。これらについての特徴を表5～7の観察表にまとめている。観察した項目は、これまでの調査年報に準拠して、部位、口縁部の端面（断面）形態、口縁部の平面形態、内外面の器面調整、文様、胎土、器厚、炭化物付着の有無の8項目である。

前述のように、層位的に土器群を分類することができない資料群であるため、型式学的に土器群を検討し、分類している。以下に、それぞれの土器群の特徴を述べていくこととする。

② 早期中葉の土器（図25～28、図版9～13、表5・6）

早期中葉の土器は、2a層から148点、2b層から58点、10号土坑から1点、その他に1層撹乱など合わせて6点、合計213点が出土している。本土器群を識別するときの指標として、繊維の有無と内面の貝殻条痕文の有無を目安としている。貝殻腹縁圧痕文についても指標の一であるが、体部下半では施文されていない場合もみられる。貝殻条痕文による器面調整は、次の早期後葉の土器にもみられるが、本土器群は、内面には貝殻条痕文が見られず、内面は平滑で比較的丁寧に器面調整されていることが特徴となっている。また、早期後葉の土器群では、胎土に繊維を含むが、本土器群では繊維の混入はみられないなど、いくつかの点で顕著な違いが認められる。

【器形】

資料全体に小破片が多く、接合する破片も少なかったため、口縁から底部までの器形全体を推測できる資料は出土していない。各部位の破片資料から推測すると、基本となる器形は、底部は尖底で、体部には軽いふくらみを持ち、口縁部にかけてほぼ直線的に外傾している。口縁部付近については、7、10のように軽く外反するものもあるようである。底部の尖底部分は、いわゆる「砲弾型」の器形を呈するものであり、出土資料中には「乳房状」「天狗鼻状」の尖底底部はみられなかった。

【口縁部装飾】

口縁部の装飾は、平坦口縁、もしくは小波状口縁になっている。突起や大波状口縁になりそうな破片は確認されなかった。小波状口縁は、口縁と直交する方向に、口唇部から口縁部外面にヘラ状工具によって刻みを加えることで、5～6mm単位の小波状口縁を成している（1、3、93）。

平坦口縁とした土器の中には、2、4～10、65、66のように、口縁部外面に縦位の刻みを加えたものがある。これらの刻みは、口唇部にまでは達していないため、小波状口縁とはなっていない。しかし、小波状口縁と同様の意匠効果と考えられ、口縁部にはほぼすべての土器で何らかの縦位刻みの文様が加えられていることになる。縦位刻みには、ヘラ状工具によって行われたもの（1～3、5、10、65、93）と、貝殻によるもの（4、6～9、66）など、施文具の違いがある。さらに、貝殻による刻みには、貝殻を器面に垂直に押し当てたもの（6、7）と、貝殻を押し引いて施文したもの（4、8、9、66）など、施文方法の違いも認められた。

【口縁部端面（断面）形態】

口縁部の端面（断面）形態は、平坦（1、3）、丸み（5、6、10、28、93）、尖る（7、65、66）、内削ぎ（8、9）、外削ぎ（2、4）の5類型が認められた。口縁部外面に貝殻腹縁圧痕文や貝殻腹縁押引文がある土器では、口縁部が尖る、あるいは内削ぎ、外削ぎなど、端面形態が尖るような形状が多く、小波状口縁を呈する土

器では、端面形態が平坦、もしくは丸みがあるものになる傾向がある。

【文様】

文様の要素としては、貝殻腹縁圧痕文、貝殻腹縁押引文、刺突文、貝殻条痕文、沈線文、縄文などが認められる。これらの文様要素を用いて描かれた文様全体のモチーフについては、破片資料のため、明らかとなるものはなかった。しかし、文様の組み合わせや特徴によって、以下の５つの類型に大別することができた。

貝殻腹縁圧痕文を有するもの（１～４、６、７、11～26、45、67～74、93）

６、７は、口縁部外面に縦位の貝殻腹縁圧痕文が連続して施文されている。これらの貝殻腹縁圧痕文は、一つの圧痕単位が比較的長く、貝殻の彎曲が観察される。１～４、93は、口縁部に刻みを有し、体部には貝殻腹縁圧痕文が施文される。貝殻腹縁圧痕文は１のように、斜位に重なって施文される場合もある。

体部の貝殻腹縁圧痕文は、斜位に、何段かに渡って施文されているものが多い。右下がり、左下がりの両方がある。貝殻腹縁圧痕のそれぞれは連結せず、羽状や鋸歯状となるものはみられなかった。11、21では刺突が伴い、特に11では刺突が横に連続している。この刺突には左右から指で摘んだような粘土の盛り上がりがみられる。25、73などの破片では、体部下半に近い部位にも貝殻腹縁圧痕文があるものと思われる。貝殻腹縁圧痕文を有する土器の全体像は明確ではないが、１～４、93などの口縁部のある破片から、口縁部には縦位の刻みがあることが考えられ、体部には斜位の貝殻腹縁圧痕文が施文されているものと推測する。

貝殻条痕文に他の装飾が加わるもの（8～10、65、66）

８、９、66は、口縁部には貝殻腹縁圧痕による押し引き状の縦位刻みがあり、外面には横位の明瞭な貝殻条痕文がみられる。これらの土器には、「ハの字」状の刺突が伴っている。この刺突は２本の指で左右から摘んだような粘土の盛り上がりがみられる。特に８では、刺突が数段に連続しており、刺突によって何らかの文様が描かれている可能性も考えられる。65は、外面が貝殻条痕により器面調整され、口縁部に縦位の刻みを有する土器である。10は、外面が貝殻条痕により器面調整され、口縁部には沈線状に縦位刻みが連続して付けられている。他の口縁部に刻みのある土器に比べて、刻みの長さが2.5～3cm程と長くなっているのが特徴的である。

貝殻条痕文のみのもの（29～44、75～85）

すべて体部破片である。外面にのみ貝殻条痕文があり、内面は丁寧なナデやミガキ調整がなされている。貝殻条痕は比較的深く明瞭なものが多い。これらの貝殻条痕文は８、９の土器と類似しており、口縁部付近などには何らかの文様を有するのであろうと推測される。

沈線文を有するもの（60、61、91）

極めて少数であるが、沈線文を有する土器が出土している。２条１組の細く鋭い沈線で、２本同時に描かれている。61では、沈線が斜交する文様がみられるが、文様全体は不明である。沈線文を有する土器で、貝殻条痕文や貝殻腹縁圧痕文が一緒に施文されているものはなかった。しかし、内面に貝殻条痕文などがなく、比較的丁寧なナデやミガキ調整がなされている点、胎土に繊維を含まない点、胎土の状態が類似する点など、他の早期中葉の土器と非常に類似していることから、これらも同時期のものと捉えている。

縄文を有するもの（５、56～59、90）

縄文を有する土器は極少数であるが存在する。いずれの土器も、縄文は非常に浅く、条・節ともあまり明確ではない。５は口縁部破片で、口縁に刻みがあり、その下部に縄文が観察される。他は体部破片で、縄文以外に文様はないが、内面調整や胎土などから、他の時期のものではなく、早期中葉のものであると考えている。

無文のもの（46～54、86～89）

出土した土器の中には、無文の破片が含まれていた。これらの土器には、外面には貝殻条痕文、貝殻腹縁圧痕文、その他の文様等は施文されていない。胎土に繊維を含まず、内面は比較的丁寧なナデやミガキ調整がなされている。これらについても、器面調整や胎土の状態などの特徴から、他の早期中葉の土器と同時期のものである

と判断した。口縁部破片で無文のものがないことから、文様を持つ土器の下半部分ではないかと考える。

【器面調整】

土器外面の器面調整では、放射筋を有する貝殻による貝殻条痕の痕跡が多くの土器で観察される。貝殻条痕は外面についてのみ行なわれ、内面は比較的丁寧なナデやミガキによって平滑に仕上げられているのが特徴である。貝殻条痕は、基本的には横方向に施されるが、37、85のように体部下半では斜方向のものや、52のように縦方向のものも存在した。体部外面の貝殻条痕文については、条痕の様子によって以下のような種類に分類される。

貝殻条痕文の圧痕が比較的深く、明瞭なもの（8、9、30～40、44、66、75～77、79、81～83、85）

これらの貝殻条痕文では、貝殻条痕の圧痕が土器外面に明瞭に観察される。条痕の凹凸の幅が同じ程度、もしくは凹部分の方が少し幅広で、圧痕も比較的深くしっかり付いている。8、9では、貝殻腹縁圧痕文、刺突などの文様とともに、この貝殻条痕文が用いられている。しかし、この種類の貝殻条痕文は、81などのような体部破片にも多くみられる。このことから、口縁部に主要な文様が展開する土器の体部下半部などに、このような貝殻条痕文が多く用いられていることが考えられる。この貝殻条痕文は、文様の要素の一つであった可能性も考えられるのではないだろうか。

29では、貝殻条痕文の方向に沿って器面も軽く凹凸しており、巻貝による貝殻条痕文に類似している（庄内昭男1994）。貝殻条痕文の施文具として二枚貝だけでなく、巻貝も用いられている可能性も考えられる。

貝殻条痕文の圧痕が比較的浅いもの（3、11、12、14、16、18～23、52、67、69、71、84、93）

これらの貝殻条痕文は、条痕が比較的浅く、細かい線状に観察されるものである。体部に貝殻腹縁圧痕文が施される11などには、この種類の貝殻条痕文が多い。貝殻条痕が比較的浅く明瞭でないことから、貝殻腹縁圧痕文を施文する前の器面調整としての要素が強いものと考えられる。

【胎土】

胎土には、繊維が含まれていない。含有されている砂粒も細かく、全体として精緻なものが多い。

③　早期後葉の土器（図28～30、図版13～15、表6）

縄文時代早期後葉の土器は2a層88点、2b層94点、遺構出土5点、撹乱等から13点の合計200点が出土した。同様の土器は、青葉山E遺跡第3次調査において、2棟の竪穴住居跡やそれを覆う2層から2000点近い貝殻条痕文土器が出土しており、これらを基準に「青葉山E式」を設定したものである（年報12）。器面の内外面には、放射筋を有する貝殻による器面調整の痕跡が認められ、早期後葉の貝殻条痕文土器群の範疇に含まれる。また、ほとんどの土器の胎土中には、植物繊維が含まれている。器表面に繊維の痕跡が認められるほど多く含むものもあれば、断面で繊維の混入が確認できる程度のものもある。本土器群を識別するときの指標として、貝殻条痕と繊維の混入の有無を判断材料としている。

小破片が多く、器形全体を推定できる資料は出土していない。ただし、体部にわずかに屈曲部分を有する土器があることは確認できる（99、111～113）。また、小破片であるが、上から見たときに口縁部が多角形を呈するように屈折している突起（95）があることから、円形だけでなく多角形を呈する土器も存在することが考えられる。口縁部端面（断面）形態は、端面が外側から内側に直線的に削がれるもの（94、107）、内側に削がれるがやや丸みを帯びるもの（109）、丸みを帯びるもの（108、112）などが確認できる。口縁部破片では、全てに口縁に直交する刻みが加えられる（94、107、108、109、112）。器面の内外面には、貝殻による器面調整の痕跡が認められる。この貝殻条痕は、明確に痕跡が残るものと、103の外面のように浅くわずかに観察される程度のものとがあり、同じ土器の内外面でも痕跡に違いがある。また、貝殻条痕は必ずしも横方向のものばかりではなく、内外面で横方向と左上がり、左下がりなどが混在する場合（100、112、115）などもある。これらのことから、貝殻条痕は装飾的要素というよりは、器面の調整という意味合いが大きかったものと考えられる。

底部とみられる破片は1点のみの出土である（106）。底部は平底であるが、中心に向かってわずかに丸みを帯びており、内外面にわずかに貝殻条痕の痕跡がみられる。

文様では、連続刺突文（96、99、104、110、111、114）が確認された。沈線文や沈線と刺突が組み合う文様などは、今回の資料では確認されなかった。連続刺突文については、１列のものと（96、99、104、111）、２列１組のもの（110）がある。体部の屈曲部分に沿って刺突されているもの（99、111）は存在するが、刺突を用いて何らかの意匠を描いているかどうかについては確認できなかった。刺突は、断面が円形もしくは半円形の工具を斜位に押したもの（96、99、104、111）と、竹管状の工具を斜位に押し当てたため、断面形が三日月形を呈するもの（110、112、114）とがみられる。また、丸棒状の工具を器面に垂直に押した刺突（115）も存在する。

④　中期中葉の土器（図30・31、図版15・16、表６・７）

中期中葉の土器は、2a層から64点、2b層から18点、７号土坑から3点、その他に１層撹乱などから７点が出土している。また、縄文のみの破片などで中期細分不明とした土器は、2a層で51点、2b層で８点、１層撹乱などから８点が出土している。中期中葉の土器は、第６次調査においても若干出土している。

器種では、深鉢がほとんどで、それ以外の器種とわかるものは少なかった。今回の資料は、同一個体や接合する破片が少なく、器形全体がわかる資料がなかったため、口縁部や体部文様帯などの特徴から器種を特定せざるをえなかった。そのため、深鉢とした中には口縁部形態の類似した他の器種が含まれている可能性もある。

口縁部では、内彎し、頸部を有するもの（125、126、134、151、154）が多く、いわゆる「キャリパー型」を呈する器形になると思われる。口縁部が直立するもの（161）なども確認できる。口縁は、内彎の、強いものと、比較的緩やかなものがある。体部では、外傾するもの（114、135、142、148、156、158）と、体部にやや膨らみがあるもの（138、149、150）が確認できた。

口縁部全体の推測できる資料が少ないため、明確ではないが、平坦口縁のものがほとんどである。しかし、123、124、128のように口縁部の突起と思われる破片も出土している。

口縁部や体部の文様は、沈線文の他、粘土紐を貼り付け、調整を加えた隆線文（125、130、135、136、151）、沈線と隆線が一体となった隆沈線文（124、128）などによって描かれている。隆線文では、130、135、136のように、粘土紐を貼り付けた後、調整をほとんど行っていないものもあれば、132のように、粘土紐を貼り付けた後に調整を加え、隆沈線文に近い状態のものもある。口縁部文様では、渦巻文やその一部分と思われる文様が多い（125、132、151）。体部文様帯では、沈線による渦巻文の一部（137、138、148、149）のほか、縦位区画沈線文（141）、横位区画沈線文（142）、隆線による縦位波状文（163）などがみられる。しかし、文様全体の構成がわかる資料はなく、それぞれの文様がどのように展開するかは不明である。施文手順としては、縄文施文後に沈線文や粘土紐貼り付けなどを行い、最後に軽いミガキなどの調整を行っているのが一般的である。縄文原体はLR、RLの種類が存在する。内面の調整は、ナデ、もしくは軽いミガキ程度である。

胎土では、石英、長石などの砂粒の他、黄褐色の砂の混和が特徴的である。また、白色針状の動物珪酸体（上條朝宏1994）を含むものもみられる。いわゆる「海綿骨針」と呼ばれているもので、仙台地方、特に名取川流域から出土する土器に特徴的に含まれる（吉岡恭平1999）。

これらの土器は、その特徴から縄文時代中期中葉の大木8b式に相当すると考えられる。大木8b式土器は、仙台市高柳遺跡（佐藤好一1995）、上野遺跡（結城慎一1989）などから多数出土している。

⑤　晩期の土器（図31・32、図版16、表７）

縄文時代晩期の土器は、2a層から９点、2b層から２点、ピットから１点の合計12点が出土している。164は、体部に磨消縄文による雲形文が展開する浅鉢で、晩期中葉の大洞C2式のものとみられる。押圧による小波状口

縁を呈し、体部上半に2条の平行沈線文が施文された深鉢（165、168）も、晩期中葉のものであると推測する。また、図化しないが、縄文のみの体部破片が数点出土しており、このような深鉢になるものと推測される。167は、浅鉢状の破片で、3条の平行沈線文が施文されている。器面は丁寧に磨かれており、晩期後葉の大洞A式のものと考えられる。胎土はいずれも比較的精緻で、大きな砂粒の含有はみられない。164、166、168では、胎土に海綿骨針を含んでいる。晩期の土器は、第3次、第4次、第6次調査において、晩期中葉から後葉の土器が若干出土している。また、周辺の遺跡では、仙台市芦ノ口遺跡（年報14）から晩期前葉の土器が、赤生津遺跡（佐藤好一1990）から晩期末葉の土器が比較的まとまって出土している。また、長岫遺跡（熊谷幹男1985）、芦見遺跡（工藤信一郎他1988）などからも、少量ではあるが晩期の土器が出土している。

⑥　早期中葉土器の位置付けについて（図33）

早期中葉とした土器の土器型式などについて、宮城県内や他の地域で出土した類似の土器との比較を通して考察してみたい。本土器群の特徴をまとめると、口縁部から体部への貝殻腹縁圧痕文、口縁部（口唇部）の刻み、外面の貝殻条痕文、爪形状の刺突、繊維の混入がないことなどが挙げられる。これらと類似する土器は、県内からはほとんど出土例がなく、七ヶ浜町吉田浜貝塚からごくわずかに出土している程度である。貝殻腹縁圧痕文は、東北地方南部の明神裏Ⅲ式（林謙作1962）や常世式（大寺式）（吉田格1963、興野義一1970）などにもみられるが、明神裏Ⅲ式の曲線や幾何学的文様、常世式（大寺式）の棒状や櫛歯状の刺突、沈線文との組み合わせなど、文様において本土器群とは大きく異なっている。

本土器群と類似する土器は、東北地方北部の早期中葉の土器型式である寺の沢式、白浜式などに求めることができる。白浜式は、青森県八戸市白浜遺跡の資料を基に設定され（江坂輝彌1952）、館平遺跡（杉山武1980）、千歳(13)遺跡（北林八洲晴編1976）、中野平遺跡（坂本洋一他1991）、根井沼(1)遺跡（長尾正義他1988b）などから良好な資料が出土している。寺の沢式は青森県三戸町寺の沢遺跡の資料を基に設定され（名久井文明1974）、根井沼(1) 遺跡（長尾正義1988b）、千歳(13)遺跡、長瀬B遺跡（四井謙吉他1982）などから同様の資料が出土している。これらの型式の前後関係は、明確な層位的出土事例がなく、長い間議論となっているところであるが、領塚氏は、日計式押型文との関係から、寺の沢式が古く、白浜式が新しくなるという指摘をしている（領塚正浩1996）。

寺の沢式土器は、砲弾形の尖底深鉢を基本とし、口唇部に刻み等を施し、刺突文、貝殻腹縁圧痕文、沈線文などを組み合わせて区画した、口縁部文様帯を形成するものが多い。体部にも貝殻腹縁圧痕文が施文されることが特徴であると理解する。繊維は、含まれる場合と含まれない場合があるようである。

白浜式土器は、砲弾形の尖底深鉢を基本とし、口縁部付近に刺突文、貝殻腹縁圧痕文、沈線文などを組み合わせた文様が主体であるととらえることができる。口唇部には刻み等を施し、体部から底部は条痕文や磨きなどの調整痕を残す構成が多いようである。同じく、繊維は含まれる場合と含まれない場合があるようである。

おおまかではあるが、両型式の特徴をふまえた上で、本土器群との比較を試みる。本土器群では、器形全体が明確な資料は出土していないものの、おおむね砲弾形の尖底深鉢であるととらえることができる。口唇部の刻みや、口縁部から体部の貝殻腹縁圧痕文などは、両型式に共通している。貝殻腹縁圧痕文と刺突文が組み合う破片（図25－11、21）などは、文様の展開がわかる破片でないため、白浜式、寺の沢式の両方の範疇でとらえることができる。明瞭な貝殻条痕文の上に刺突文を施文しているもの（図25－8、9、66）や、沈線状の刻み（図25－10）などは、中野平遺跡第Ⅱ群土器などの白浜式と類似している。口唇部の刻みで、貝殻や箆状工具による押圧や押し引きなどの手法がある点も中野平遺跡と共通する。図27－65の口縁部に刻み、体部に貝殻条痕文といった特徴は、白浜式土器で多くみられる。体部に貝殻条痕文のみを施文する土器（図26－29～44、図27－75～85）や、体部が無文の土器（図26－46～54、図28－86～89）についても、白浜式において、体部から底部にかけてミガキ

や条痕文の器面調整が多いことと共通する。一方、白浜式では、口縁部に多段化した刺突文が多い点や、繊維を混入するものがある点などの相違も挙げられる。しかし、本土器群の特徴はおおむね白浜式土器の範疇と考えて差し支えないと推測する。

しかし、貝殻腹縁圧痕文が施文される体部破片には、体部下半部と考えられる破片も含まれており、それらについては寺の沢式の特徴ととらえることもできる。本土器群は、一括性の高い包含層からの出土ではないため、早期中葉の2つの土器型式が含まれていることも想定される。また、白浜式でも比較的古手の様相を想定することも可能である。ただし、破片資料からは確実に体部下半部であると断定できる資料状況ではなく、これをもって、直ちに寺の沢式土器の特徴と判断する材料には乏しい。ここでは体部に貝殻腹縁圧痕文を有する土器が存在するという点を指摘するにとどめておく。

宮城県内では七ヶ浜町吉田浜貝塚出土第5類土器に類似した土器がみられる（後藤勝彦1968）。繊維を含まず、貝殻腹縁圧痕文、平行沈線文による文様、刺突文などが特徴とされている。報告で明確に5類に示されているのは図33－50であり、貝殻腹縁圧痕文と刺突文を組み合わせた文様は、本資料群の特徴と類似する。

東北地方南部では、前原A遺跡Ⅰ群2類土器（井憲治他1991）、竹之内遺跡貝殻沈線文系土器Ⅱ（馬目順一編1982）などで、口縁部に刻みがあり、体部に貝殻条痕文の土器（図33－65）や、「ハの字」状の爪形刺突文〔図33－61、62、70、71、75、77）、胎土に繊維を含まないことなど、類似点がみられる。前原A遺跡Ⅰ群2類土器は、関東地方の田戸下層式期でも古手に比定される土器群である。主体は、重畳する細沈線での区画、帯状の区画文と貝殻腹縁圧痕文の充填、体部下半の太沈線文といった特徴である。このような様々な区画文を主体とした土器は青葉山E遺跡ではみられず、土器全体の様相としては異なる部分が大きい。

以上のように、本土器群は、主に東北地方北部の土器型式と関連が強いものであると考えられる。東北地方北部を中心とした土器型式をそのまま当てはめてよいのか、地域差が存在するのかについては、宮城県内での出土例が少なく、本土器群の資料数もそれほど多くはない現状ですぐに判断することは難しい。一方、東北地方南部の土器と比較すると、沈線を用いたモチーフや器形などで異なる部分もあるが、共通する要素も見てとれた。本土器群と類似する白浜式や、前原A遺跡、竹之内遺跡出土土器は、関東地方の田戸下層式に併行することが指摘されている（井賢治他1982、馬目順一編1991、領塚正浩2005）。田戸下層式については、さらに新旧2段階に細分できることが指摘されており（領塚正浩1987）、前原A遺跡は田戸下層式の古段階（田戸下層Ⅰ式）、白浜式は新段階（田戸下層Ⅱ式）にそれぞれ比定されている。これらと本土器群を併行とみると矛盾が生じることになるが、本資料群には、上記のように破片資料が中心で土器の全体像を断定することが難しい資料であることから、ここでは広義の田戸下層式に併行するものという理解をしたい。

本土器群は、早期中葉土器の空白地域となっていた宮城県における様相をとらえることができる資料である。寺の沢式、白浜式の分布圏の問題や、東北北部地域、南部地域、さらには関東地方の田戸下層式土器の影響などを考える上で、重要な資料となるであろう。

(3) 土偶（図32、図版16、表7）

2a層から2点出土している。CF1は、十字形の板状土偶の一部と推測される。体部のみが残存し、顔や脚にあたる部分は欠損している。左右に開いた腕に相当する部分と体部の中心部分には「T字」状の隆帯があり、その上に胸の膨らみが表現されている。隆帯の両脇には、隆帯に沿った2条の沈線文がみられるが、左側は屈曲部分が丸みを帯び、右側は直角状に曲がるなどの違いがある。背部には、縦位の軽いくぼみがみられる。CF2は、有脚立像土偶の脚部に相当すると考えられる。片足相当部分のみが残存している。沈線により曲線的な文様が描かれている。これら2点の土偶は、形態から縄文時代中期のものと推測される。2点が出土した地点は、おおむね中期中葉土器の分布範囲にあるため、土器と同じ時期のものである可能性が考えられる。

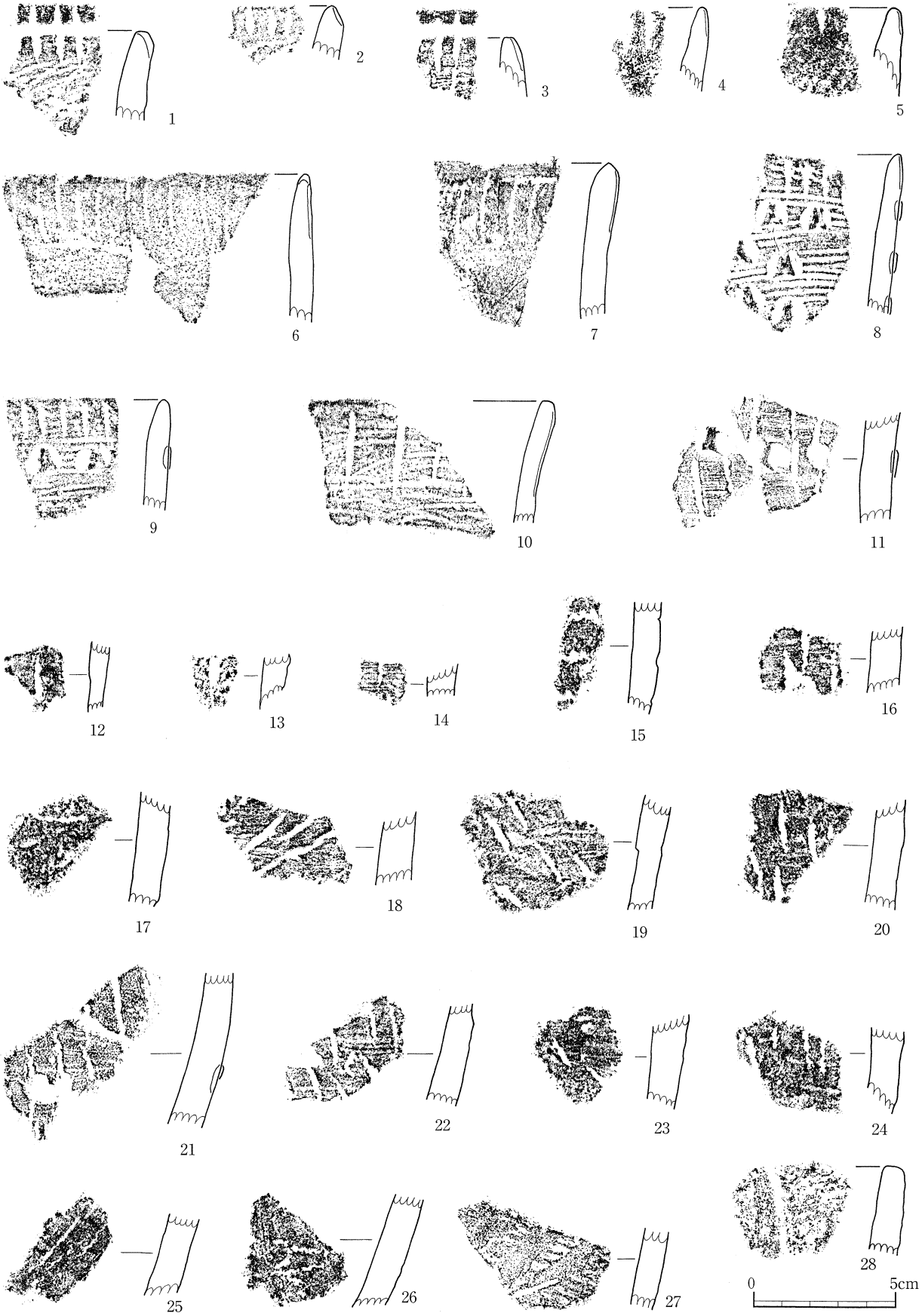


図25　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（1）　　2a層
Fig.25　Pottery from AOE7（1）

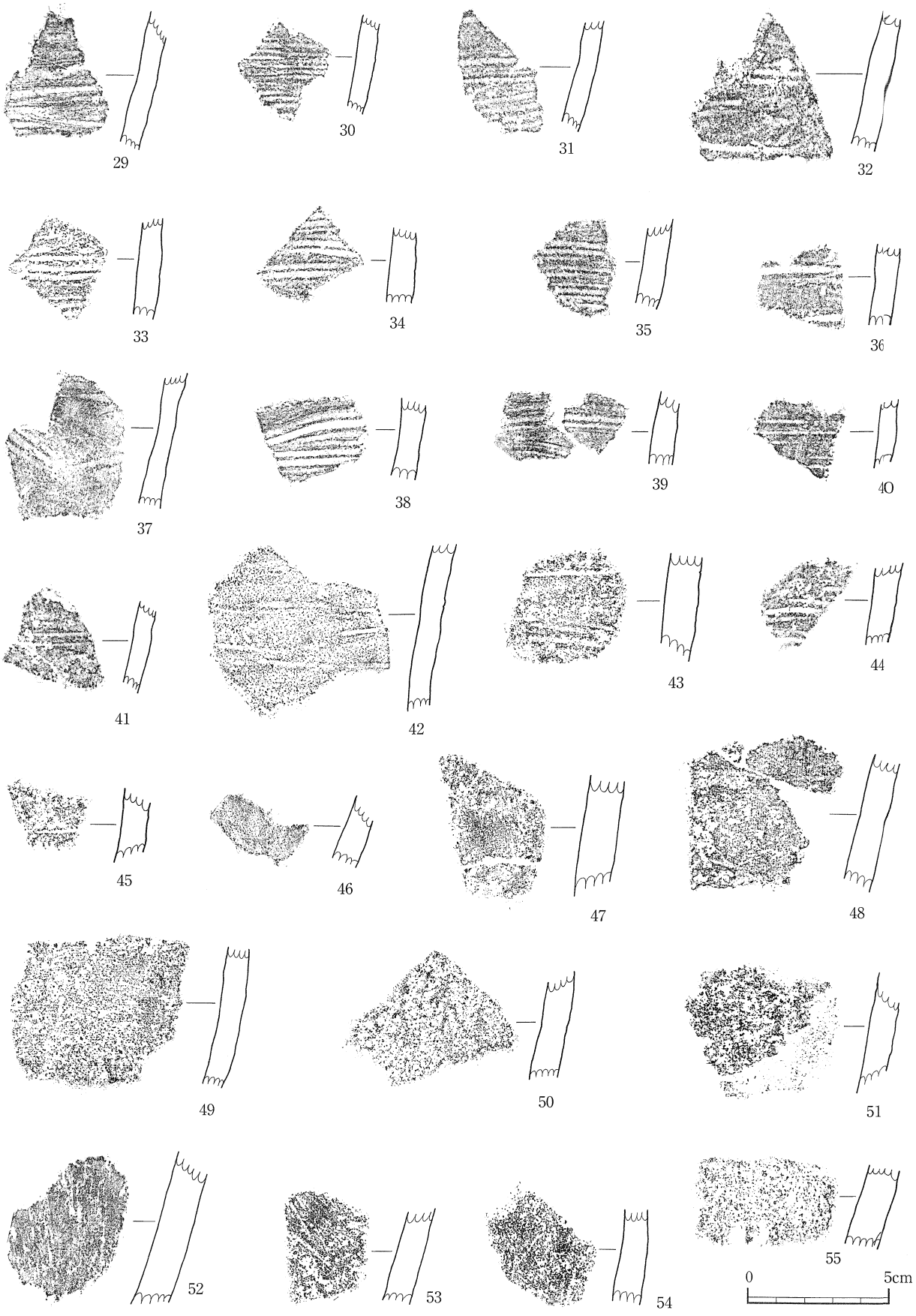


図26　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（2）
Fig.26　Pottery from AOE7（2）

2a層

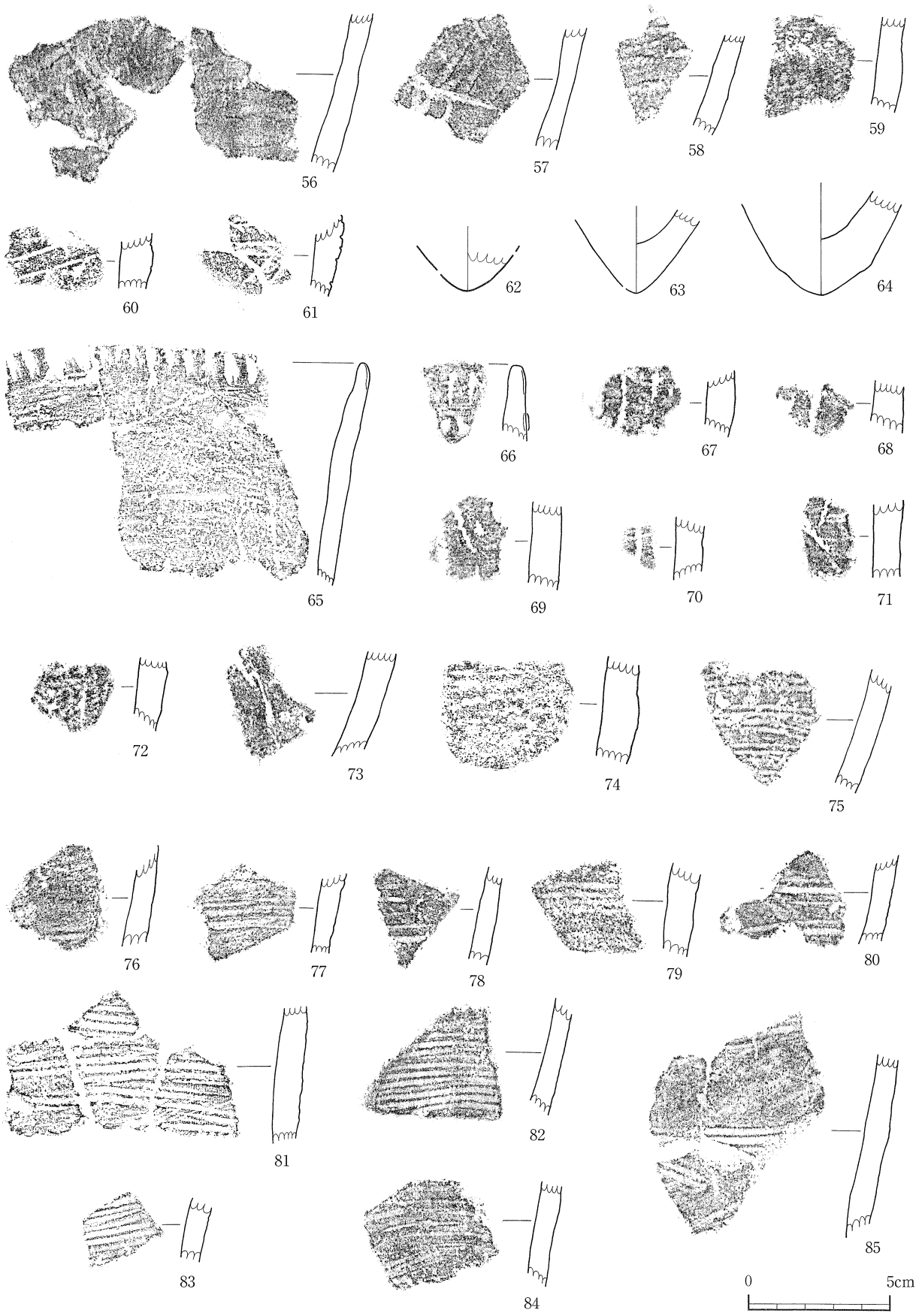


図27　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（3）
Fig.27　Pottery from AOE7（3）

56～64　2a層
65～85　2b層

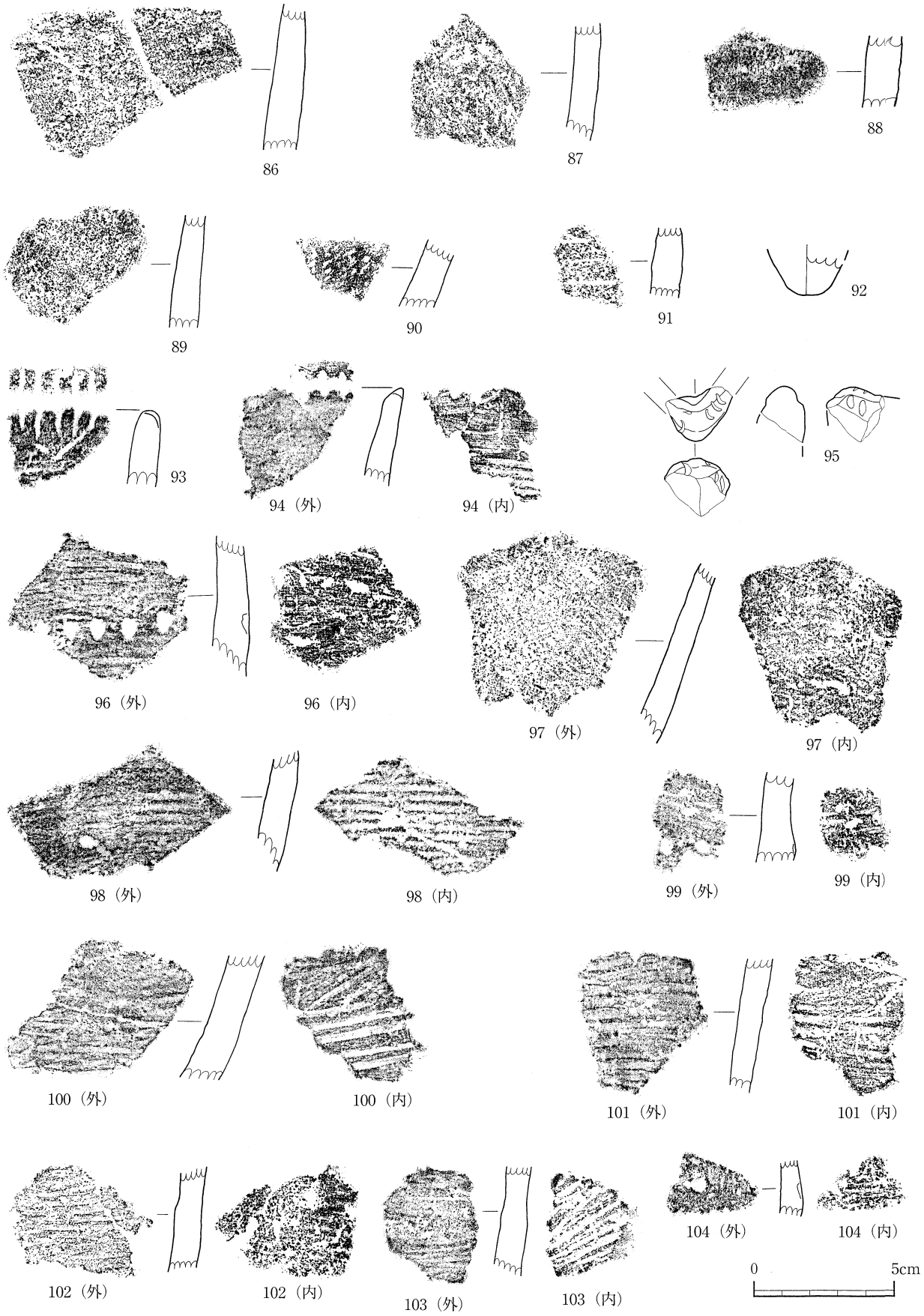


図28　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（4）
Fig.28　Pottery from AOE7（4）

86～92　2a層　　93　層不明
94　10号土坑　　95～104　2a層

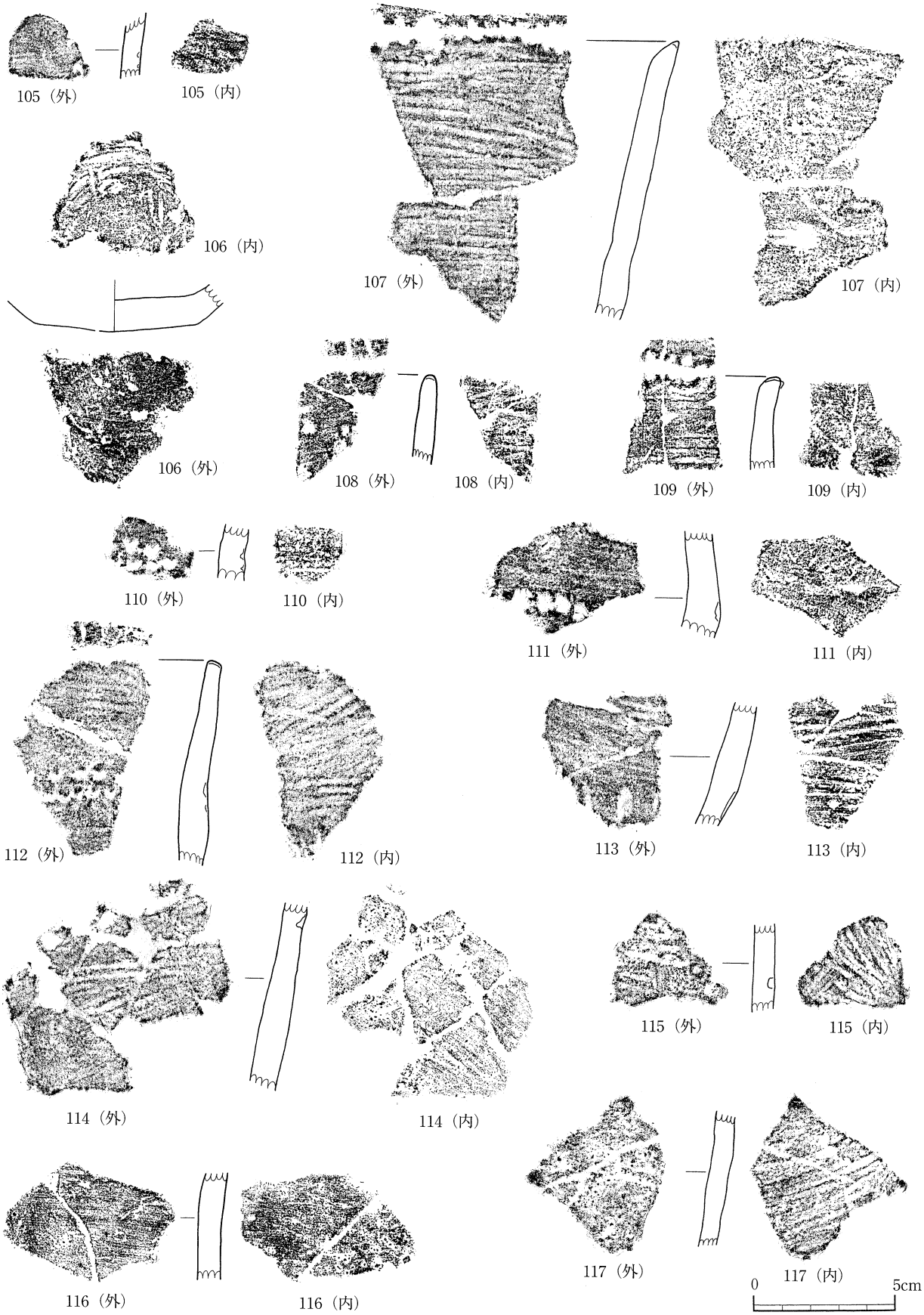


図29　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（5）
Fig.29　Pottery from AOE7（5）

105･106　2a層
107～117　2b層

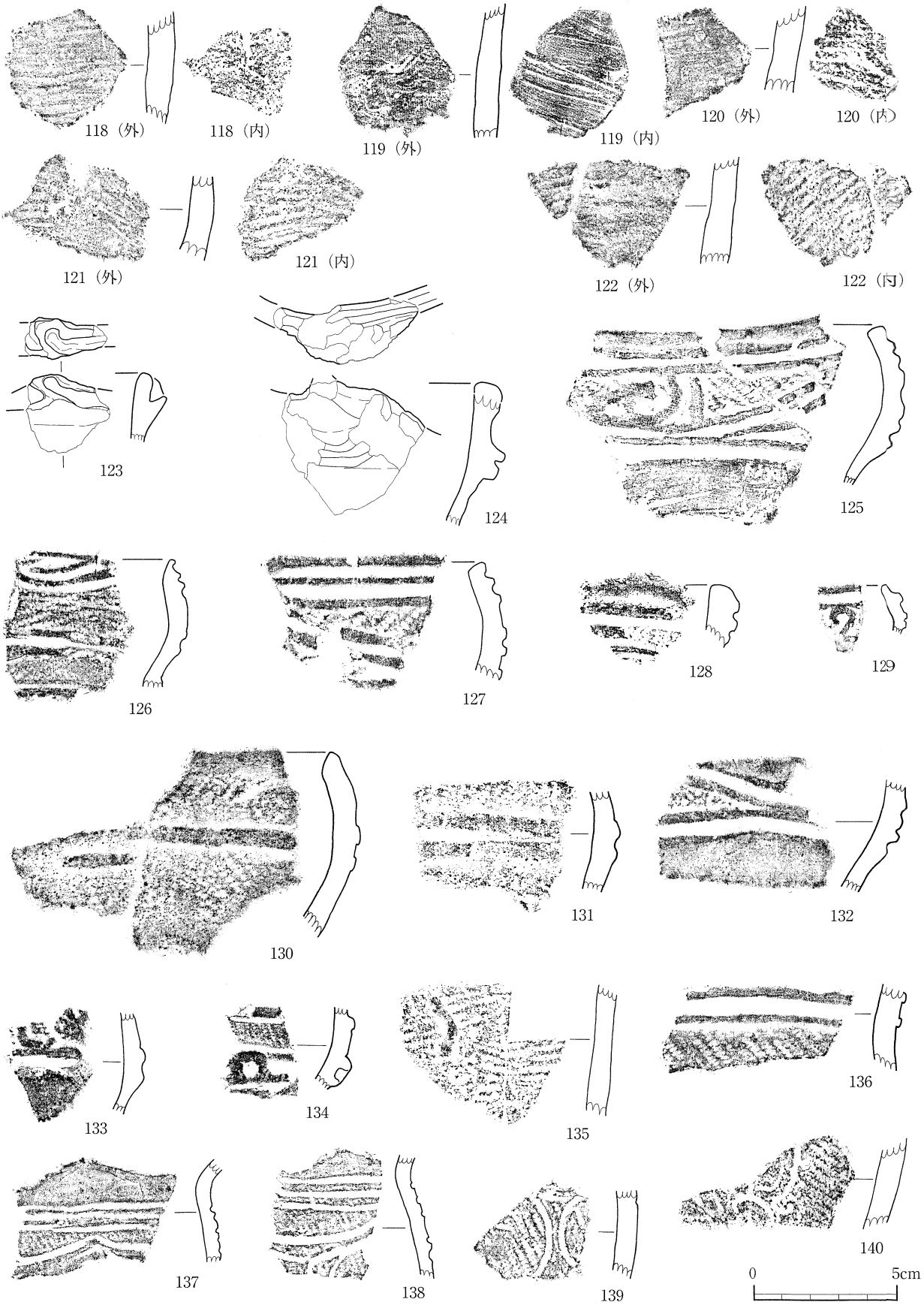


図30　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（6）
Fig.30　Pottery from AOE7（6）

118～122　2a層
123～140　2b層

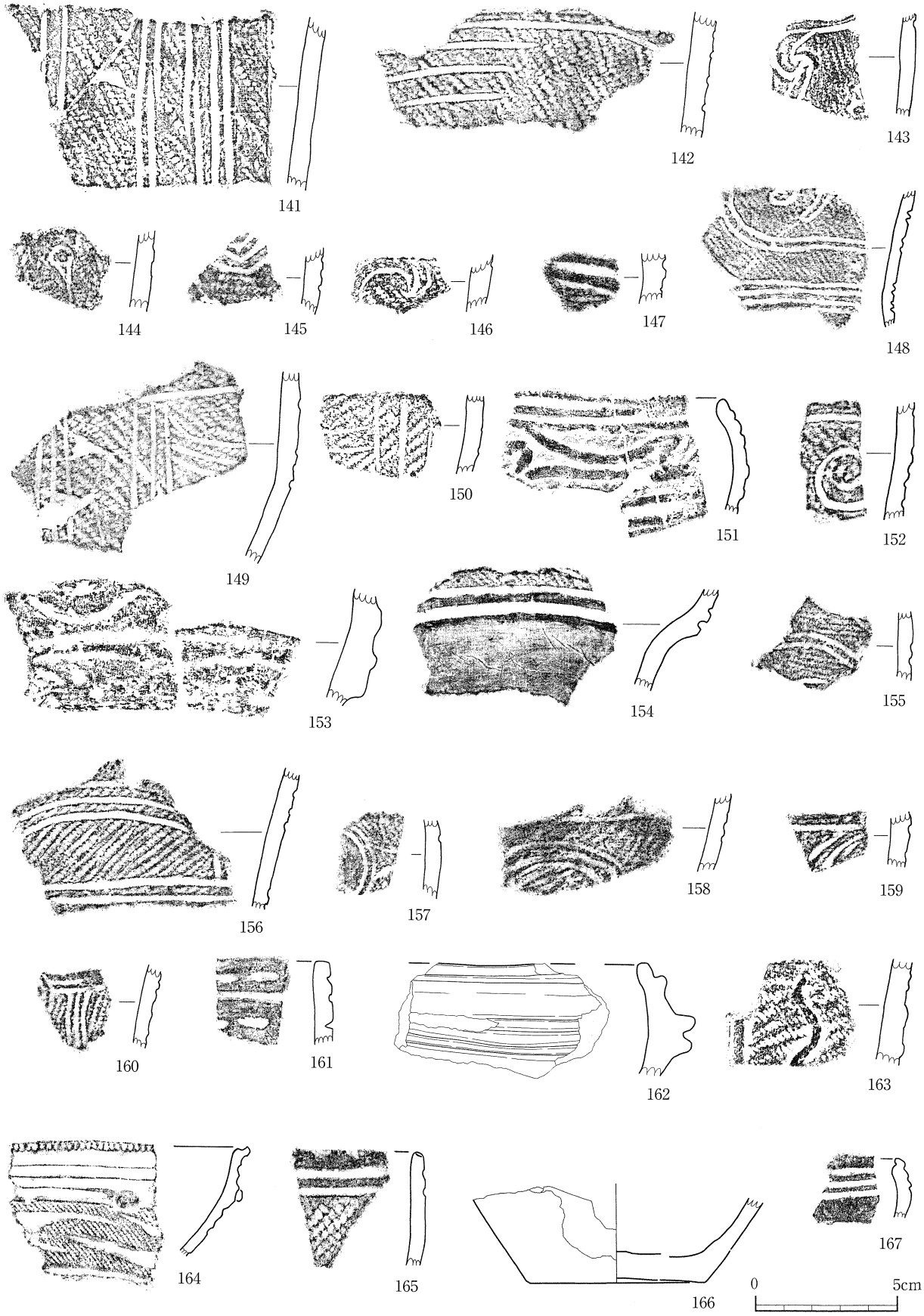


図31　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（7）
Fig.31　Pottery from AOE7（7）

141～150、164～166　2a層
151～161　2b層　　167　ピット44
162・163　旧表土

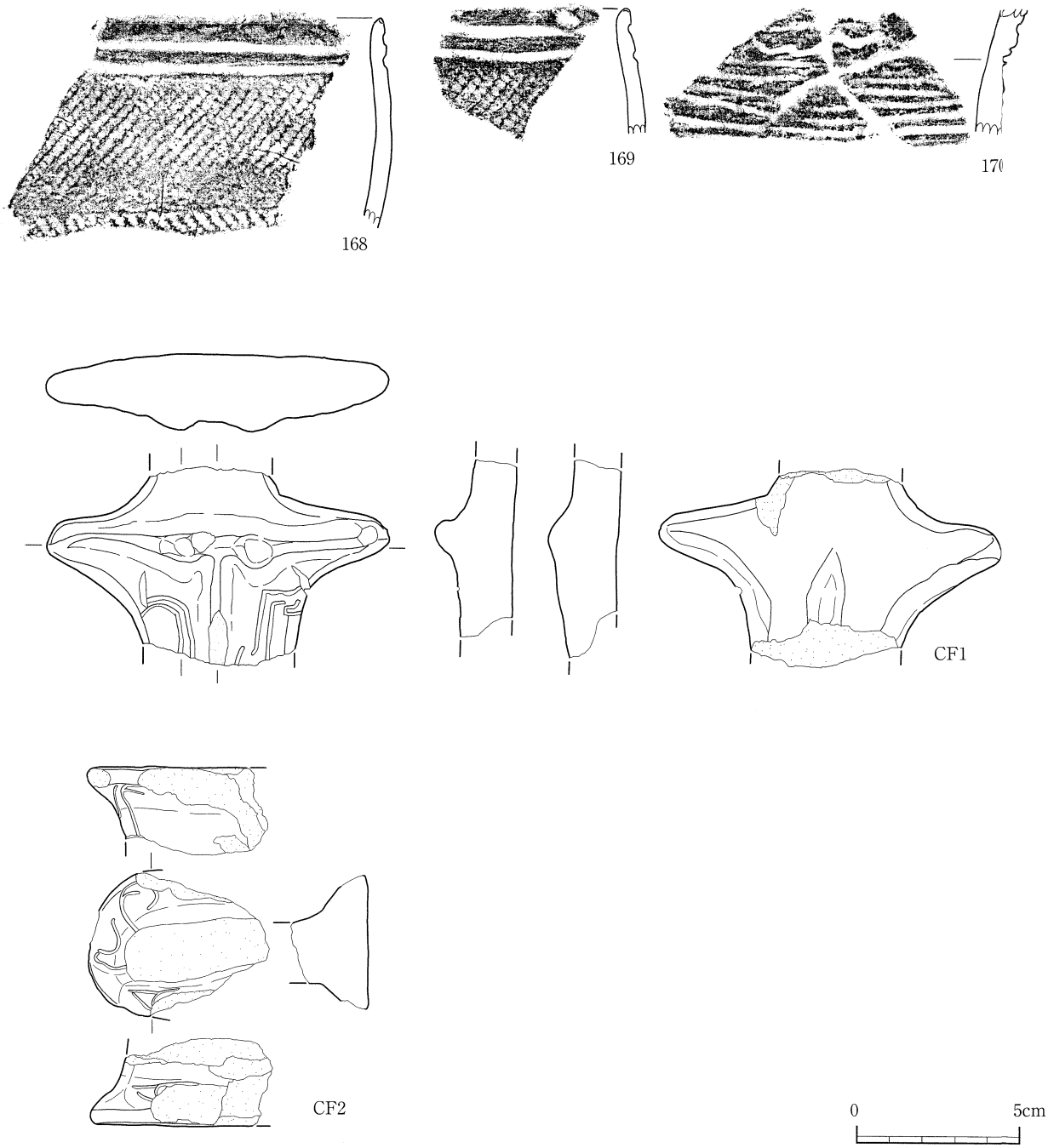
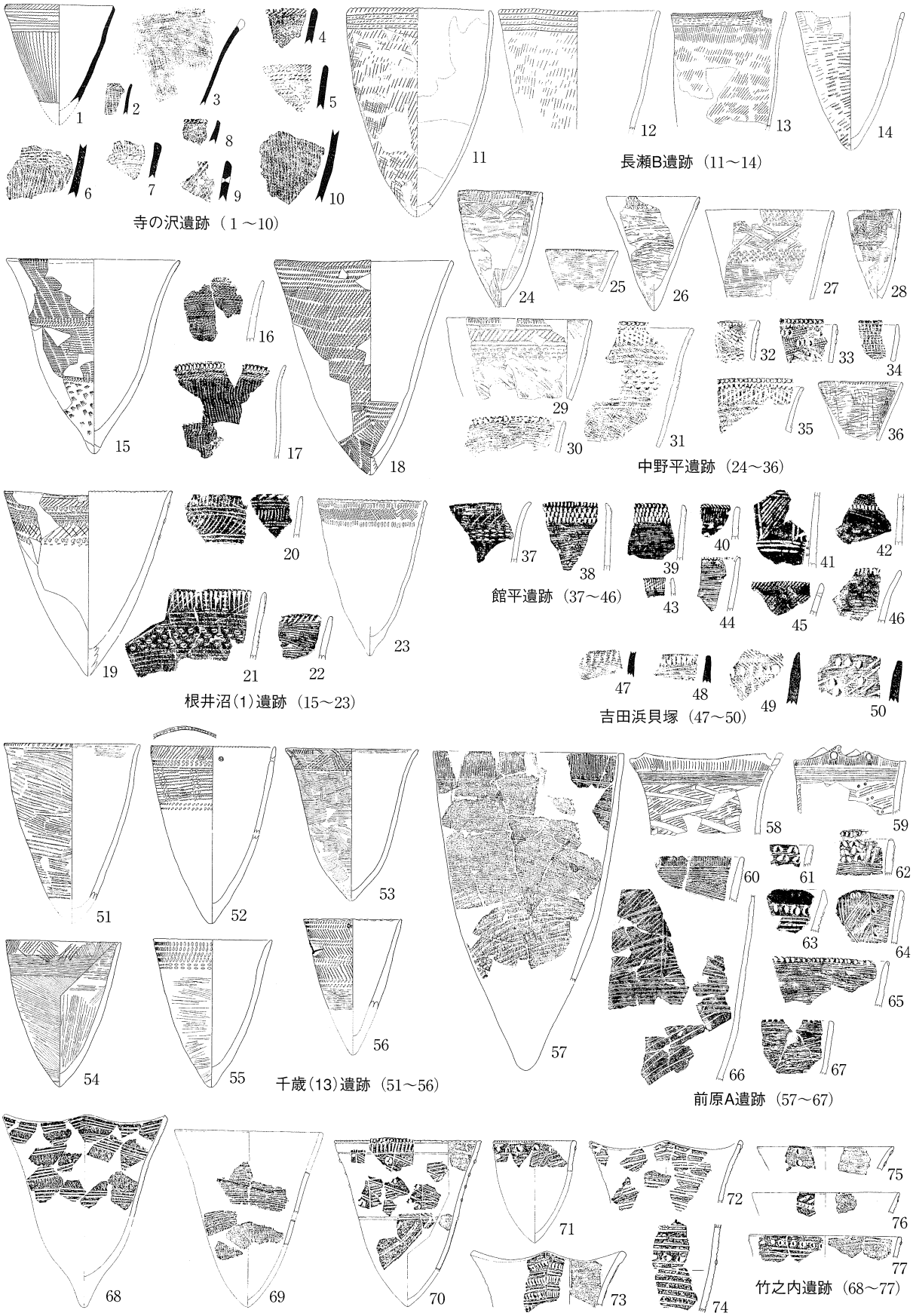


図32　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（8）・土偶
Fig.32　Pottery from AOE7(8) and clay figurine

168、CF1・2　2a層
169　旧表土　　170　2b層



実測図　1/10
拓本図　1/8

図33　青葉山E遺跡第７次調査出土早期土器の類例
Fig.33　Example of initial Jomon pottery at surrounding area

表５　青葉山Ｅ遺跡第７次調査出土土器観察表（1）
Tab.5　Attribute list of pottery from AOE7（1）

番号	地区・遺構	層位	時期	器種	部位	端面形	口縁形態	器面調整	特　　徴	胎土	炭化物	器厚	図	図版
1	BJ25	2a	早期中葉	深鉢	口縁	平坦	小波状（刻み）	内P・外N	口唇・口縁縦位刻み　貝殻腹縁文			10.5	25	9
2	BL25	2a	早期中葉	深鉢？	口縁	外削	平坦	内P・外N？	口縁縦位刻み　貝殻腹縁文			9.5	25	9
3	BO28	2a	早期中葉	深鉢	口縁	平坦	小波状（刻み）	内P・外N？	口唇・口縁縦位刻み　貝殻腹縁文			9.5	25	9
4	BL23	2a	早期中葉	深鉢？	口縁	外削	平坦	内不・外不	口縁外面刻み（貝殻？）			8.0	25	9
5	BL25	2a	早期中葉	深鉢	口縁	丸み	平坦	内N・外不	口縁縦位刻み　縄文？			9.0	25	9
6	BL22	2a	早期中葉	深鉢	口縁	丸み	平坦？	内N・外N	口縁外面縦位刻み（貝殻）			8.8	25	9
7	BN21	2a	早期中葉	深鉢	口縁	尖る	平坦？	内N・外N	口縁外面縦位刻み（貝殻）			8.9	25	9
8	BL28	2a	早期中葉	深鉢	口縁	内削	平坦	内P・外S	口縁外面縦位刻み（貝殻）　爪状刺突（２個１対）			8.0	25	9
9	BN30	2a	早期中葉	深鉢	口縁	内削	平坦	内P・外S	口縁外面縦位刻み（貝殻）　爪状刺突（２個１対）			8.8	25	9
10	BN30	2a	早期中葉	深鉢	口縁	丸み	平坦	内P・外S	口縁外面縦位沈線			7.0	25	9
11	BL24	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S	貝殻腹縁文　爪状刺突			10.0	25	9
12	BP25	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内不・外N	貝殻腹縁文			－	25	9
13	BN23	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P？・外不	貝殻腹縁文			7.5	25	9
14	BL24	2a	早期中葉	深鉢？	体部	－	－	内不・外N	貝殻腹縁文			10.0	25	9
15	BN24	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外不	貝殻腹縁文			9.8	25	9
16	BL30	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S	貝殻腹縁文			10.8	25	9
17	BP30	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外N？	貝殻腹縁文			12.0	25	9
18	BQ30	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S	貝殻腹縁文			12.5	25	9
19	BP28	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S	貝殻腹縁文			10.0	25	9
20	BM30	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S	貝殻腹縁文			10.0	25	9
21	BO29	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S	貝殻腹縁文　爪状刺突			11.0	25	9
22	BP29	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S？	貝殻腹縁文			11.0	25	10
23	BL25	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外N	貝殻腹縁文			10.2	25	10
24	BQ29	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内不・外N	貝殻腹縁文			11.8	25	10
25	BQ31	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N	貝殻腹縁文			10.0	25	10
26	BP28	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外N	貝殻腹縁文			11.0	25	10
27	BM28	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S？	貝殻腹縁押引文			9.0	25	10
28	BM21	2a	早期中葉	深鉢	体部	丸み	平坦	内N・外不	貝殻腹縁文			9.5	25	10
29	BJ28	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S？				8.2	26	10
30	BK28	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S				6.5	26	10
31	BN26	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S				6.8	26	10
32	BJ28	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S？				9.5	26	10
33	BN28	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S				8.0	26	10
34	BL30	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S				9.0	26	10
35	BF21	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内不・外S				7.2	26	10
36	BP28	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S？				7.0	26	10
37	BJ28	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S		無？		7.0	26	10
38	BL27	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S				8.5	26	10
39	BN21	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S				8.5	26	10
40	BK26	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S				6.9	26	10
41	BL21	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内不・外S				6.2	26	10
42	BL23	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S？				8.2	26	10
43	BN24	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S				11.8	26	10
44	BN24	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S				9.0	26	10
45	BL21	2a	早期中葉	深鉢？	体部	－	－	内N・外不	貝殻腹縁文？			9.5	26	11
46	BJ20	2a	早期中葉	深鉢	体部下半～底部	－	－	内N・外N	尖底			7.8	26	11
47	BM28	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外N				13.0	26	11
48	BO29	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N				11.0	26	11
49	BL26	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N				8.0	26	11
50	BL25	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N				10.0	26	11
51	BN29	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N				9.0	26	11
52	BQ30	2a	早期中葉	深鉢	体部下半～底部	－	－	内N・外N	尖底			11.0	26	11
53	BN26	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S？				10.0	26	11
54	BO20	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N				10.0	26	11
55	BK23	2a	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N？・外不	刺突？			10.5	26	11
56	BP26	2a	早期中葉？	深鉢	体部	－	－	内P？・外不	縄文			7.0	27	11
57	BM25	2a	早期中葉？	深鉢	体部	－	－	内P・外不	縄文			6.2	27	11
58	BM25	2a	早期中葉？	深鉢	体部	－	－	内P？・外不	縄文			6.5	27	11
59	BN30	2a	早期中葉？	深鉢	体部	－	－	内N・外不	縄文			9.0	27	11
60	BN23	2a	早期中葉？	深鉢？	体部	－	－	内N・外N	沈線文			11.0	27	11
61	BN20	2a	早期中葉？	深鉢？	体部	－	－	内N・外不	沈線文			9.0	27	11
62	BN20	2a	早期中葉	深鉢	底部	－	－	内不・外N	尖底			－	27	11
63	BM22	2a	早期中葉	深鉢	底部	－	－	内N・外N	尖底			7.5	27	11
64	BN23	2a	早期中葉	深鉢	底部	－	－	内N・外N	尖底			11.2	27	11
65	BK28	2b	早期中葉	深鉢	口縁～体部	尖る	平坦	内N・外S	口縁縦位刻み			7.5	27	12

表6　青葉山E遺跡第7次調査出土土器観察表（2）
Tab.6　Attribute list of pottery from AOE7（2）

番号	地区・遺構	層位	時期	器種	部位	端面形	口縁形態	器面調整	特　　徴	胎土	炭化物	器厚	図	図版
66	BN26	2b	早期中葉	深鉢	口縁	尖る？	平坦	内不・外S	口縁外面縦位刻み（貝殻）　爪形刺突（2個1対）			9.2	27	12
67	BN22	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N	貝殻腹縁文			10.2	27	12
68	BK24	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外不	貝殻腹縁文			11.0	27	12
69	BK24	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N	貝殻腹縁文			10.8	27	12
70	BJ25	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外N	貝殻腹縁文			10.0	27	12
71	BL25	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外N	貝殻腹縁文			11.0	27	12
72	BJ26	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外不	貝殻腹縁文			9.6	27	12
73	BL24	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N	貝殻腹縁文			10.0	27	12
74	BN24	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外不	貝殻腹縁文？			10.0	27	12
75	BJ26	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S				8.5	27	12
76	BJ29	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P？・外S？				7.8	27	12
77	BK27	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S				7.2	27	12
78	BM29	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S				7.2	27	12
79	BN23	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内不・外S				11.0	27	12
80	BL30	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S				7.5	27	12
81	BL25	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S		無？		11.0	27	12
82	BO30	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N？・外S				7.0	27	12
83	BO30	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P？・外S				8.0	27	12
84	BI25	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S		無？		7.5	27	13
85	BL27	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内P・外S				9.0	27	12
86	BI21	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N				12.0	28	13
87	BJ24	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S？				9.0	28	13
88	BM25	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外不				10.5	28	13
89	BL21	2b	早期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N				9.0	28	13
90	BO29	2b	早期中葉？	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	RL縄文？			10.0	28	13
91	BN23	2b	早期中葉？	深鉢？	体部	－	－	内不・外不	沈線文？			9.0	28	13
92	BM25	2b	早期中葉	深鉢	底部	－	－	内N・外不	尖底			－	28	13
93	－	不明	早期中葉	深鉢	口縁	丸み	小波状（刻み）	内P？・外N？	口唇・口縁縦位刻み　貝殻腹縁文			10.0	28	13
94	10号土坑	埋1層	早期後葉	深鉢	口縁	内削	小波状（刻み）	内S・外S		繊維	外面	9.5	28	13
95	BJ20	2a	早期後葉	深鉢	口縁	丸み	突起（刻み）	不	多角形を呈する器形の頂部か？	繊維		－	28	13
96	BK25	2a	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外S	刺突列	繊維		9.8	28	13
97	BF21	2a	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N		繊維		10.0	28	13
98	BC23	2a	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外S		繊維		10.8	28	13
99	BC23	2a	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N	刺突列骨針？	繊維		9.0	28	13
100	BJ24	2a	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外S		繊維		12.0	28	13
101	BM31	2a	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外S		繊維		9.0	28	13
102	BC23	2a	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内不・外S		繊維		11.0	28	13
103	BK30	2a	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外S		繊維		9.0	28	13
104	BK22	2a	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S？・外不	刺突？	繊維		8.0	28	14
105	BM24	2a	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N	刺突	繊維		7.5	29	14
106	BI24	2a	早期後葉	深鉢	底部	－	－	内S・外N	平底	繊維		8.0	29	14
107	AT24	2b	早期後葉	深鉢	口縁	内削	小波状（刻み）	内S・外S		繊維		10.0	29	14
108	BK23	2b	早期後葉	深鉢	口縁	丸み	小波状（刻み）	内S・外S		繊維		7.5	29	14
109	BA20	2b	早期後葉	深鉢	口縁	内削	小波状（刻み）	内N・外S？		繊維		8.5	29	14
110	BJ23	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N	2条の刺突列	繊維		9.0	29	14
111	BC21	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S？	刺突列	繊維	外面	12.0	29	14
112	BJ23	2b	早期後葉	深鉢	口縁	丸み	不明（刻み）	内S・外S	2条の刺突列	繊維		9.9	29	14
113	BF21	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外S	刺突列？　骨針？	繊維		9.8	29	14
114	BI24	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外S	外面刺突列	繊維		10.0	29	14
115	BC22	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外S？	刺突	繊維		8.2	29	14
116	BJ20	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内N・外S？		繊維		8.0	29	14
117	BC22	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外N		繊維		2.8	29	14
118	BC24	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内不・外S		繊維		8.0	30	14
119	BJ23	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外不	骨針？	繊維		7.8	30	14
120	BJ23	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S？・外S		繊維		9.8	30	14
121	BI24	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外S		繊維		8.5	30	15
122	BI24	2b	早期後葉	深鉢	体部	－	－	内S・外不	骨針？	繊維		10.2	30	15
123	BL24	2a	中期中葉	深鉢	口縁	丸み	突起	内N・外N	渦巻状の突起部分			7.0	30	15
124	BK30	2a	中期中葉	浅鉢	口縁	－	突起？	内N・外N	渦巻隆線文による突起部分か？	骨針		5.0	30	15
125	BM24	2a	中期中葉	深鉢	口縁～頸部	平坦	平坦	内N・外N	RL縄文　粘土紐貼付による渦巻隆線文	骨針		7.2	30	15
126	BL24	2a	中期中葉	深鉢	口縁	尖る	平坦	内N・外縄	LR縄文　隆沈線文	骨針		6.5	30	15
127	BN30	2a	中期中葉	深鉢	口縁	内削	平坦	内N・外不	RL縄文？　隆線文			8.5	30	15
128	BO27	2a	中期中葉	深鉢	口縁	尖る	突起？	内N・外N？	隆沈線文			10.1	30	15
129	BL27	2a	中期中葉	深鉢	口縁	内削	平坦	内N・外不	渦巻隆線文			4.5	30	15
130	BM29	2a	中期中葉	深鉢	口縁	－	－	内N・外N	LR縄文　粘土紐貼付による隆線文	骨針		2.8	30	15

表７　青葉山Ｅ遺跡第７次調査出土土器(3)・土偶観察表
Tab.7　Attribute list of pottery and clay figurine from AOE7 (3)

番号	地区・遺構	層位	時期	器種	部位	端面形	口縁形態	器面調整	特　　徴	胎土	炭化物	器厚	図	図版
131	BM29	2a	中期中葉	深鉢	体部？	－	－	内N・外縄	縄文　隆線文			7.0	30	15
132	BL24	2a	中期中葉	深鉢	頸部	－	－	内N・外N	縄文　隆線文	骨針		5.5	30	15
133	BM24	2a	中期中葉	深鉢	頸部	－	－	内N・外N	隆線文	骨針		6.7	30	15
134	BJ28	2a	中期中葉	深鉢	口縁	－	－	内N・外縄	RL縄文　隆沈線文・刺突			5.5	30	15
135	BI27	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	RL縄文・粘土紐貼付による隆線文	骨針		7.0	30	15
136	BN23	2a	中期中葉	深鉢？	頸部～体部？	－	－	内N・外縄	RL縄文？　粘土紐貼付による隆線文			7.5	30	15
137	BK29	2a	中期中葉	深鉢	頸部～体部	－	－	内N・外N	縄文　沈線文	骨針		4.2	30	15
138	BK29	2a	中期中葉	深鉢	頸部～体部	－	－	内N・外N	LR縄文？　沈線文			4.5	30	15
139	BI28	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	RL縄文　沈線文	骨針		6.5	30	15
140	BN25	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N？・外縄	RL縄文　渦巻沈線文			7.8	30	15
141	BK31	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	LR縄文　沈線文			7.0	31	15
142	BL28	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	LR縄文　沈線文			7.5	31	15
143	BK29	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	LR縄文　渦巻沈線文	骨針		6.0	31	15
144	BN24	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	縄文？　沈線による曲線文			6.0	31	15
145	BM27	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内P？・外不	LR縄文　渦巻沈線文？	骨針		5.8	31	15
146	BO24	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	LR縄文　渦巻沈線文？			6.5	31	15
147	BP28	2a	中期中葉	深鉢	体部？	－	－	内N・外不	粘土紐貼付による隆線文			7.0	31	15
148	BL24	2a	中期中葉	深鉢	頸部～体部？	－	－	内N・外縄	LR縄文？　渦巻沈線文	骨針		4.0	31	15
149	BM27	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	LR縄文　沈線文			5.8	31	15
150	BL30	2a	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	LR縄文　沈線文	骨針		5.0	31	15
151	BJ27	2b	中期中葉	深鉢	口縁～頸部	内削	平坦	内N・外不	縄文　粘土紐貼付による渦巻文	骨針		5.0	31	16
152	BL25	2b	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	縄文・渦巻沈線文			5.5	31	16
153	BJ30	2b	中期中葉	深鉢	頸部	－	－	内N・外N	隆線文	骨針		9.0	31	16
154	BJ27	2b	中期中葉	深鉢	頸部	－	－	内N・外P？	縄文　隆沈線文	骨針	外面	6.5	31	16
155	BL25	2b	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内P？・外縄	RL縄文　渦巻沈線文？	骨針		4.8	31	16
156	BL31	2b	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	RL縄文　沈線文	骨針		5.0	31	16
157	BL25	2b	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	縄文　渦巻沈線文？	骨針		5.0	31	16
158	BJ27	2b	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外N？	縄文？　沈線による曲線文	骨針		6.0	31	16
159	BJ27	2b	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	沈線文	骨針		6.0	31	16
160	BL24	2b	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	RL縄文　沈線文			5.0	31	16
161	BO25	2b	中期？	深鉢？	口縁	平坦	平坦	内N・外N	沈線と刺突			6.0	31	16
162	－	旧表土	中期中葉	深鉢	口縁	丸み	平坦	内N・外N	隆沈線文			8.0	31	16
163	－	旧表土	中期中葉	深鉢	体部	－	－	内N・外縄	RL縄文　粘土紐貼付による隆線文			8.0	31	16
164	BJ29	2a	晩期中葉	浅鉢	口縁～体部	沈線	小波状（刻み）	内P・外縄	磨消縄文（RL）による雲形文　貼付突起	骨針	内面	4.0	31	16
165	BB20	2a	晩期中葉	深鉢	体部	内削	小波状（押圧）	内P・外縄	LR縄文　平行沈線文		内外面	4.5	31	16
166	BL22	2a	晩期？	不明	底部	－	－	内P・外P		骨針		5.0	31	16
167	－	ピット44	晩期後葉	浅鉢	口縁	平坦	平坦	内P・外P	平行沈線文			5.0	31	16
168	BC21	2a	晩期中葉	深鉢	体部	内削	小波状（押圧）	内P・外縄	LR縄文　平行沈線文	骨針	内外面	5.0	32	16
169	－	旧表土	晩期中葉	深鉢	口縁	内削	小波状（押圧）	内P・外縄	LR縄文　平行沈線文			6.0	32	16
170	BJ30	2b	不明	深鉢	体部	－	－	内N・外不	沈線文			8.0	32	16
CF 1	BO24	2a	中期	土偶	－	－	－	－	板状（十字形）土偶の体部　乳房状の突起　両腕と体部中央に隆帯沈線文	－	－	－	32	16
CF 2	BL24	2a	中期	土偶	－	－	－	－	有脚立像土偶の足部分　渦巻状の沈線文	－	－	－	32	16

※表中の略号について
器面調整　S：貝殻条痕文、N：貝殻以外の調整具によるナデ、P：ミガキ、縄：縄文、不：調整の種類が不明
胎土　　繊維：繊維を含むもの、骨針：海綿状骨針を含むもの
器厚の単位はmm

(4) 石器

石器は120点出土した。1層撹乱より14点、旧表土より6点、2a層より57点、2b層より36点、遺構埋土より4点出土しており、他に出土層位が不明のものが3点ある。これらの石器組成は、石鏃7点、尖頭器1点、石匙1点、石篦4点、磨製石斧1点、楔形石器1点、不定形石器8点、凹石7点、磨石3点、石皿2点、石核3点、剥片82点であり、石器以外では、礫のなかに一部あるいは全面が赤化したものが69点あり、これらは何らかの形で熱を受けた可能性が考えられる資料である。

共伴する土器の型式により複数の時期の存在が指摘されているため、石器群を一括して統計的な分析を行うことは有意性のあるものではなく、また、これらの出土状況や型式等より複数の時期に明確に分類することも不可能である。したがって、ここでは個々の石器の記述を中心とする。

① 石器の器種とその概要

【石鏃】(図34－1～3、図35－58～61)

7点出土した。全体の形状や基部の形状から、1類(凸基)、2類(平基・縦長)、3類(薄手)の3類に細分される(図41)。1類は1点出土した。凸基有茎鏃である。59は碧玉製で、先端がわずかに破損しており、衝撃剥離痕として認められる。また、加熱処理が施され整形されたものと考えられる。2類は4点出土した。平基で、長さが幅の2倍以上となる縦長の石鏃である。3は珪質頁岩製で、逆刺の1つが破損した箇所に再加工が施されている。素材剥片の腹面がわずかに残る。58は玉髄製で、基部に大きな破損面が残されている。周囲の二次加工面との切り合い関係から、製作時における破損と考えられる。60は珪質頁岩製で、素材剥片の腹面がわずかに残る。61は珪質凝灰岩製で、素材剥片の腹面が残されている。先端が破損しており、腹面側に大きな衝撃剥離痕がみられる。3類は2点出土した。他の石鏃と比べて非常に薄手に作られているのが特徴である。1は珪質頁岩製で、凹基の石鏃である。加熱処理を施して二次加工がおこなわれ、整形されたものと考えられる。また、素材剥片の背面および腹面が大きく残されている。2は珪質凝灰岩製で、平基の石鏃である。全面に二次加工が施され、素材面はすべて取り除かれている。

【尖頭器】(図34－4)

1点出土した。4は珪質頁岩製で、剥片素材である。先端側が大きく破損している。一方の面は全面に二次加工が施されているのに対し、もう一方の面は縁辺部のみの加工である。また、尖頭器製作に関連する石器として、ポイントフレイクが3点(図35－56、57、図36－93)出土している。これらの石材は、珪質頁岩、珪質凝灰岩、流紋岩と思われるものがそれぞれ1点ずつであり、この尖頭器と同一の母岩のものはない。したがって、時期が異なる可能性も考えられるが、複数の尖頭器が製作されたものと考えられる。

【石匙】(図34－5)

1点出土した。5は珪質頁岩製で、剥片素材である。形状は縦型に近似するが、大きく湾曲している。基部は折れ面と二次加工により構成される。刃部は片面加工であり、縁辺の全周にわたって急角度の二次加工が施されている。

【石篦】(図34－6～9)

4点出土した。うち完形品は2点である。6は頁岩製で、片面にわずかに自然面が残るものの、両面全体に二次加工が施されている。刃部は、使用後に再加工が施され、新たな刃部が作り出されている。7は珪質凝灰岩製で、剥片素材である。刃部および基部が大きく欠損している。また、両面に素材面が大きく残る。8は珪化凝灰岩製かと思われ、剥片素材である。両側辺は両面に加工が施されているものの、刃部は片面のみの加工にとどまる。素材剥片の腹面が大きく残る。その剥離方向は石器の中軸線に対して直交しており、幅広の剥片を用いて石篦に加工したものと考えられる。また、受熱の痕跡がみられる。9は珪質凝灰岩製で、剥片素材である。全体の

形状が不定形であり、節理による大きな破損がみられる。製作時に破損したものが廃棄された未製品の可能性が考えられる。剥片の打面側が刃部となり、片面加工で、刃部と側辺部に急角度の二次加工が施されている。背面側には自然面が大きく残る。石篦の製作過程を知ることができる良好な資料である。

【楔形石器】（図34－10）

1点出土した。10は珪質凝灰岩製で、上下左右の相対する2辺が刃部として用いられたと考えられる。

【不定形石器】（図35－11～13、62、図36－98、99、104、105）

上記の器種に該当しないその他の打製石器（トゥール）を不定形石器として分類した。8点出土し、二次加工の形状より、ノッチ（1点）、スクレイパー（4点）、二次加工ある剥片（3点）に細分される。105はノッチである。珪質凝灰岩製で、自然面が背面に大きく残る、縦長の剥片を素材としている。背面右側辺にやや粗い二次加工が連続して施されており、これら一連の加工の一部にノッチ状の加工がある。その加工は剥片の末端部にやや近い位置にある。11、12、99、104はスクレイパーである。11は珪質凝灰岩製で、背面にポジ面を有する剥片を素材としている。素材剥片の背腹両面の縁辺部に二次加工がみられる。背面側はほぼ全周に加工が施されているが、腹面側は基部のみにとどまる。なかでも、背面左側辺の加工が他の部位と比べてより丁寧に施されている。12は珪質凝灰岩製で、剥片を素材としており、背面に自然面を大きく残す。素材剥片の打面は折れて欠損している。二次加工は背面側のみにとどまり、末端辺に急角度の加工が施されている。99は珪質頁岩製で、剥片素材である。素材剥片の形状を大きく変えることなく、背面右側辺に二次加工が連続して施されている。104は、宮城県加美町（旧宮崎町）湯ノ倉産の黒曜石製で、これと同一母岩の剥片が1点出土している（図35－39）。剥片を素材としており、打面部と末端辺を刃部とする楔形石器として使用された痕跡がみられる。その後、腹面左側辺に二次加工を施し、スクレイパーとして転用している。13、62、98は二次加工ある剥片である。13は珪質頁岩製で、剥片を素材としている。二次加工は基部側の両側辺のみにとどまる。62は珪質頁岩製で、縁辺のほぼ全周にわたって、腹面側からの細かな二次加工がみられる。特に、背面右側辺において丁寧に二次加工が施されている。98は珪質凝灰岩製で、背面側右半分が大きく破損しているため、全体の形状は不明である。背面左側辺の縁辺部に、腹面側から細かな二次加工が施されている。

【磨製石斧】（図35－14）

1点出土した。14は珪質凝灰岩製である。元の磨製石斧の厚みが剥離により半減したものを素材としており、その側辺に剥離による粗い調整を施して整形している。刃部は研磨により作り出しており、また、使用・破損後に再び研磨による再調整が施されている。基部側の破損は最終的な破損であり、これが廃棄に至る直接的な要因となったものと考えられる。

【石皿】（図37－15、16）

2点出土した。15、16ともに安山岩礫を用いている。実測図では使用面を白抜きで表現している（以下、同）。15は大きく半分に破損している。使用面には凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。16は扁平な礫の形状をそのまま利用している。礫面中央部の一段高まっている部分を使用面として用いており、使用面はゆるやかにくぼむ。また、使用面付近において大きさや深さの異なる線状痕が2箇所にみられる。

【磨石】（図38－17～19）

3点出土した。すべて安山岩礫を用いている。17は扁平な円礫を用いており、大きく半分に破損している。平坦な面は2面存在するが、1面のみ使用されている。18は楕円形の円礫を用いており、破損はほとんどみられない。より広く平坦な2面が使用面となる。19は長円形の円礫を用いており、大きく破損している。使用面は1面のみであり、最も平坦な面が使用されている。

【凹石】（図38－20、図39－21～23、図40－63、95、97）

7点出土した。すべて安山岩礫を用いている。20は扁平な長円形の円礫を用いており、平坦な2面に敲打によ

る浅いくぼみが１箇所ずつみられる。21は扁平な円礫を用いており、平坦な２面において広範囲にくぼみが広がる。敲打痕が集中し、くぼみが深くなる箇所はそれぞれ２箇所ずつある。22は扁平な円礫を用いており、大きく破損している。平坦な２面に敲打痕の集中するくぼみが１個ずつみられる。図左面のくぼみは深く、右面のくぼみは浅い。また、深いくぼみの中とその周辺に黒色の付着物が残されている。23は扁平な楕円形の円礫を用いており、最も平坦な面に深いくぼみが１箇所みられる。また、くぼみのある面に小さい磨面が見られ、磨石としても利用されたことが考えられる。63は楕円形のやや扁平な円礫を用いており、広い面に深いくぼみが１個ある。敲打痕が集中してできたくぼみというより、大きな夾雑物の痕跡の可能性が考えられる。95はピット75より出土しており、扁平な亜円礫を用いている。平坦な２面に敲打痕がみられ、その集中はそれぞれ２箇所ずつあり、くぼみとなっている。特に図左面の２箇所のくぼみが深い。97は風倒木痕より出土しており、亜円礫を用いている。最も平坦で広い１面に敲打痕が広がり、また敲打痕の集中によりできた２箇所のくぼみは非常に浅い。

【石核】（図36－64、106）

３点出土した。石材はすべて珪質頁岩である。64と106は、同一母岩と考えられ、これと同じ母岩のものは他に剥片が１点ある。64は亜円礫を素材としており、自然面が表面の約４割程度に残されている。打面転位が少なくとも３回行われている。最終的な作業面はa面であり、d面（剥離面）およびb面（自然面）を打面として長さ１～３cm程度の剥片を剥離している。106は、背面および打面が自然面の剥片を素材としている。素材剥片の打面はc面（自然面）であり、b面の大きな剥離面が腹面となる。剥片剥離は素材剥片の背面側で行われ、その打面は素材剥片の折れ面である。長さ４～５cm程度のやや縦長の剥片が剥離されている。

【剥片】（図35－39、56、57、図36－93）

82点出土した。うち、尖頭器製作における二次加工の段階で生じた剥片（ポイントフレイク）は３点である。石材は珪質頁岩と珪質凝灰岩が31点（38%）ずつと最も多く、それ以外の石材で10点を超えるものはない。少数の石材が多いものの、その種類は８種類と多様性に富む。折れ面のみられるものは59点（72%）あり、完形の剥片は少ない。また、受熱の痕跡が見られるものは２点（2%）のみである。

②　石材の利用状況

トゥールの材料は珪質頁岩と珪質凝灰岩が最も多く、剥片と同様の傾向を示す（表10）。したがって、当遺跡でトゥールの素材剥片の剥離から二次加工までの一連の石器製作がおこなわれた可能性が考えられる。ただし、複数の時期の遺物が混在しているため、確証を得られるものではない。また、トゥールの材料となるもののうち、剥片の出土がみられない碧玉や玉髄、１点のみの出土である黒曜石などは、当遺跡において大きな礫の段階から剥片剥離が行われたものとは考えられず、製品あるいはある程度製作が進行した段階で持ち込まれたものと考えられる。

③　石器の技術的特徴

当石器群にみられる石器の技術的特徴として、加熱処理や再加工、石器の転用がみられる。

加熱処理によるトゥールの製作は、その割合は大きくないものの、石鏃（２点）や石篦（１点）にみられる。また、受熱の痕跡がみられる剥片は２点であり、さらにその割合が小さくなる。加熱処理が普遍的に行われたとは必ずしも考えられないが、石器製作を行う上で有効的な技術であったものと考えられる。

再加工の痕跡は、石鏃、石篦、磨製石斧でそれぞれ１点ずつにみられる。石鏃や石篦の場合は、主要な部分の一部が欠損し再加工を施すというように、元の形状を大きく変えることはない。これに対し、磨製石斧の場合は、大きく剥離したものを、剥離や研磨により再び形を作り出しており、新しく作り出されたものは元の形状と大きく異なる。これらは、同じ再加工でも両者の持つ意味合いは異なる。前者の場合は単なる補修としてみなすこと

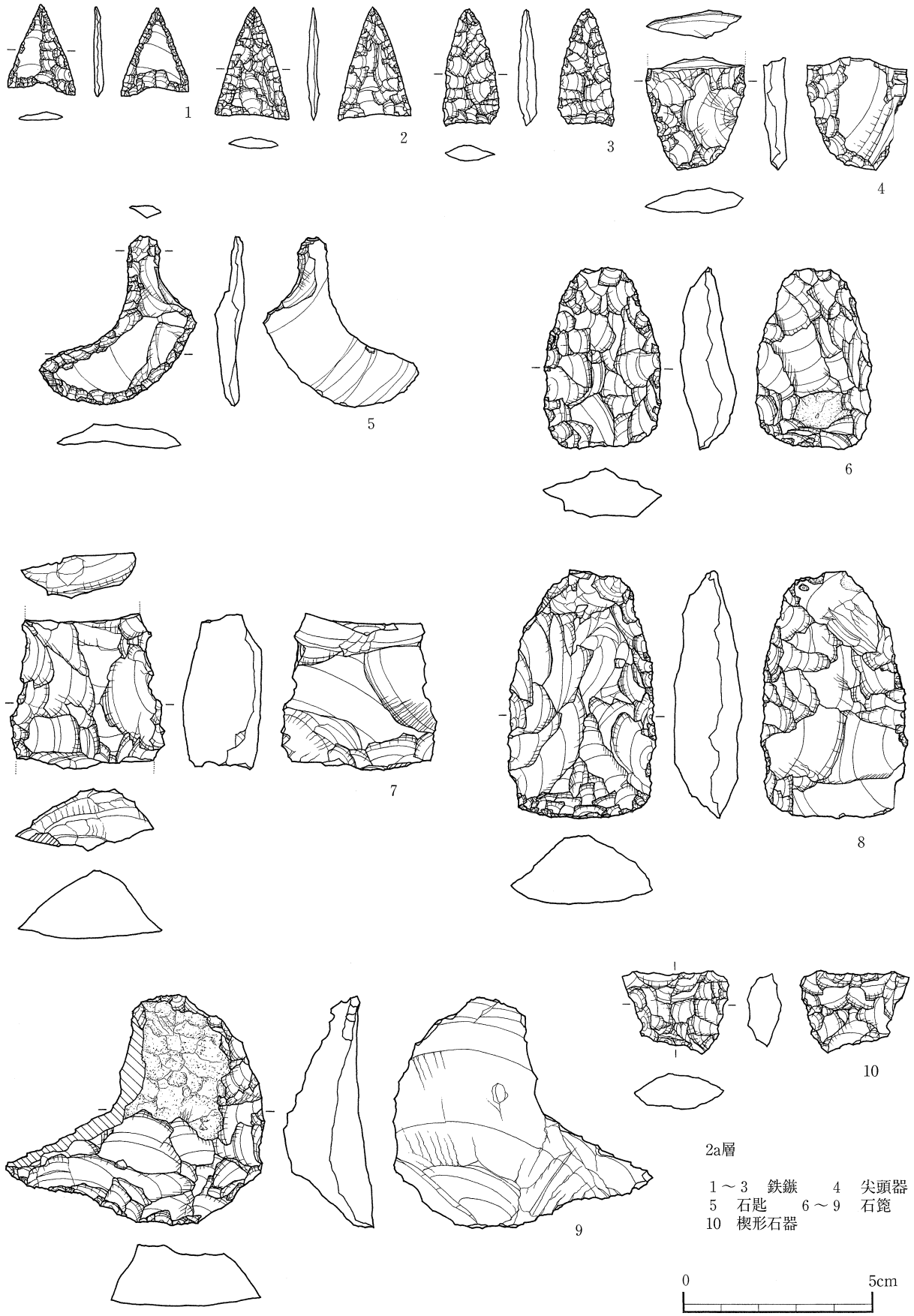
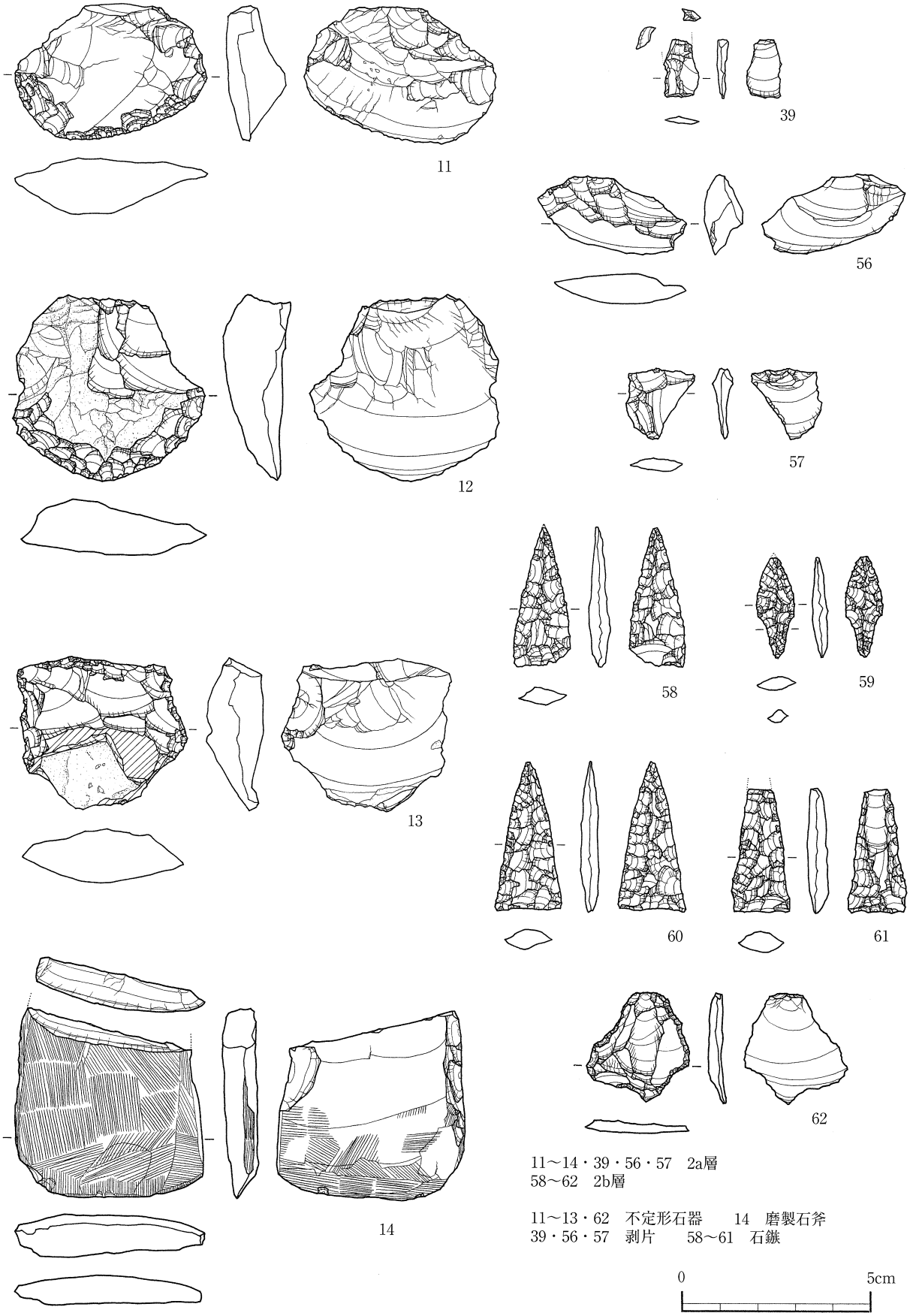


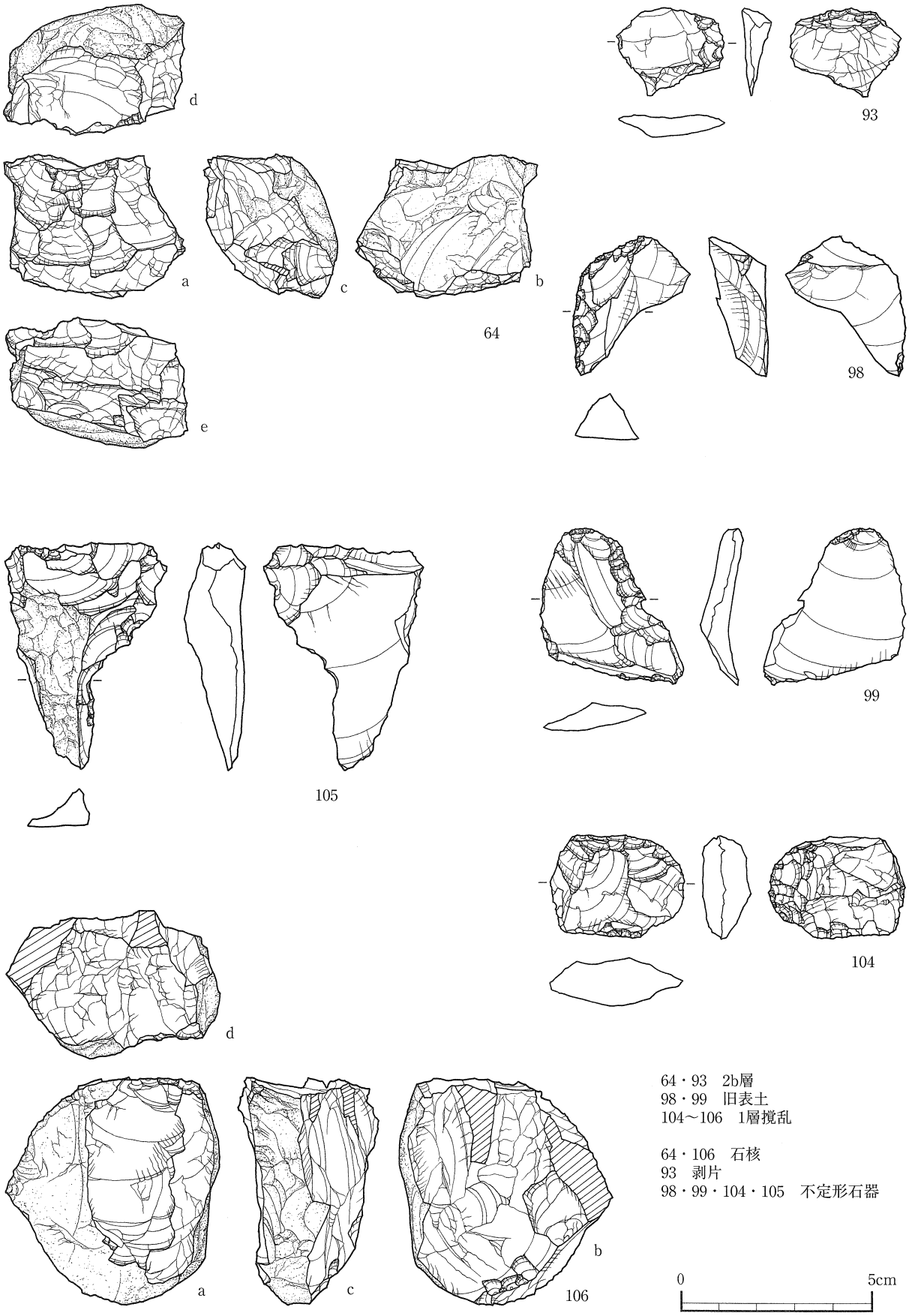
図34　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（1）
Fig.34　Stone implements from AOE7（1）



11～14・39・56・57　2a層
58～62　2b層

11～13・62　不定形石器　　14　磨製石斧
39・56・57　剥片　　58～61　石鏃

図35　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（2）
Fig.35　Stone implements from AOE7（2）



64・93　2b層
98・99　旧表土
104～106　1層攪乱

64・106　石核
93　剥片
98・99・104・105　不定形石器

図36　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（3）
Fig.36　Stone implements from AOE7（3）

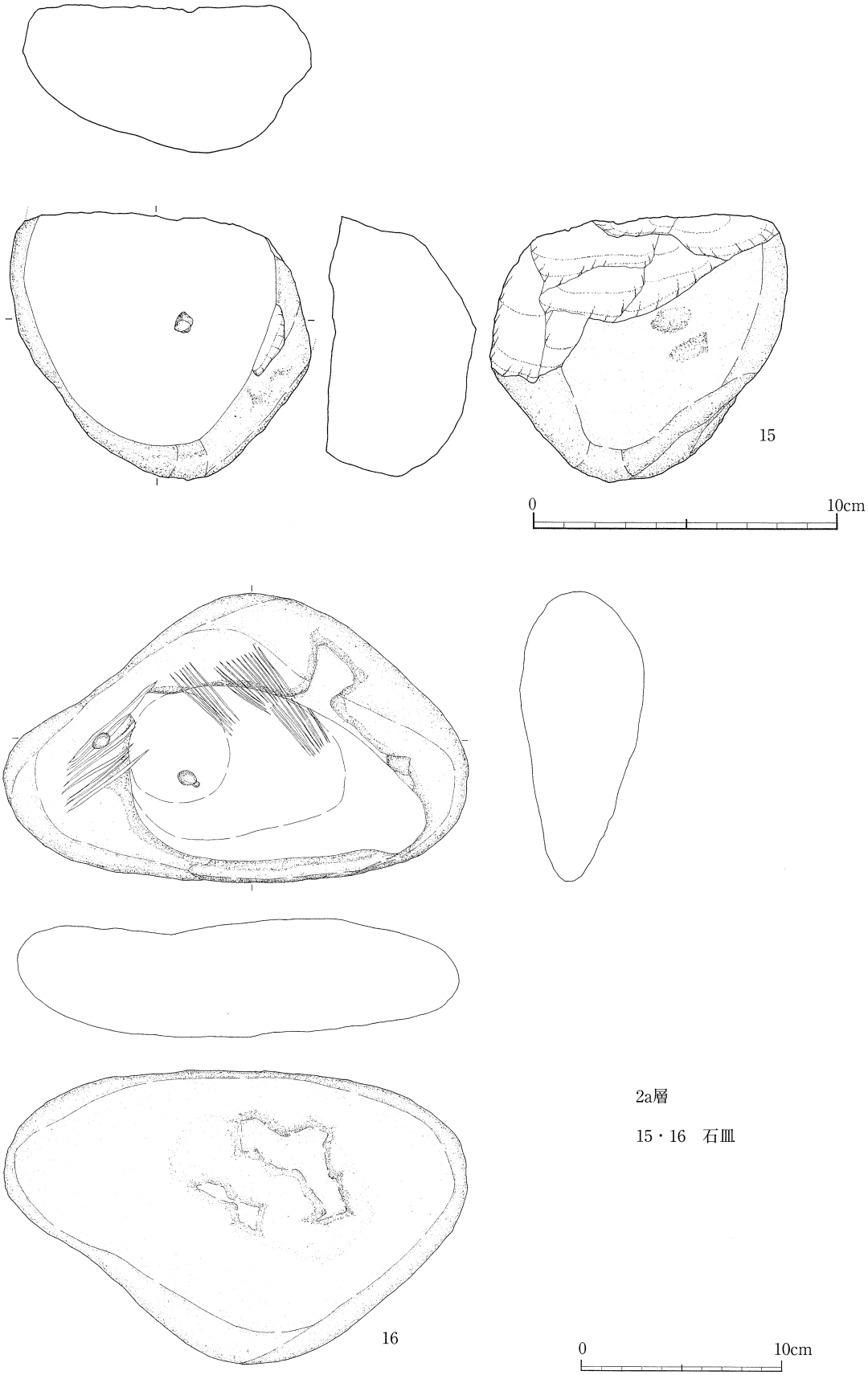


図37　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（4）
Fig.37　Stone implements from AOE7（4）

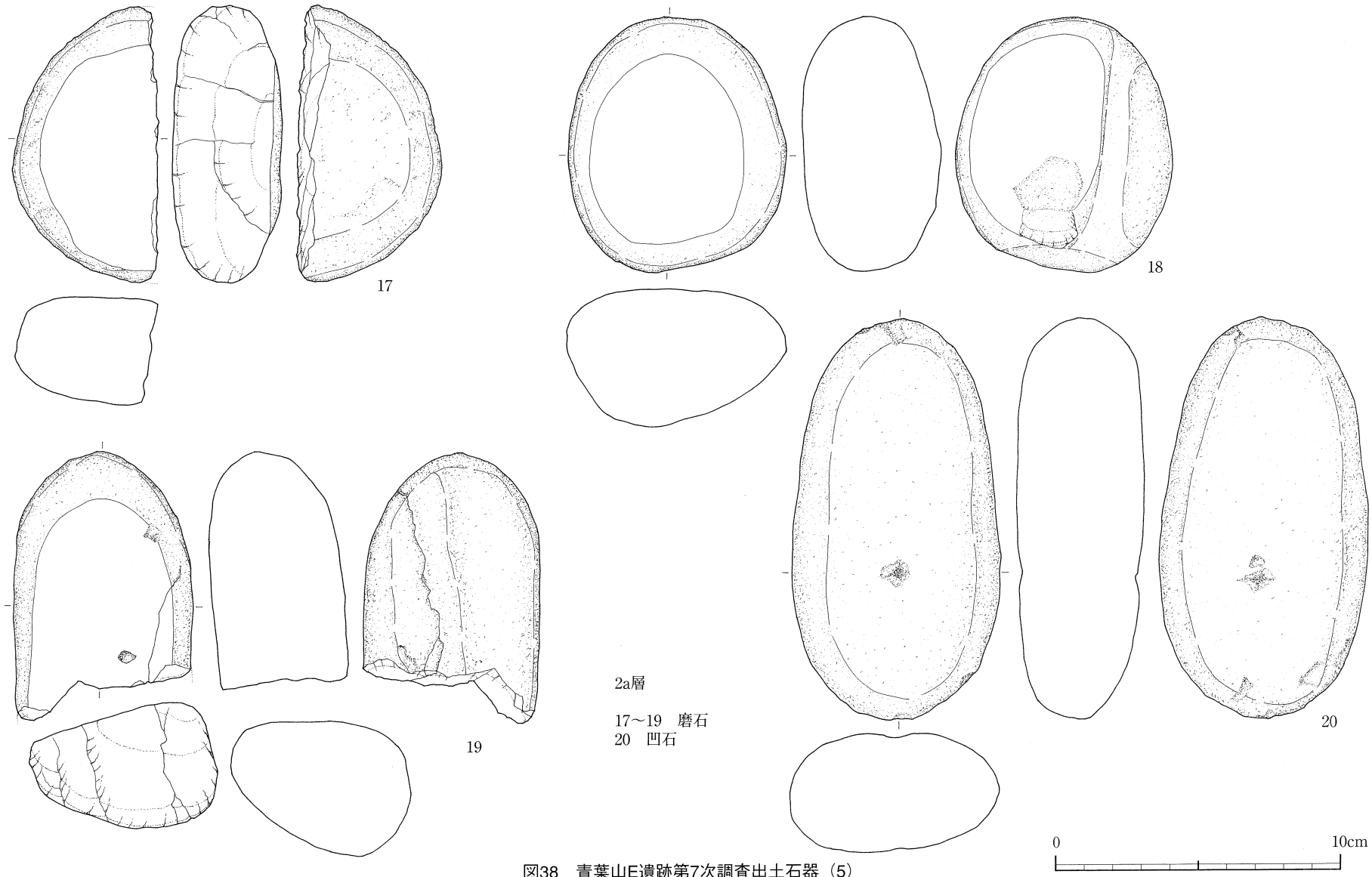
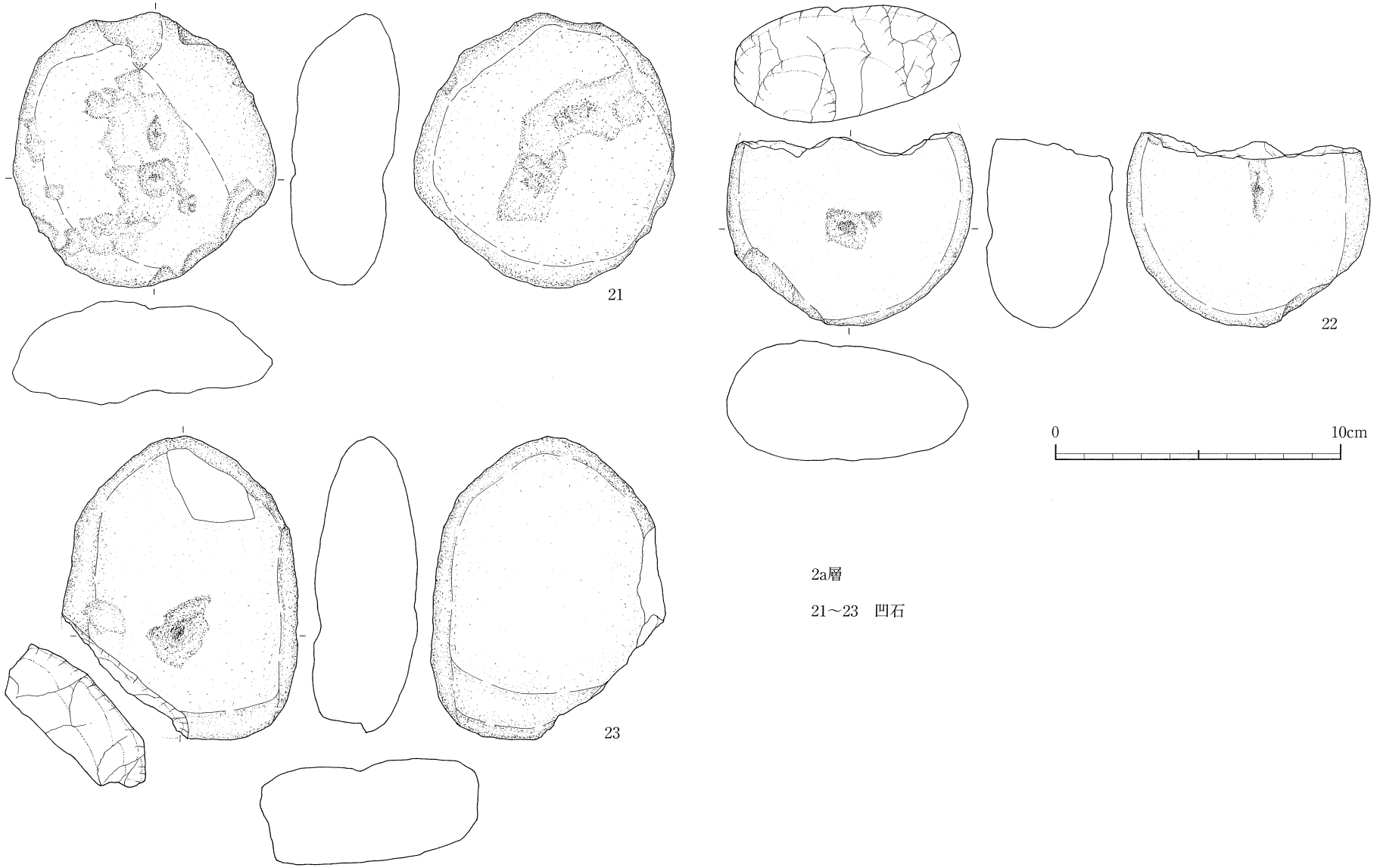


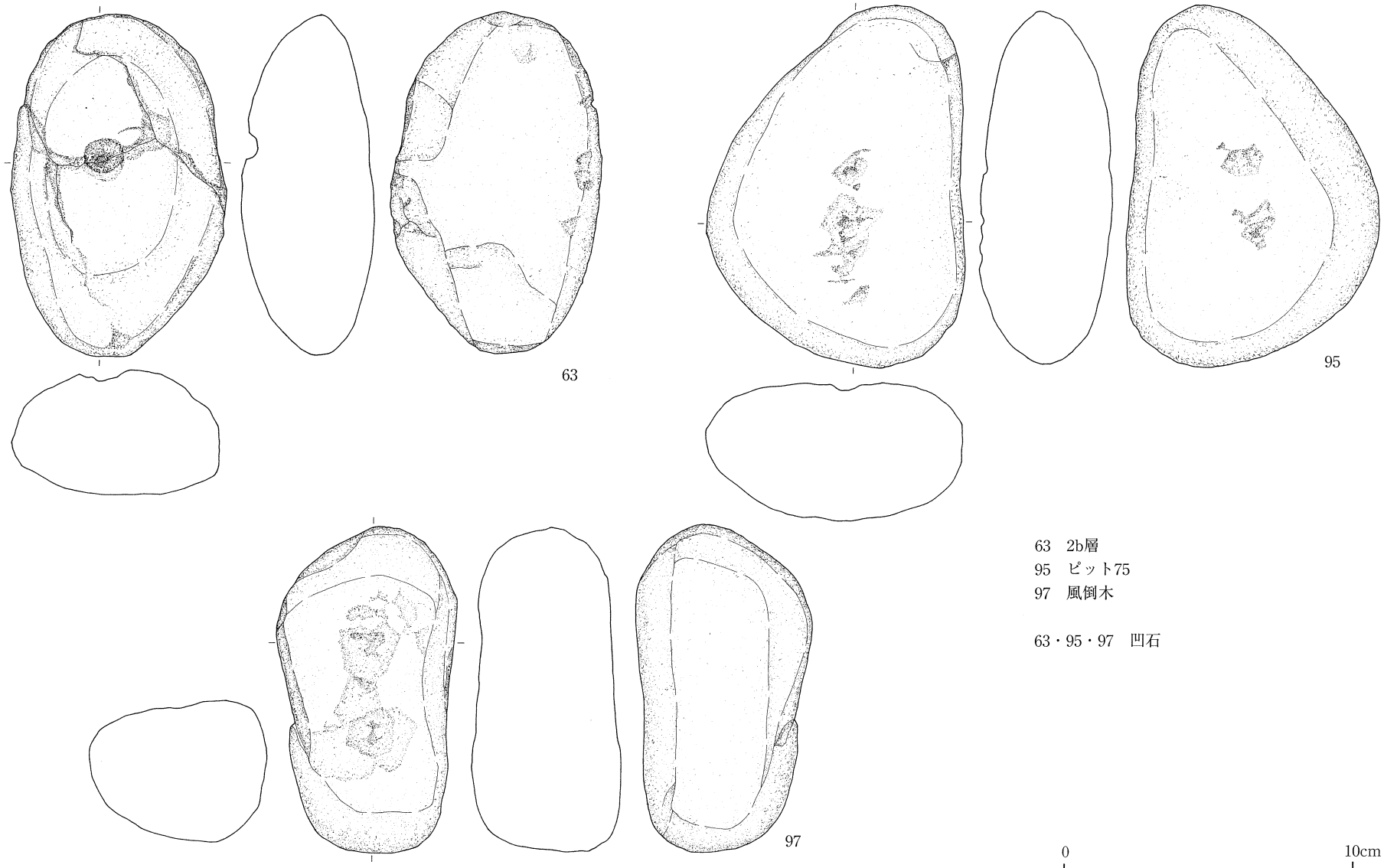
図38　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（5）
Fig.38　Stone implements from AOE7（5）



2a層

21～23　凹石

図39　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（6）
Fig.39　Stone implements from AOE7（6）



63　2b層
95　ピット75
97　風倒木

63・95・97　凹石

0　10cm

図40　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（7）
Fig.40　Stone implements from AOE7（7）

表８　青葉山Ｅ遺跡第７次調査出土石器観察表（1）
Tab.8　Attribute list of stone implements from AOE7（1）

No.	グリッド	出土場所	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	受熱	付着物	破損	備考	図	図版
1	BB24	2a層	石鏃	珪質頁岩	23.6	17.4	2.5	0.9	有	有		凹基・加熱処理	34	17
2	BB21	2a層	石鏃	珪質凝灰岩	29.0	19.1	2.8	1.1				平基	34	17
3	BO27	2a層	石鏃	珪質頁岩	30.3	14.7	4.8	2.0				平基・逆刺再加工	34	17
4	BN22	2a層	尖頭器	珪質頁岩	28.9	26.3	6.6	4.9			有		34	17
5	BK31	2a層	石匙	珪質頁岩	43.2	41.2	7.2	6.7				縦型	34	17
6	BL28	2a層	石篦	頁岩	48.0	30.7	14.3	19.4				刃部再生	34	17
7	BN26	2a層	石篦	珪質凝灰岩	39.9	40.5	19.0	33.9			有	基部・刃部破損	34	17
8	BN27	2a層	石篦	珪化凝灰岩？	64.7	38.4	16.3	46.0	有				34	17
9	BO29	2a層	石篦	珪質凝灰岩	60.3	66.5	19.5	55.3			有	未製品	34	17
10	BK23	2a層	楔形石器	珪質凝灰岩	21.7	28.9	9.3	5.0					34	17
11	BO29	2a層	不定形石器(SC)	珪質凝灰岩	35.5	50.1	15.3	21.9					35	17
12	BL30	2a層	不定形石器(SC)	珪質凝灰岩	48.3	49.6	12.5	29.4					35	17
13	BN23	2a層	不定形石器(RF)	珪質頁岩	40.6	44.1	14.6	24.5			有		35	17
14	BL27	2a層	磨製石斧	珪質凝灰岩	49.7	48.9	8.0	32.6			有	刃部再生	35	17
15	BL26	2a層	石皿	安山岩	84.4	99.9	47.3	552.0			有		37	19
16	BN24	2a層	石皿	安山岩	228.0	145.0	60.4	2369.5				線状痕あり	37	19
17	BJ25	2a層	磨石	安山岩	96.1	49.0	36.8	245.3			有		38	19
18	BN30	2a層	磨石	安山岩	89.1	75.4	47.9	454.5					38	19
19	BP30	2a層	磨石	安山岩	91.5	61.3	46.3	352.4			有		38	19
20	BK28	2a層	凹石	安山岩	139.1	71.8	43.7	672.0					38	19
21	BK28	2a層	凹石	安山岩	91.9	89.7	35.3	315.6	有				39	20
22	BK29	2a層	凹石	安山岩	69.5	84.2	42.5	324.2		有	有		39	20
23	BO24	2a層	凹石	安山岩	105.8	81.6	34.4	434.4	有		有	磨石としても使用	39	20
24	BP27	2a層	石核	珪質頁岩	56.4	49.9	45.8	118.0					－	－
25	BB20	2a層	剥片	流紋岩	52.7	44.5	16.4	34.1			有		－	－
26	BB20	2a層	剥片	流紋岩	41.2	59.4	14.4	23.9			有		－	－
27	BC20	2a層	剥片	流紋岩	65.8	78.2	23.3	81.4					－	－
28	BC20	2a層	剥片	流紋岩	53.5	50.8	12.7	31.1			有		－	－
29	BC20	2a層	剥片	流紋岩	32.2	49.2	9.6	12.2			有		－	－
30	BC20	2a層	剥片	流紋岩	59.2	33.4	12.4	13.4			有		－	－
31	BK30	2a層	剥片	珪質頁岩	36.0	20.8	10.3	5.4			有		－	－
32	BJ29	2a層	剥片	流紋岩？	82.4	70.9	17.4	73.4			有		－	－
33	BJ22	2a層	剥片	凝灰岩	27.5	25.1	13.3	8.9			有		－	－
34	BM20	2a層	剥片	珪質頁岩	34.9	23.3	5.2	3.5			有		－	－
35	BN20	2a層	剥片	珪質凝灰岩	23.9	28.2	3.7	2.5	有		有		－	－
36	BL27	2a層	剥片	黒曜石	35.4	47.6	20.2	19.3			有		－	－
37	BM23	2a層	剥片	珪質頁岩	19.6	22.2	8.9	4.3			有		－	－
38	BM24	2a層	剥片	珪質頁岩	57.5	49.3	26.0	55.5				850と同一母岩	－	－
39	BN23	2a層	剥片	黒曜石	15.0	9.1	2.5	0.1			有		35	17
40	BN24	2a層	剥片	珪質頁岩	20.6	17.5	8.0	2.8			有		－	－
41	BK28	2a層	剥片	珪化凝灰岩	58.7	42.8	8.5	15.8					－	－
42	BL29	2a層	剥片	珪質頁岩	39.0	23.8	11.6	9.0			有		－	－
43	BO27	2a層	剥片	珪質凝灰岩	32.7	19.4	4.0	7.7			有		－	－
44	BN28	2a層	剥片	珪質凝灰岩	12.3	17.1	3.3	0.1			有		－	－
45	BN29	2a層	剥片	珪質凝灰岩	40.2	40.2	14.1	12.8					－	－
46	BL31	2a層	剥片	珪質凝灰岩	22.7	35.1	10.4	7.2			有		－	－
47	BO24	2a層	剥片	珪質凝灰岩	10.7	13.5	3.0	0.4			有		－	－
48	BO28	2a層	剥片	珪質凝灰岩	62.2	46.8	15.8	34.2			有		－	－
49	BP29	2a層	剥片	珪質凝灰岩	38.7	31.9	4.7	5.0			有		－	－
50	BP28	2a層	剥片	珪質凝灰岩	13.9	12.7	3.2	0.1					－	－
51	BP28	2a層	剥片	珪質凝灰岩	26.3	11.2	4.4	1.3			有		－	－
52	BP28	2a層	剥片	珪質凝灰岩	7.7	12.5	1.5	0.1			有		－	－
53	BO28	2a層	剥片	珪質凝灰岩	37.4	40.4	7.5	7.9			有		－	－
54	BO30	2a層	剥片	珪質凝灰岩	55.1	45.9	16.0	27.1					－	－
55	BO31	2a層	剥片	珪質凝灰岩	16.2	24.5	3.5	1.6			有		－	－
56	BM29	2a層	剥片（PF）	珪質凝灰岩	20.3	38.1	10.0	4.9					35	17
57	BQ27	2a層	剥片（PF）	珪質頁岩	18.6	18.9	4.7	1.0					35	18
58	BB22	2b層	石鏃	玉髄	34.6	14.7	5.1	2.2			有	平基	35	18
59	BI29	2b層	石鏃	碧玉	26.0	9.9	3.9	0.8			有	凸基有茎・加熱処理？・衝撃剥離	35	18
60	BM25	2b層	石鏃	珪質頁岩	38.8	17.6	4.6	2.5				平基	35	18
61	BJ24	2b層	石鏃	珪質凝灰岩	32.3	15.4	5.3	2.5			有	平基・衝撃剥離	35	18
62	BI24	2b層	不定形石器(RF)	珪質頁岩	28.6	26.8	2.9	2.2					35	18
63	BJ23	2b層	凹石	安山岩	116.5	72.1	45.2	473.3					40	20
64	BN24	2b層	石核	珪質頁岩	42.7	47.6	33.2	68.1				764と同一母岩	36	18
65	BC20	2b層	剥片	凝灰岩	25.8	17.4	5.2	1.9			有		－	－

表９　青葉山Ｅ遺跡第７次調査出土石器観察表（2）
Tab.9　Attribute list of stone implements from AOE7（2）

No.	グリッド	出土場所	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	受熱	付着物	破損	備考	図	図版
66	BC21	2b層	剥片	珪質凝灰岩	69.1	22.0	14.0	19.5			有		－	－
67	BF22	2b層	剥片	珪化凝灰岩	34.7	37.7	9.2	11.9					－	－
68	BK23	2b層	剥片	珪質頁岩	17.9	24.7	3.1	1.4			有		－	－
69	BN20	2b層	剥片	凝灰岩	26.4	20.7	6.7	2.9			有		－	－
70	BK30	2b層	剥片	珪質頁岩	24.9	42.8	11.3	10.1			有		－	－
71	BL29	2b層	剥片	珪質頁岩	39.5	47.1	19.3	24.8				947の４点接合	－	－
72	BL29	2b層	剥片	珪質頁岩	35.3	38.7	19.9	30.1			有		－	－
73	BL29	2b層	剥片	珪質頁岩	34.2	29.0	27.0	25.3			有		－	－
74	BL29	2b層	剥片	珪質頁岩	23.4	28.9	19.8	18.2			有		－	－
75	BM29	2b層	剥片	珪質凝灰岩	15.9	11.5	2.5	0.3			有		－	－
76	BL30	2b層	剥片	珪質頁岩	14.0	17.0	2.2	0.3					－	－
77	BL31	2b層	剥片	珪質頁岩	14.4	10.2	1.1	0.1					－	－
78	BI24	2b層	剥片	珪質凝灰岩	40.0	52.4	15.9	35.2			有		－	－
79	BI24	2b層	剥片	珪質頁岩	22.0	22.1	3.8	1.1			有		－	－
80	BI24	2b層	剥片	珪質頁岩	10.3	11.7	1.8	0.2			有		－	－
81	BI25	2b層	剥片	珪質凝灰岩	63.1	46.2	9.3	23.5			有		－	－
82	BJ24	2b層	剥片	珪質頁岩	16.6	26.8	3.0	1.3			有		－	－
83	BJ23	2b層	剥片	珪質凝灰岩	16.5	20.2	6.6	1.0			有		－	－
84	BO25	2b層	剥片	珪質頁岩	10.8	11.7	1.3	0.1	有		有		－	－
85	BO29	2b層	剥片	珪質凝灰岩	14.7	12.3	4.5	0.5			有		－	－
86	BO27	2b層	剥片	珪質凝灰岩	19.2	26.4	5.8	2.0			有		－	－
87	BP28	2b層	剥片	珪質凝灰岩	18.4	11.1	2.9	0.3			有		－	－
88	BP24	2b層	剥片	珪質頁岩	21.3	15.9	3.3	0.8			有		－	－
89	BQ25	2b層	剥片	珪質凝灰岩	25.7	21.3	3.2	1.4					－	－
90	BQ25	2b層	剥片	珪質頁岩	27.3	31.3	4.6	3.0					－	－
91	BP29	2b層	剥片	珪質凝灰岩	26.3	17.6	5.0	1.5			有		－	－
92	BP25	2b層	剥片	珪質凝灰岩	18.9	23.2	5.0	1.5			有		－	－
93	BM29	2b層	剥片（PF）	流紋岩？	23.8	28.7	7.5	3.6					36	18
94	BJ25	10号土坑埋土1層	剥片	珪質凝灰岩	35.1	25.9	10.7	6.4			有		－	－
95	BJ31	ピット78埋土	凹石	安山岩	124.3	85.7	46.6	697.4					40	20
96	－	ピット153埋土	剥片	珪質頁岩	4.3	7.7	1.3	0.1			有		－	－
97	BJ29	風倒木埋土1層	凹石	安山岩	111.9	60.5	49.0	461.1	有				40	20
98	－	旧表土	不定形石器（RF）	珪質凝灰岩	35.4	32.2	13.3	9.2			有		36	18
99	－	旧表土	不定形石器（SC）	珪質頁岩	43.0	36.7	17.3	8.8					36	18
100	－	旧表土	剥片	珪質頁岩	34.2	35.3	13.3	12.8					－	－
101	－	旧表土	剥片	流紋岩	53.6	51.3	12.5	22.7					－	－
102	－	旧表土	剥片	流紋岩	51.8	68.0	13.9	32.2			有		－	－
103	－	旧表土	剥片	流紋岩？	46.0	27.1	11.0	11.1			有		－	－
104	－	1層撹乱	不定形石器（SC）	黒曜石	26.6	35.1	13.1	11.7				楔形石器の転用、840と同一母岩	36	18
105	－	1層撹乱	不定形石器（NT）	珪質凝灰岩	59.1	42.0	15.9	23.6					36	18
106	－	1層撹乱	石核	珪質頁岩	58.7	55.3	36.3	119.4				764・850と同一母岩	36	18
107	－	1層撹乱	剥片	凝灰岩	28.6	34.5	8.0	6.0			有		－	－
108	－	1層撹乱	剥片	珪質頁岩	80.4	46.6	13.6	37.3					－	－
109	－	1層撹乱	剥片	珪質頁岩	59.3	50.2	23.8	55.4					－	－
110	－	1層撹乱	剥片	珪質頁岩	69.8	62.4	21.4	85.5			有		－	－
111	－	1層撹乱	剥片	珪質凝灰岩	46.0	33.3	7.8	8.9					－	－
112	－	1層撹乱	剥片	珪質頁岩	32.1	41.7	7.1	7.8			有		－	－
113	－	1層撹乱	剥片	珪質凝灰岩	11.1	12.6	2.5	0.1					－	－
114	－	1層撹乱	剥片	珪質凝灰岩	18.0	24.6	8.0	2.1			有		－	－
115	－	1層撹乱	剥片	珪質頁岩	13.5	16.4	4.1	0.5					－	－
116	－	1層撹乱	剥片	珪質頁岩	9.5	11.2	1.9	0.1			有		－	－
117	－	1層撹乱	剥片	メノウ	24.2	23.3	10.3	3.5			有		－	－
118	BK30	不明	剥片	珪質頁岩	25.9	37.7	13.3	16.2			有		－	－
119	－	不明	剥片	珪質頁岩	23.8	21.0	5.1	1.9					－	－
120	－	不明	剥片	珪質凝灰岩	47.9	38.8	20.2	27.5			有		－	－

SC：スクレイパー、PF：ポイントフレイク、NT：ノッチ、RF：リタッチドフレク

表10　青葉山Ｅ遺跡第７次調査出土石器器種別の石材利用状況
Tab.10　How to use the material of stones in stone types at AOE7

器種	珪質頁岩	頁岩	珪化凝灰岩	珪化凝灰岩?	珪質凝灰岩	凝灰岩	流紋岩	流紋岩?	メノウ	碧玉	玉髄	黒曜石	安山岩	総計
石鏃	3				2					1	1			7
尖頭器	1													1
石匙	1													1
石篦		1		1	2									4
楔形石器					1									1
不定形石器（NT）					1									1
不定形石器（SC）	1				2							1		4
不定形石器（RF）	2				1									3
磨製石斧					1									1
石皿													2	2
磨石													3	3
凹石													7	7
石核	3													3
剥片	30		2		30	4	8	2	1			2		79
剥片（PF）	1				1			1						3
総計	42	1	2	1	41	4	8	3	1	1	1	3	12	120

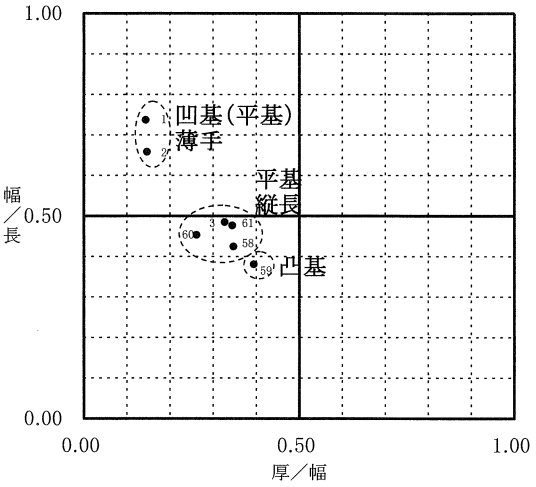


図41　青葉山E遺跡第7次調査出土石鏃の形状
Fig.41　Shapes of stonearrowhead from AOE7

ができるが、後者の場合は単なる補修にとどまらず、大がかりなものである。このように、元の形状を大きく変えながらも使用し続けなければならない理由の一つとして、石器の材料となる適当な石が容易に入手できなかったという背景が考えられるであろう。

石器の転用は、不定形石器（スクレイパー）１点、凹石１点にみられる。スクレイパーとして転用された石器は黒曜石製であり、当石器群においては２点のみの稀少な石材である。これが転用の大きな理由の一つとして考えられる。この石器について、不定形石器という便宜的な器種名称を用いているが、スクレイパーとして転用する際に二次加工が丁寧に施されるなど、実際は、石匙などの定型的な石器と同様に重要視されていた石器であったものであろう。

6．まとめ（図42・43）

青葉山E遺跡は、これまでに7次にわたる調査が行われた。青葉山E遺跡の調査は、この第7次調査で一段落することから、青葉山E遺跡のこれまでの調査全体についてまとめておきたい。

【遺構について】

これまでの調査で検出された遺構は、竪穴住居跡2棟、溝1条、土坑33基で、ピットは280基を越す数が検出されている。中でも、第3次調査において検出された縄文早期後葉の2棟の住居跡などによって、早期後葉期に青葉山E遺跡に営まれた集落の様相の一部が明らかとなっている。2棟の竪穴住居跡は、南東側の谷に向かって緩やかに傾斜する斜面に営まれ、1号住居跡は小型、2号住居跡は比較的大型のものであった。いずれも隅丸長方形と推測される。一部、破壊されている部分もあるが、炉は発見されなかった。これらの特徴は、周辺遺跡の同時期の住居跡とも一致する傾向であった。

また、第4次調査、第5次調査、第6次調査において、陥し穴と考えられる土坑が3基検出されている。しかし、いずれも遺物の出土がないため、3基が同時期のものかどうかは不明である。図42に示す通り、これら3基の陥し穴は、ほぼ同じ方向に並んでいることがわかる。しかし、これが意図的なものなのか、地形などの制約による偶然のものなのかはわからない。

第7次調査BJ－30区で検出された7号土坑では、埋土に多量の炭化物や焼土粒が含まれていた。埋土からは縄文中期中葉の土器が出土しており、土坑もこの時期のものと推測される。この土坑の周辺では、中期中葉の土器がややまとまって出土している。この地点では、中期中葉の時期に、火を用いたものも含んだ、何らかの活動が行われた可能性が推測できる。しかし、土器の量が多くないこと、中期中葉に伴う遺構がこれ以外にないことなどから、一時的なものであったと推測する。

ピットは多数検出されている。形状や埋土が住居跡の柱穴と類似するものもみられ、何らかの柱穴になるものも含まれていると考えられる。しかし、ピットの周辺に竪穴状の掘り込みや焼土などの炉の痕跡は確認されず、柱穴の組み合わせについては不明である。

【遺物について】

これまでの調査では、縄文早期中葉、早期後葉、早期末葉、中期中葉、中期末葉、晩期中葉、晩期後葉の土器、弥生土器、土師器など、複数の時期の遺物が出土している。特に第3次調査（AOE3）では、縄文時代早期後葉の土器が多量に出土しており、これを指標として「青葉山E式」土器を設定した（年報12）。図42は、縄文早期後葉土器の出土をグリッド別に示したものである。薄いドットで示したのは、1つのグリッドから早期後葉の土器が1点以上出土している場所である。濃いドットで示したのは、その中でも特に出土量が多かったグリッドである。土器の出土が集中しているのは、2棟の住居跡とその周辺にあたる場所である。この出土集中地点を含む第3次調査では2000点以上の早期後葉土器が出土している。この出土集中地点以外では、2層が削平されている箇所を除いて、青葉山E遺跡第2～7次調査区のほぼ全域で、早期後葉の土器が出土している。集中地点からやや離れた第5次調査区（AOE5）においても出土が確認される。このことから、早期後葉の時期では、住居跡周辺を中心としながら、青葉山E遺跡の全域におよぶ広い範囲を活動の領域としていたことが考えられる。

図43は、縄文早期後葉以外の土器の分布を示したものである。BI～BQ－21～31区には、縄文早期中葉の土器の主要なまとまりが認められる。ここからは約200点ほどの土器が出土している。それらは、宮城県内において断片的にしか確認されていなかった土器であり、早期中葉の貝殻文土器の様相の一部が明らかとなった。また、このまとまり以外にも、やや離れたグリッドで同様の土器がみられ、量は多くないものの比較的広い範囲に分布が拡散していることがわかる。この他、1点ではあるが早期末葉の土器も確認されている。

早期以外では、BI～BN－23～31区において中期中葉の土器のまとまりがみられる。また、中期末葉と思われる土器がBM－19区、AL－20区付近において確認できる。晩期の土器では、AT～BB－19～21区に小さな集中が

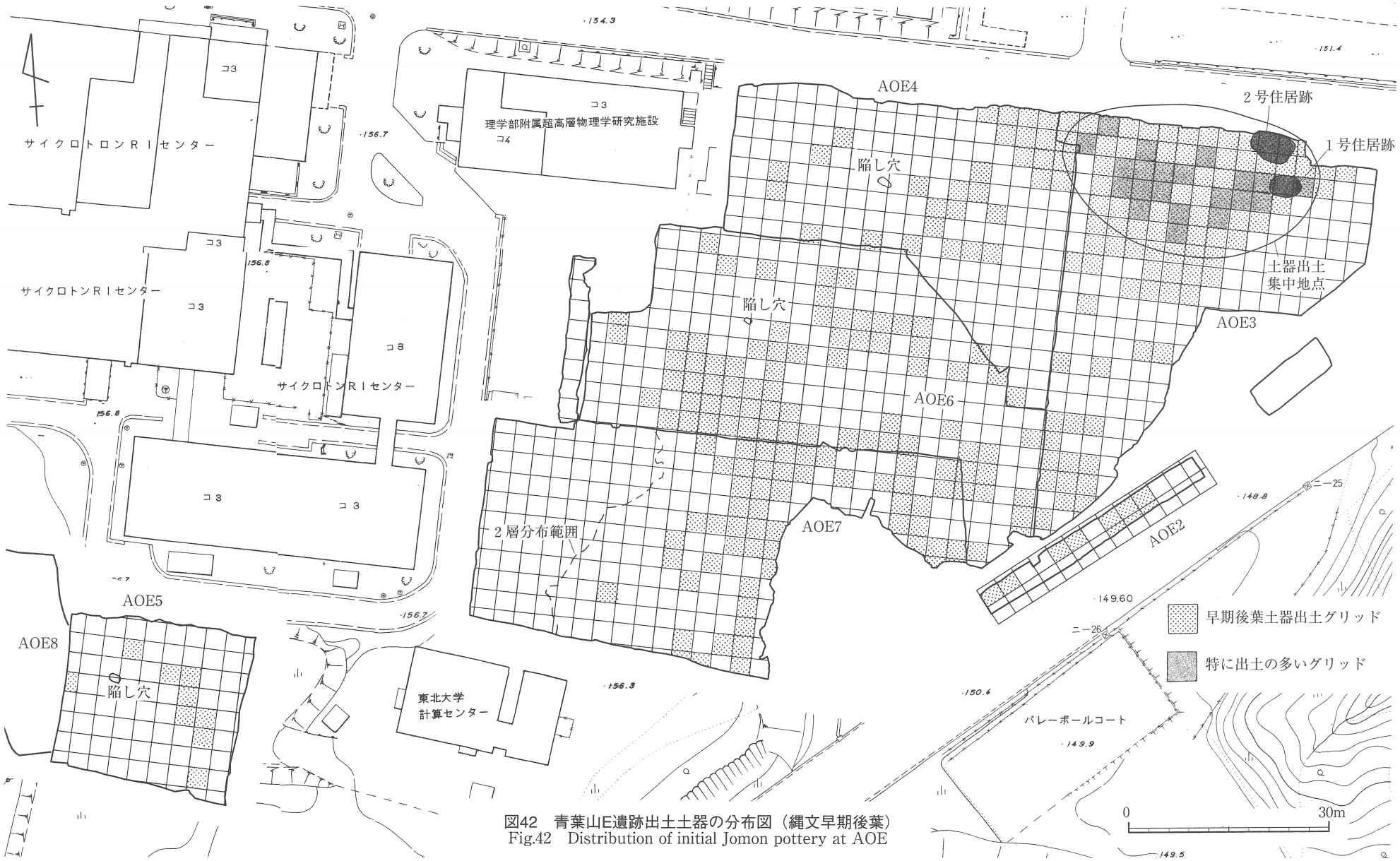


図42　青葉山E遺跡出土土器の分布図（縄文早期後葉）
Fig.42　Distribution of initial Jomon pottery at AOE

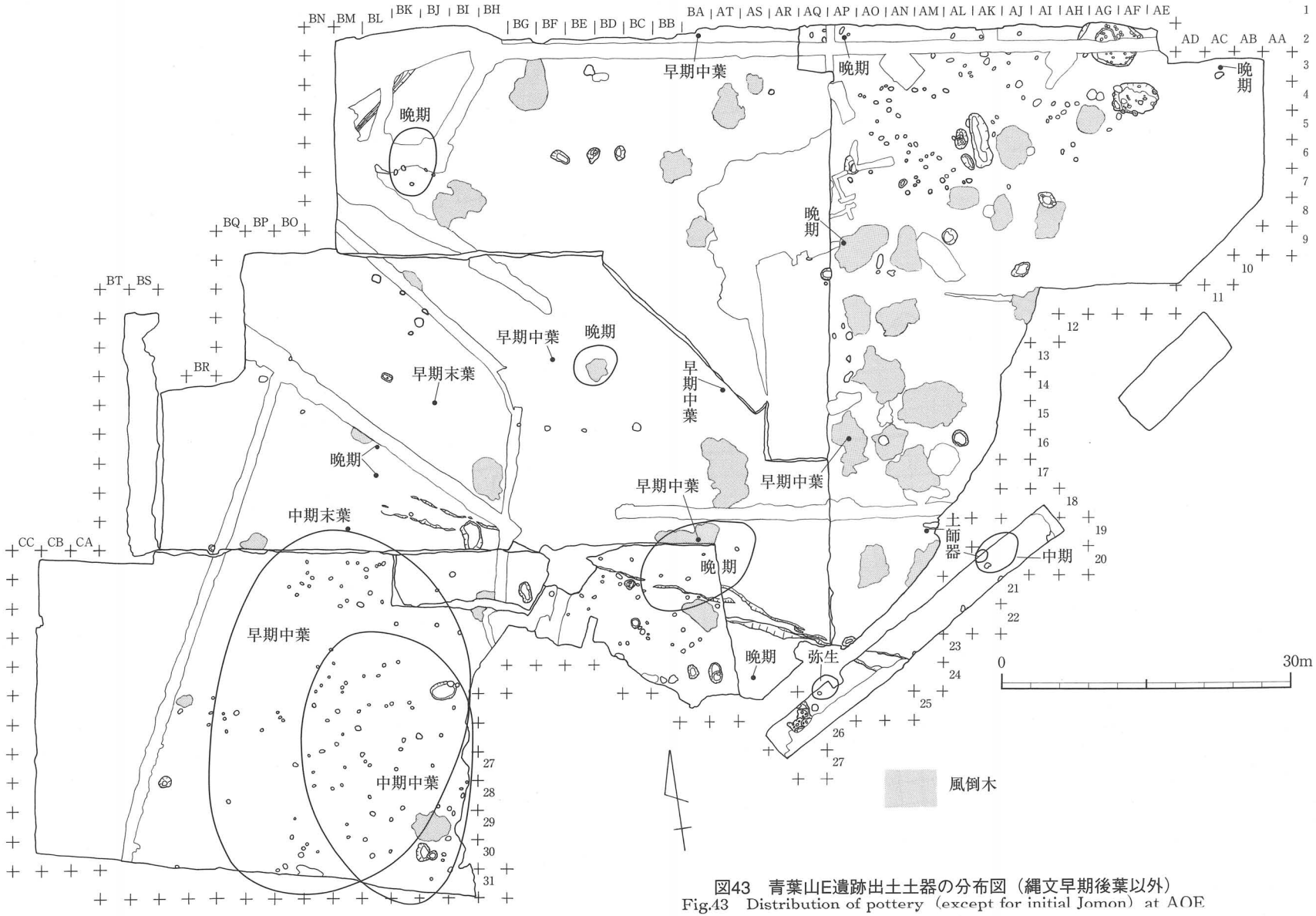


図43　青葉山E遺跡出土土器の分布図（縄文早期後葉以外）
Fig.43　Distribution of pottery (except for initial Jomon) at AOE

みられるほかに、調査区の各所で１点程度の出土があり、比較的広範囲に分散して出土している。縄文土器以外でも、AP－25区で弥生土器が、AK－20区、AM－19区で土師器がわずかに出土している。

このように、青葉山E遺跡では、量の多少はあるが、複数の時期におよぶ土器が出土している。縄文早期後葉、中期中葉以外の時期に伴う明確な遺構は検出されていない。しかし、青葉山E遺跡では、これらの時期の幾度かにわたって人間の活動がなされていた場所であったことが考えられる。

複数の時期の土器が出土する遺跡の状況から、出土石器も複数の時期のものが混在していると考えられる。ただし、層位や分布によって、それらを分離することが不可能な状況であった。しかし、住居に伴う石器では、次の２点のことが推測されている。１つは、２棟の住居跡から出土した石器で、石核と剥片・チップが偏った出土をすることから、これらの廃棄場がある程度決められていたであろうということである。また、２号住居跡のチップの出土状況から、２号住居跡内で石器製作が行われていた可能性が考えられることである。

以上のことをまとめると、次のようになる。

・縄文早期後葉の時期には、住居が存在し、集落が営まれていたことが確認された。住居跡やその周辺を中心に、早期後葉の土器が高い密度で出土している。住居跡内では石器製作が行われていた可能性も推測でき、２棟の住居跡周辺が生活域の中心であったことが考えられる。早期後葉の土器は、広範囲で出土することから、この時期の活動領域も遺跡全体に及ぶものであると推測できる。

・いつの時期のものかは不明であるが、陥し穴が３基確認されている。このことから、狩猟活動を行った様相の一端がうかがえる。

・縄文早期後葉の時期以外でも、複数の時期の土器が出土しており、時期によって分布にも変化がみられる。中期中葉には、火を用いた活動の痕跡がみられる。これらのことから断続的ではあるが、青葉山E遺跡は長きにわたって繰り返し使われていた活動の場であったことがうかがえる。

・縄文早期中葉の土器は、宮城県内において出土事例のあまりないものであった。これらの出土によって、不明確な部分が多かった早期中葉土器の様相の一部が明らかとなった。

第Ⅳ章　青葉山E遺跡第８次調査（AOE8）

１．調査経緯

(1) 調査地点の位置

調査地点は、東北大学川内キャンパスから宮城教育大学・青葉台方面へ向かう道路の北東側、東北大学理学研究科・工学研究科構内に位置する（図13）。調査地点の北側にはサイクロトロン・ラジオアイソトープセンターが、南側には工学研究科青葉山体育館、西側には工学研究科附属災害制御研究センターがそれぞれ位置しており、調査着手前には駐車場として使用されていた場所である。この場所は、西側の工学研究科附属災害制御研究センターが立地している面よりも一段高い面にあり、南西側は斜面になっている。

本調査地点の東側には、青葉山E遺跡第5次調査地点が隣接しており、縄文時代早期の土器・石器などが出土している（年報14）。また、北東側にやや離れた青葉山E遺跡第２～４・６・７次地点では、縄文時代早期後葉の住居跡や陥し穴をはじめとする遺構や、縄文時代から平安時代にいたる遺物が発見されている（年報11～13）。

(2) 調査に至る経緯

本調査地点は、青葉山E遺跡第５次調査地点の西に隣接している。この場所が駐車場として整備され、すでに遺跡が削平されてしまっているということが2000年度になって判明した。関係部局に問い合わせたところ、学内での連絡の行き違いのため、施設部や当センターへの連絡がないまま1999年度に駐車場造成工事が実施されてしまったことが判明した。本来であれば、遺跡の範囲内の工事であり、発掘の申請をし、発掘調査を行ってから工事が行われるべき地点であった。そのため、事後の策として、駐車場整備によって破壊されてしまった範囲を確認するため、発掘調査を行うこととした。また、今後、駐車場として使用した場合に残存している遺跡・遺物等を損傷する可能性がある場所については記録保存のための調査を行うこととした。

(3) 調査の方法と経過

本調査は2002年7月26日より開始した。調査地点は駐車場として整備され、砕石が敷かれた状態にあった。この地点の地形は南西に向かって緩やかに傾斜しており、南西側では削平を免れていることも予想された。そのため、削平された範囲を把握するために、重機により砕石を除去し、削平されたローム層面を検出することに努めた。しかし、砕石を除去しても、調査範囲の大部分の場所で精緻なローム層は検出されず、広範囲に撹乱を受けた土壌が広がることが判明した。そのため、調査範囲内の適所にトレンチを入れ、削平された範囲、規模、いつの時点で削平されたものなのかなどを確認することとした。また、その他の場所については、層序の確認を行い、駐車場整備による削平範囲を確認することとした。

２．調査結果（図44・45、図版21・22）

調査区上面の砕石を除去し、合計8箇所にトレンチを設けて削平された範囲を確認した。

砕石とごく浅い盛土を除去し、層序の確認を行った結果、砕石や盛土を除去した直下で、川崎スコリアを含む層が検出された。この標高を第５次調査時点での地表面と比較すると、現在の地表面は最大で約1.2～1.5m程度削平されていることが判明した。また、大規模に削平されている場所も存在することが判明した。その規模は、現地表面から浅い場所で50cm程度、深い場所では２m超の深さに達している。しかし、いつの時点で大規模な削平がなされたのかは、調査では明確にはできなかった。

調査の結果、駐車場整備工事によって、後期旧石器時代・縄文時代の遺物が出土する可能性のある層序の大部

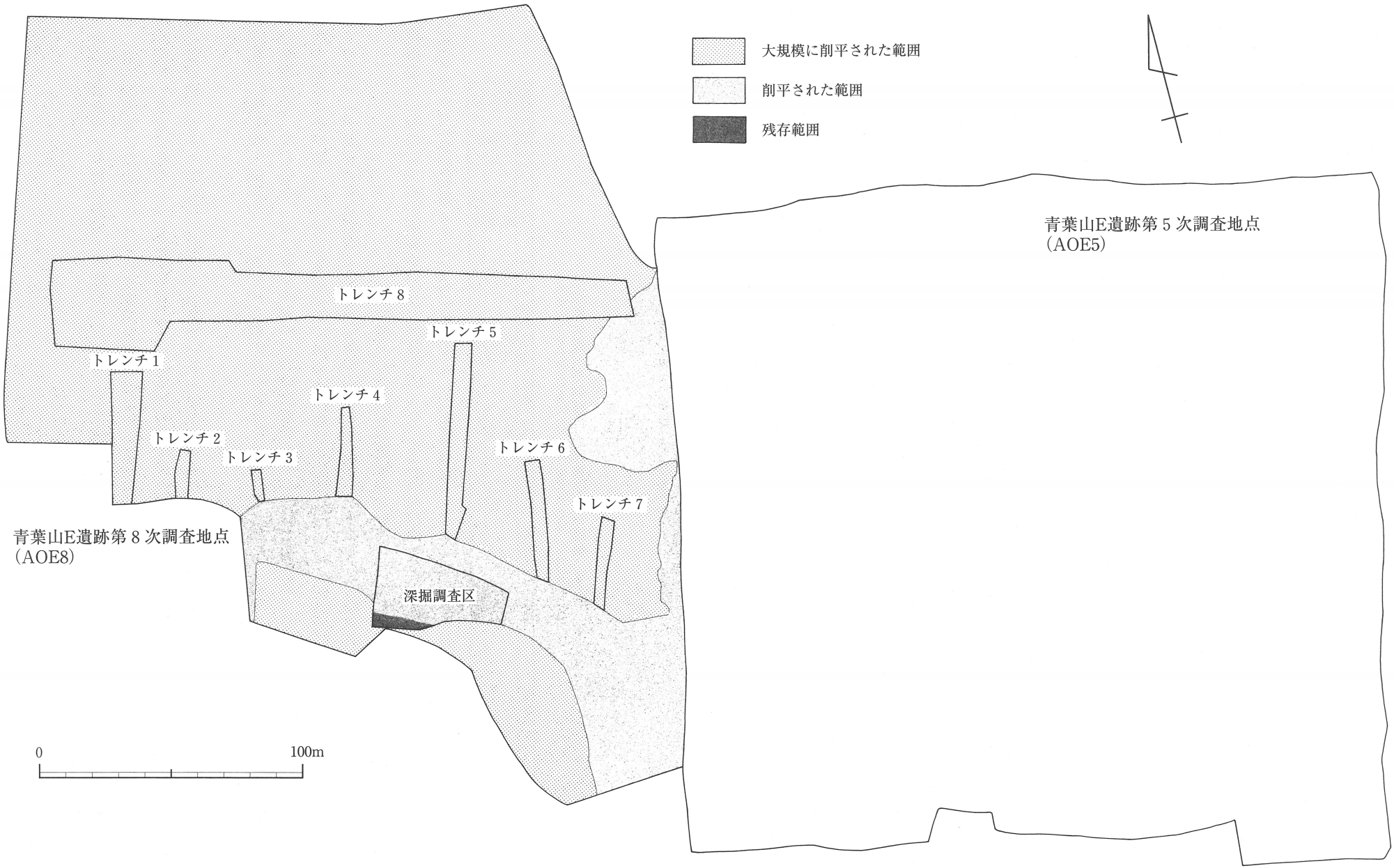


図44　青葉山E遺跡第8次調査区の位置
Fig.44　Location of AOE8

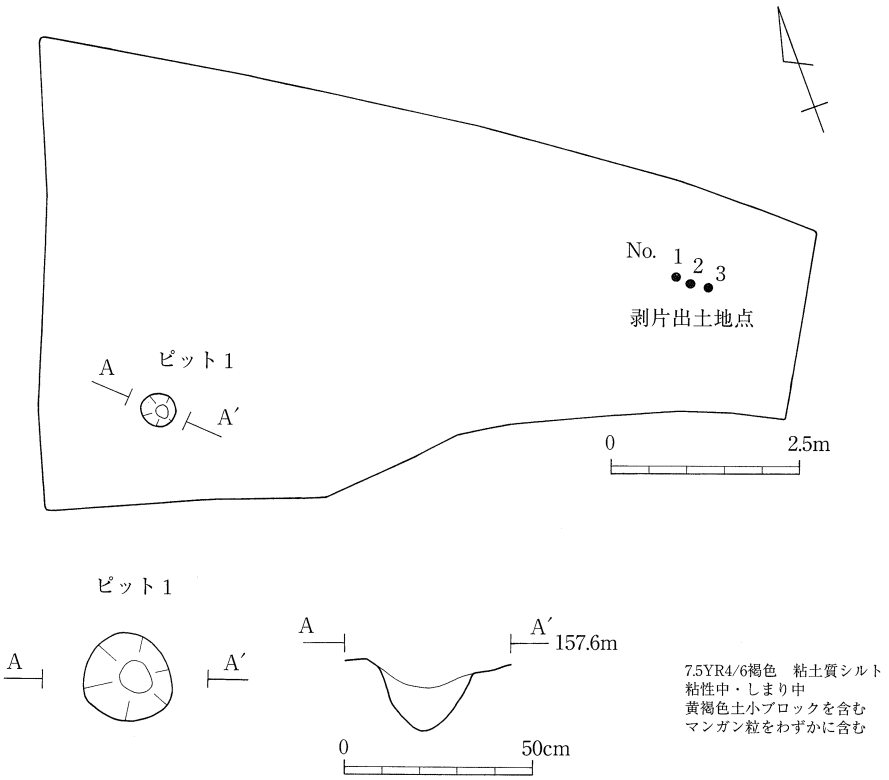


図45　青葉山E遺跡第8次調査深掘調査区平面図・断面図
Fig.45　Plan of archaeological features at AOE8

表11　青葉山E遺跡第8次調査出土剥片観察表
Tab.11　Attribute list of flakes from AOE8

No.	出土場所	器種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石材	図	図版
1	盛土中	剥片	101.0	30.3	12.2	33.0	凝灰岩	46	23
2	盛土中	剥片	85.9	26.9	11.7	22.5	凝灰岩	46	23
3	盛土中	剥片	69.9	37.5	15.4	37.6	凝灰岩	46	23

分はすでに削平されていることが明らかとなった。遺物が出土する可能性のあるローム層が残存している場所は、南西側斜面近くのごく小さな範囲のみであることがわかった。残存箇所がごく小規模であったことと、斜面際であり崩落する危険を考えて、残存箇所についても発掘調査を行うこととした。

また、残存していた浅い盛土を除去する最中に、盛土中から石器状の形態をした剥片が3点出土している（図45）。これらは、現場ですぐに石器であるとも違うとも判断しかねる石材や形状であった。盛土からの出土であり、原位置を保ってはいないため、層序から年代などを判断することもできなかった。そのため、出土位置などの十分な記録を行い取り上げた。また、周辺に他の石器が存在する可能性も考慮し、石器出土地点周辺と斜面際のローム層の残存範囲を深掘調査することとした。

その結果、径約25cm、深さ約20cm程度の非常に小さなピットが1基検出された。このピットは、斜面際の層序が安定していない場所にあり、出土遺物も特になかったことから、いつ頃の年代のものなのかは全く不明である。その他の場所でも、深いところでも約20cmほど掘り下げた段階で川崎スコリアを含む層序が確認され、他に遺物も出土しなかったことから、この場所で後期旧石器時代・縄文時代の遺構・遺物が残存する可能性は考えにくい状況であると判断した。

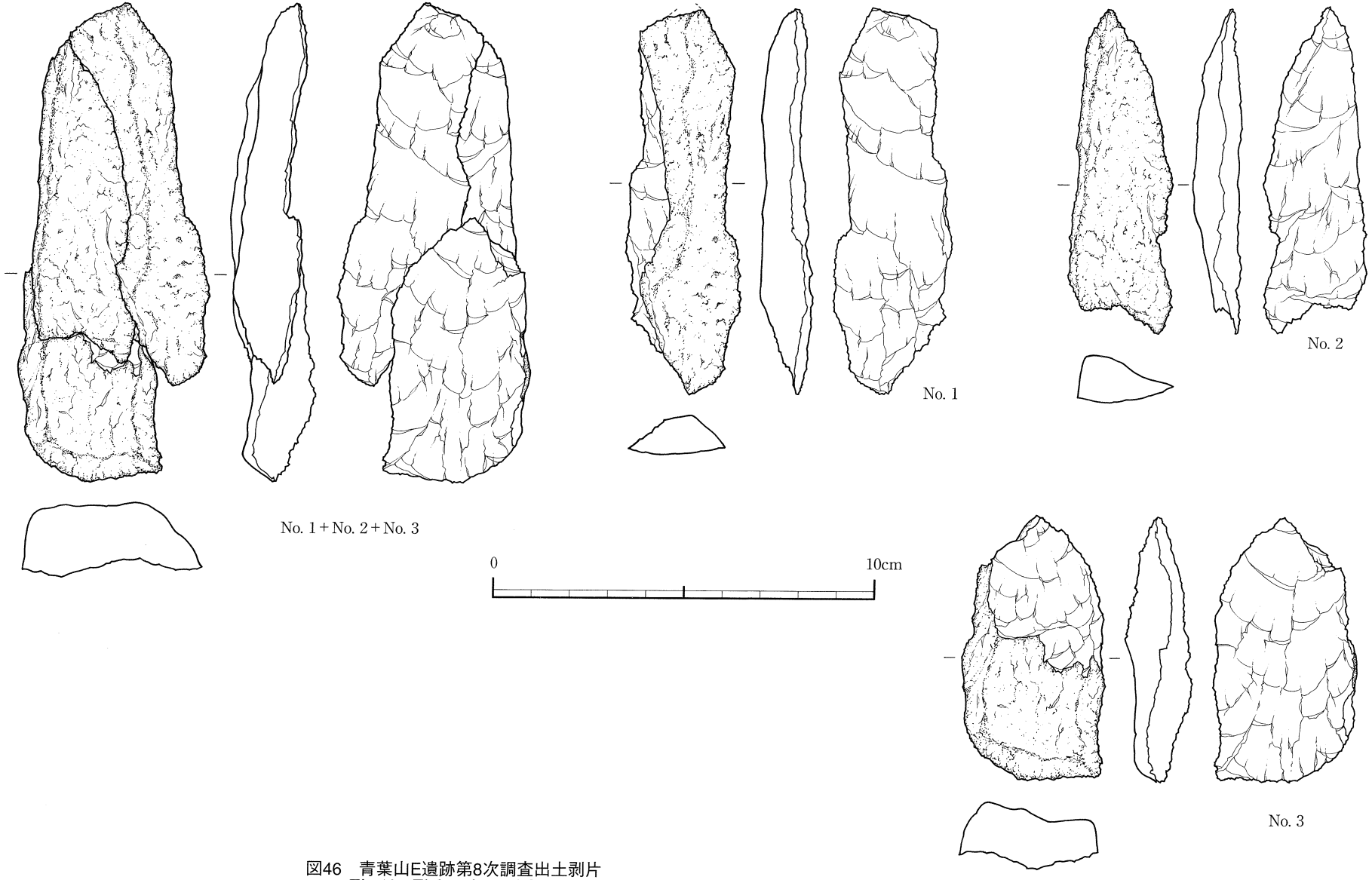


図46　青葉山E遺跡第8次調査出土剥片
Fig.46　Flakes from AOE8

3．出土遺物（図46、図版23、表11）

出土した遺物は、縄文土器１点、剥片３点である。縄文土器は撹乱土からの出土である。縄文時代早期後葉の青葉山E式のものと考えられる。青葉山E式土器は、本調査地点の北東側の第２次～第７次調査地点などで多数出土している。

剥片は、前述のように、いずれも盛土中からの出土であり、すでに原位置は失われた状態にあった。これらの剥片には自然面が残り、２次加工などは確認できない。３点はそれぞれ接合するが、剥離されたものなのか、自然に割れたものなのかも断定はできない。このため、石器である、ないと断定できる根拠に乏しい状態にある。

〈引用・参考文献〉

相原淳一　1985　「縄文条痕土器群の諸段階について」『赤い本―片倉信光氏追悼論文集』23～45頁
相原淳一他　1987　『東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ　中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他』宮城県文化財調査報告書第121集
阿刀田令造　1936　『仙台城下絵図の研究』斎藤報恩会博物館図書部研究報告４
阿部恵他　1978　『長者原貝塚』南方町文化財調査報告書第１集
石川恵美子　1990　「岩井堂洞窟における早期貝殻沈線文土器の系統と変遷」『秋田県立博物館研究報告』第15号　61～77頁
板垣直俊ほか　1981　「仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」『東北地理』第33巻第１号　48～53頁
伊東信雄　1978　『宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告』東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部研究報告第二
伊東信雄他　1969　『埋蔵文化財緊急発掘調査概報　長根貝塚』宮城県埋蔵文化財調査報告書第19集
井憲治他　1991　「前原A遺跡 前原B遺跡 桜立D遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告８』福島県文化財調査報告書第249集
江坂輝彌　1952　「日本原始文化の起源問題」『古代学』１－２
江坂輝彌　1956　「各地域の縄文式土器―東北」『日本考古学講座』３　91～122頁
大川清・鈴木公雄・工楽善通　1996　『日本土器事典』
大熊町史編纂委員会　1984　『大熊町史』第二巻
大月義徳　1987　「宮城県中南部の中期更新世示標テフラ」『東北地理』第33巻第４号　268～282頁
岡本勇　1982　『縄文土器大成１－早期・前期』
金子直行編　1992a　『田戸遺跡資料　山内清男考古資料４』奈良国立文化財研究所史料第34冊
金子直行編　1992b　『子母口貝塚資料　大口坂貝塚資料　山内清男考古資料５』奈良国立文化財研究所史料第35冊
金子直行　1994　「貝殻沈線文系土器群終末期の様相」『縄文時代』５　29～52頁
上條朝宏　1994　「胎土分析Ⅰ」『縄文文化の研究　５　縄文土器Ⅲ』47～67頁
北林八洲晴編　1976　『千歳遺跡（13）発掘調査報告書』
興野義一　1970　「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」『古代文化』22　239～242頁
工藤信一郎　1988　『谷津A・B遺跡　芦見遺跡―錦ケ丘ニュータウン関連遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第120集
熊谷幹男　1985　『長岫遺跡』泉市文化財調査報告書第4集
栗澤光男他　2000　『根下戸道下遺跡－大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第297集
今野徹他　1996「タタラ山遺跡（第２次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告書９』福島県文化財調査報告書第331集
小徳晶　1982　『天神山遺跡』宮城県文化財調査報告書第89集
後藤勝彦　1968　「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚（Ⅰ）」『仙台湾周辺の考古学的研究』1～20頁
坂本洋一他1991『中野平遺跡－第二みちのく有料道路建設に係る埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第134集
佐藤好一　1990　『赤生津遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第139集
佐藤好一　1995　『高柳遺跡』仙台市文化財調査報告書第190集
渋谷孝雄他　1989　『月ノ木B遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第135集
主浜光朗編　1987　『山田上ノ台遺跡』仙台市文化財調査報告書第100集
主浜光朗　1995　『上ノ原山遺跡』仙台市文化財調査報告書第198集
主浜光朗　1997　『相ノ原・大貝中・川添東遺跡』仙台市文化財調査報告書第217集
庄内昭男　1994　「貝殻文」『縄文文化の研究５　縄文土器Ⅲ』203～218頁
杉原荘介　1964　『夏島貝塚』
杉原荘介・芹沢長介　1957　『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学文学部研究報告第二冊
杉山武　1980　「白浜式・小舟渡平式土器にかかわる館平遺跡出土の早期貝殻文土器について」『奥南』創刊号　7～28頁
鈴木公雄・林謙作　1981　『縄文土器大成4　晩期』
須藤隆　1998　『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』
芹沢長介・林謙作　1965　「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』７　1～16頁
仙台市教育委員会　1994　『仙台市青葉区文化財分布地図』
仙台市教育委員会　1995　『仙台市太白区文化財分布地図』
仙台市史編さん委員会　1997　『仙台市史　特別編２考古資料』
田島一雄　1984　『根井沼（1）遺跡緊急発掘報告書』三沢市埋蔵文化財調査報告書第2集
田中敏他　1986　『富作遺跡発掘調査概報』福島県立博物館調査報告第13集
田中敏編　1999　『常世原田遺跡－吉田格氏昭和23年調査資料－』
田中則和　1981　『六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第34集
千田和文他　1986　『大館遺跡群　大新町遺跡・大館町遺跡―昭和60年度発掘調査概報』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報１』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1986　『東北大学埋蔵文化財調査年報２』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990　『東北大学埋蔵文化財調査年報３』

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1992　『東北大学埋蔵文化財調査年報４・５』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報６』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1994　『東北大学埋蔵文化財調査年報７』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997　『東北大学埋蔵文化財調査年報８』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報９』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報10』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999　『東北大学埋蔵文化財調査年報11』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999　『東北大学埋蔵文化財調査年報12』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000　『東北大学埋蔵文化財調査年報13』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001a　『東北大学埋蔵文化財調査年報14』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001b　『東北大学埋蔵文化財調査年報15』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001　『東北大学埋蔵文化財調査年報16』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2002　『東北大学埋蔵文化財調査年報17』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2005　『東北大学埋蔵文化財調査年報18』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2003　「17宮城県仙台市青葉山Ｂ　18宮城県仙台市青葉山Ｅ」『前・中期旧石器問題の検証』140～152頁　日本考古学協会
土岐市美濃陶磁歴史館　1993　『桃山の華　大阪出土の桃山陶磁』
土岐市美濃陶磁歴史館　1994　『続桃山の華　大阪出土の桃山陶磁』
戸沢充則編　1994　『縄文時代研究事典』
中村五郎　1983　「東北地方南部の縄文早期後半の土器編年試論」『福島考古』24　131～140頁
長尾正義他　1988a　『根井沼（1）遺跡緊急発掘調査報告書Ⅱ』三沢市埋蔵文化財調査報告書第4集
長尾正義他　1988b　『根井沼（1）遺跡緊急発掘調査報告書Ⅲ』三沢市埋蔵文化財調査報告書第5集
名久井文明　1974　「北日本縄文時代早期編年に関する一試考」『考古学雑誌』60－3　1～26頁
名久井文明　1979　「北日本縄文時代早期編年に関する一試考（Ⅱ）」『考古学雑誌』65－1　1～16頁
名久井文明　1994　「貝殻文尖底土器」『縄文文化の研究３　縄文土器Ⅰ』　85～95頁
成田誠治他　1980　『新納屋遺跡〈2〉』青森県埋蔵文化財調査報告書第62集
成田滋彦他　1989　『表館（1）遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第127集
西川博孝　1980　「三戸式土器の研究　千葉県舟塚原古墳封土出土土器を中心として」『古代探叢』1～49頁
芳賀英一他　1994　「六郎次遺跡　塩喰岩陰遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告書25』福島県文化財調査報告書第296集
畠山昇他　1980　『表館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第61集
林謙作　1990　「素山上層式の再検討」『考古学古代史論攷』105～162頁
福島県　『福島県史　第6巻資料編１』
藤沼邦彦　1997　『縄文の土偶　歴史発掘３』
馬目順一編　1982　『竹之内遺跡―縄文時代早期の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第8冊
宮城県教育委員会　1998　『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集
三宅徹也他　1979　『蛍沢遺跡―青森市新団地造成計画に基づく戸山団地予定地内蛍沢遺跡緊急発掘調査報告書』
三宅徹也他　1976　『小田野沢　下田代納屋B遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第1集
山下孫継他　1970　『岩井堂岩陰遺跡第4洞穴発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第21集
山下孫継他　1971　『岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第16集
山下孫継　1979　『岩井堂洞窟第4洞穴第８次発掘調査報告書』
山内清男　1929a「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』1－2　1～30頁
山内清男　1929b「繊維土器について追加一」『史前学雑誌』1－3　55～86頁
山内清男　1930a「繊維土器について追加第二」『史前学雑誌』2－1　73～75頁
山内清男　1930b「繊維土器について追加第三」『史前学雑誌』2－3　45～50頁
結城慎一　1989　『上野遺跡』仙台市文化財調査報告書第127集
四井謙吉他　1982　『二戸市長瀬B遺跡　二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第36集
吉岡恭平　1999　「第二章第二節土器文化の展開」『仙台市史通史編１原始』138～175頁
吉田格　1963「福島県麻耶郡常世遺跡概報」『武蔵野』43－1　28～36頁
領塚正浩　1996　「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年（下）」『史館』第28号　53～75頁
領塚正浩　1987　「田戸下層式土器細分への覚書」『土曜考古』第12号　21～52頁
領塚正浩　2005　「東北・北海道における早期中葉の土器編年」『早期中葉の再検討　第18回縄文セミナー資料集』

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY

Vol.20 March 2006

The Archaeological Research Center
on the Campus, Tohoku University
Katahiracho, Aoba ward, Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

Introduction

On the campus of Tohoku University, a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of *samurai* residences. Aobayama campus includes remarkable Initial Jomon sites.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. According to legal procedures, the commission for research, which was organized in 1983, carried out many salvage excavations for 11 years. It was reorganized into the Center in 1994, to improve conditions of research. The Center mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on the campus, analyzes these records and remains and publishes excavation reports. Conservation and exhibition of archaeological heritage, studies about structure of sites, artifacts, techniques of excavation and preservation are also important duties.

This volume carries the report of salvage excavation of BK8 on Kawauchi campus, AOE7 and AOE8 on Aobayama campus, which were carried out by The Archaeological Research Center on the Campus, Tohoku University in 2002.

BK8 site (Loc. 8 of *samurai* residences located at the side of north outer moat of *Ninomaru*)

This area is at the front side of welfare facilities on north Kawauchi campus. In this area, to build a new roof facility had been planned. Normally, it should be constructed after excavation. But without contact to The Archaeological Research Center, the construction had been already done. Most part of the construction area had been destroyed. We excavated the remaining area and recorded the remaining archaeological features. A ditch, earthen pits and pit features were found, and a few ceramics, metal implements were excavated. Because this area is small, the whole aspect of this site was not clear, but a inferences are drawn. An Oribe ware dated to the 1620s was found from No.1 ditch, so it was probable that the ditch was dated to the early stage of Edo period. Because of this, it is known that they started to construct some *samurai* residences since the early stage of Edo period. This point is very important to consider construction processes of the residence area around the Sendai castle.

AOE7 site (the 7th excavation of Aobayama site Loc. E)

The area close to AOE6 was excavated prior to construction of a research building of the graduate school

of science on Aobayama campus. Because the excavation had to be performed side by side with building construction, it was not possible to excavate the whole area at a time. So the area was divided into 9 sections with the construction progress, and these were excavated in turn.

In these areas, 10 earthen pits, a lot of pits and artifacts were found. But artifacts were not found in most pits, so we cannot determine which period these features belong to. Burned soil and burned pebbles were found from No.7 earthen pit. A lot of artifacts of the Initial, Middle and Final Jomon period were found. It is remarkable that the pottery dated to the middle stage of the Initial Jomon was found. This type of pottery was hardly found nearby sites. The vessel shape of pottery is of pointed bottom. Pottery is decorated with sell-edge impression and had scratch incised lines made by shell-edge. These do not include plant fibers in clay body. The features are similar to "Shirahama type" Jomon pottery in North Tohoku region.

In addition, the late stage of the Initial Jomon pottery named "Aobayama E type" was found, which was also found from past excavations. Besides, the middle stage of the middle Jomon and the late stage of the Final Jomon pottery types were found, which were found in small quantity from past excavations.

A lot of Stone implements were also found. But we cannot determine which period these belong to. When the stone implements were produced, some of them received heat treatment. And there are some stone implements which were retouched on some broken parts. It is likely that it was difficult to get enough raw materials, so the retouched stone implements were reused.

The AOE site was excavated for 7 times. The results are summarized as follows. Two pit dwellings which belong to the late stage of the Initial Jomon were found. Around this area, a lot of pottery pieces were found. This area is the central part of pottery distribution. And the same kind of pottery was found in all areas of past excavations. Therefore, it is probable that the pit dwellings were the center of settlement and all areas of this site was active territory for the Initial Jomon people.

Besides, pottery types of several periods were found. Based on this fact, it is inferred that this area was active territory, intermittently in these periods.

AOE8 (the 8th excavation of Aobayama site Loc. E)

AOE8 is next to AOE5. In this place, parking lot construction was performed in 1999. Normally, it should be constructed after excavation. But without contact to The Archaeological Research Center, it had been already constructed, and this site had been destroyed. In order to mitigate the situations, we excavated to confirm the remaining area and recorded the archaeological features. If there was a place where any archaeological features remain, it had to be excavated when necessary.

As a result of the confirmation, the place where archaeological features had been destroyed turned out to extend to the whole area. In addition, it became clear that, even before the parking lot construction, this area had been already destroyed on a large scale. From the cover layer soil of the constructed parking lot, 3 pieces of flakes were found. Unfortunately, the original position of these flakes was indeterminate. Though these were refitted, it was not clear whether it was flaked artificially by people or crashed accidentally. Therefore it is not concluded that they are actually stone implements.

It was only a small portion of the site near the slope facing southwest that loam layers remain. There was some possibility that some archaeological implements remain in. It was concerned that this slope would be damaged, so this place was excavated too. There were no archaeological remains except for a pit, but its date was not clear.

写　真　図　版

図版１～２：仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（BK８）
図版３～20：青葉山E遺跡第７次調査（AOE７）
図版21～23：青葉山E遺跡第８次調査（AOE８）

1．調査区全景（南東から）

2．精査実施範囲全景（東から）

3．東壁南半部セクション（西から）

4．南壁西半部セクション（北から）

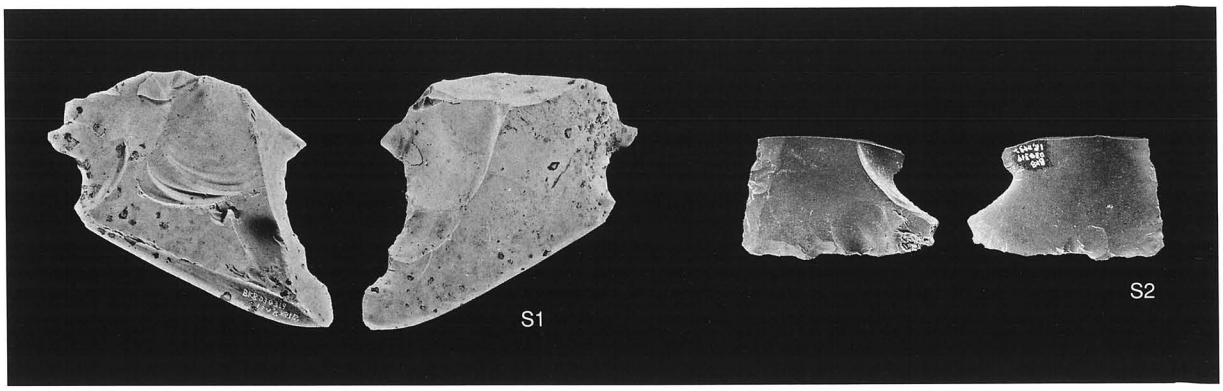
5．西壁南半部セクション（東から）

6．1号溝セクション（東から）

7．2号土坑セクション（南から）

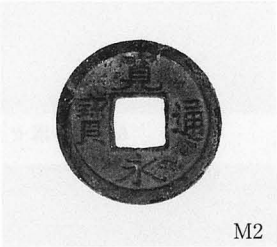
8．3号土坑（南から）

図版1　武家屋敷地区第8地点全景・検出遺構・セクション
Pl.1 Views, features and cross sections of BK8

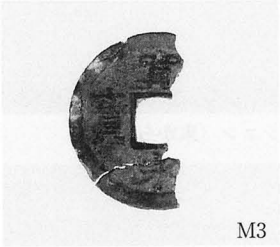


C1　　C2

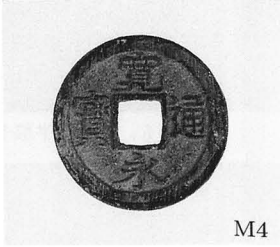
M1



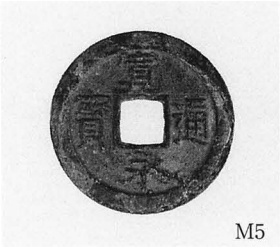
M2



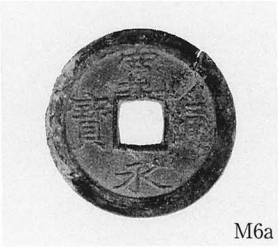
M3



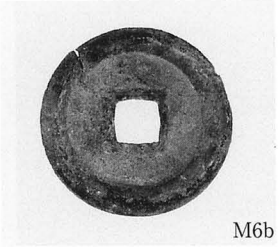
M4



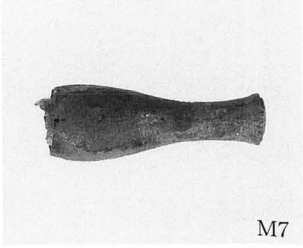
M5



M6a



M6b

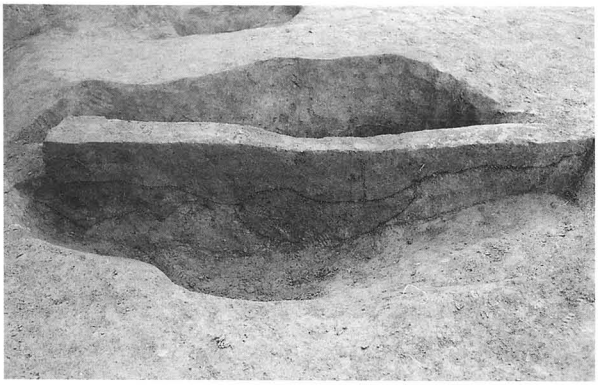


M7

S1・2　S＝2：3　　C1・2　S＝1：3　　M1～7　S＝1：1

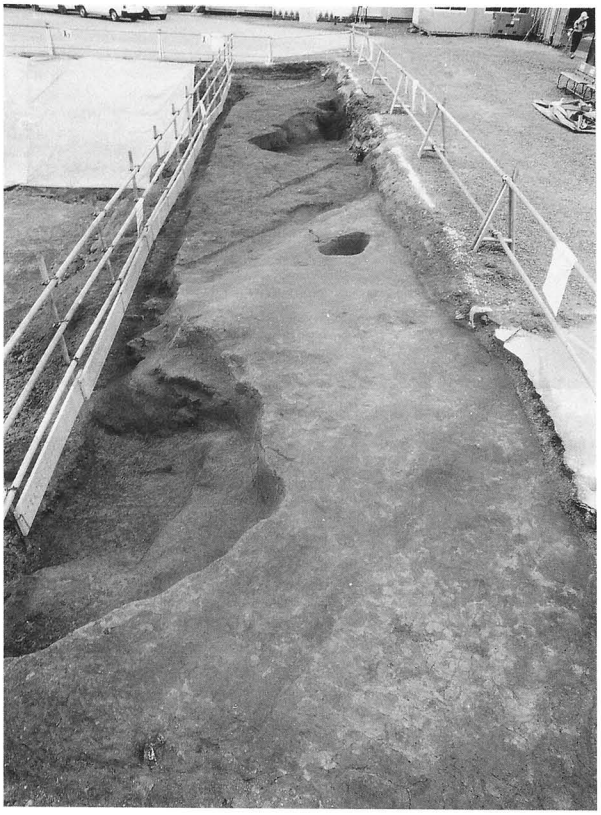
図版２　武家屋敷地区第８地点出土遺物
Pl.2 Various implements from BK8

1．Ⅰa区全景（西から）



3．2号土坑セクション（北から）

4．2号土坑完掘状況（北から）



2．Ⅰb区全景（北から）

5．Ⅱa区遺物出土状況（西から）

6．Ⅱa区全景（北から）

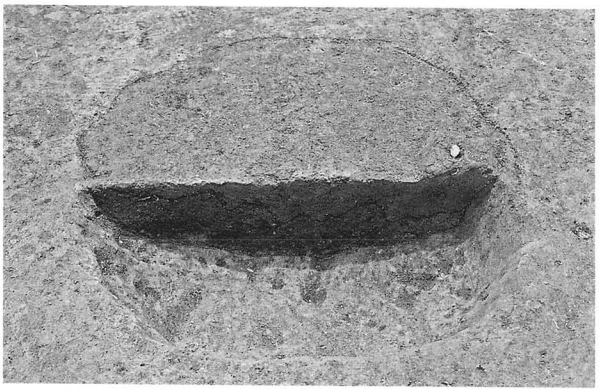
図版3　青葉山E遺跡第7次調査調査状況（1）
Pl.3　Views of location Ia, Ib, Ⅱa and features of location Ⅱa at AOE7

1．BB-23区西側ベルトセクション（東から）

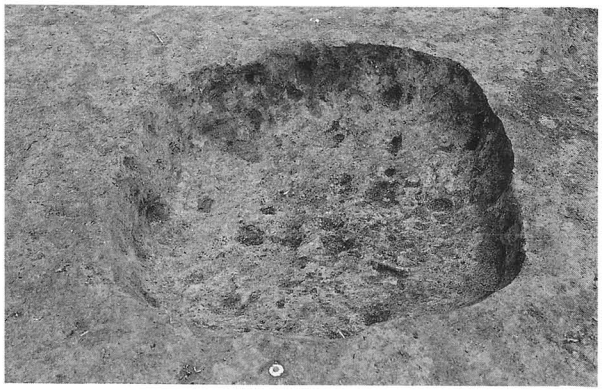
2．BB-22区西側ベルトセクション（東から）

3．BB-21区西側ベルトセクション（東から）

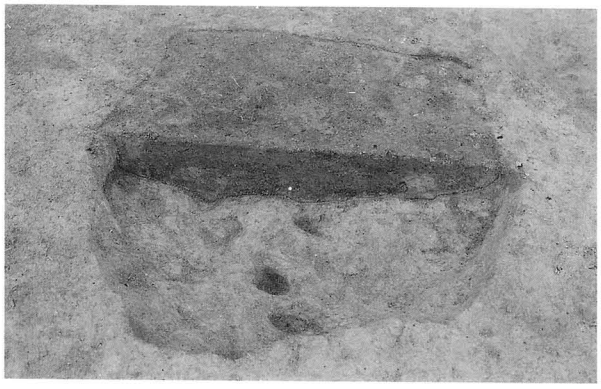
4．BB-20区西側ベルトセクション（東から）



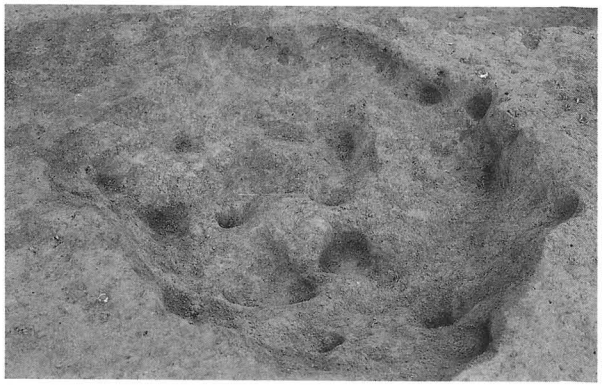
5．３号土坑セクション（北から）



6．３号土坑完掘状況（西から）

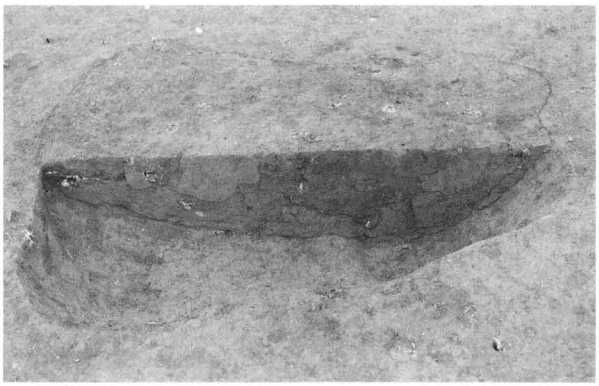


7．４号土坑セクション（南から）



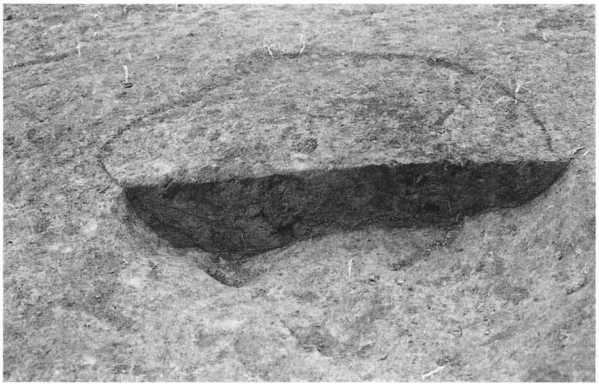
8．４号土坑完掘状況（南から）

図版４　青葉山Ｅ遺跡第７次調査調査状況（2）
Pl.4　Cross section and features of location Ⅱa at AOE7

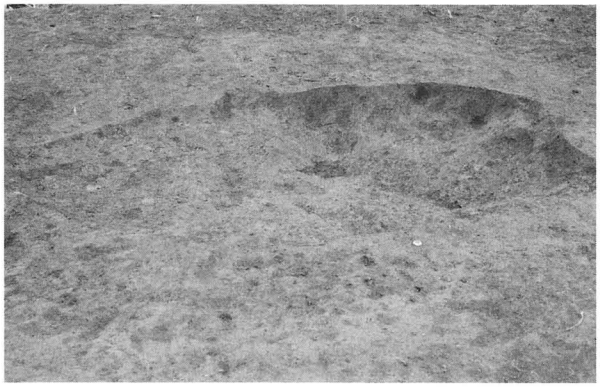


1．5号土坑セクション（東から）

2．5号土坑完掘状況（北東から）

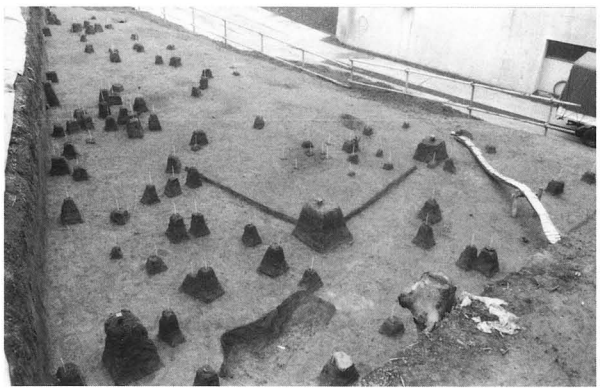


3．6号土坑セクション（北から）

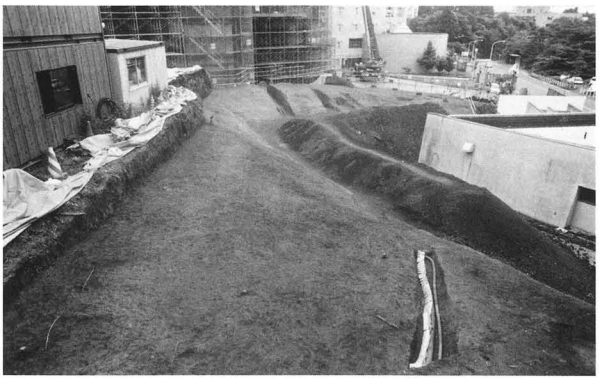


4．6号土坑完掘状況（西から）

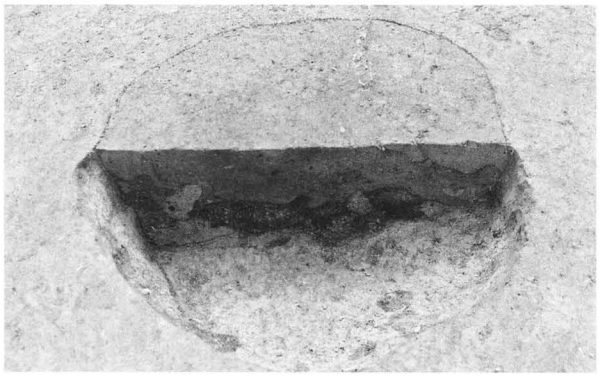
5．BB-20・21区深掘区セクション（東から）



6．Ⅱb区遺物出土状況（南東から）

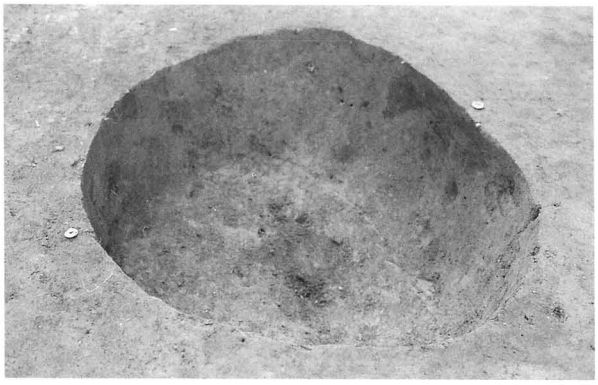


7．Ⅱb区全景（南から）



8．7号土坑セクション（北東から）

図版5　青葉山E遺跡第7次調査調査状況（3）
Pl.5　Features and landslide of location Ⅱa , view of location Ⅱb at AOE7



1．7号土坑完掘状況（東から）

2．Ⅲ区遺物出土状況（東から）

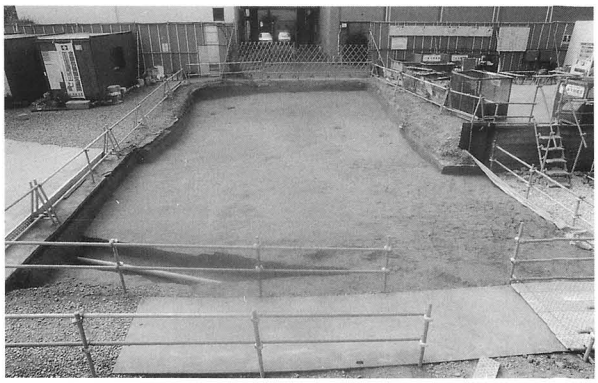
3．Ⅲ区全景（北から）

4．8号土坑セクション（北から）

5．8号土坑完掘状況（北から）

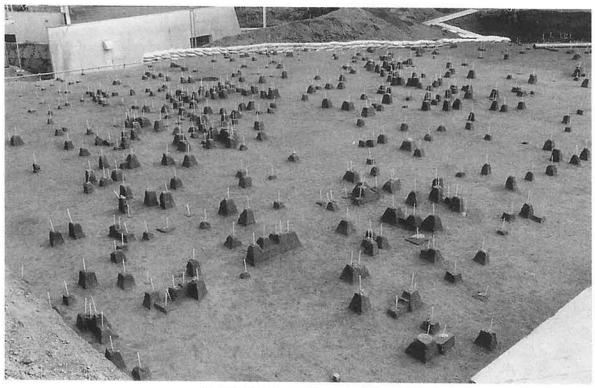
6．9号土坑セクション（西から）

7．9号土坑完掘状況（西から）

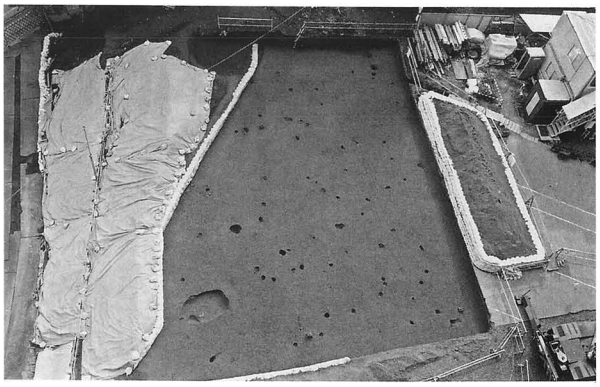


8．Ⅳ区全景（東から）

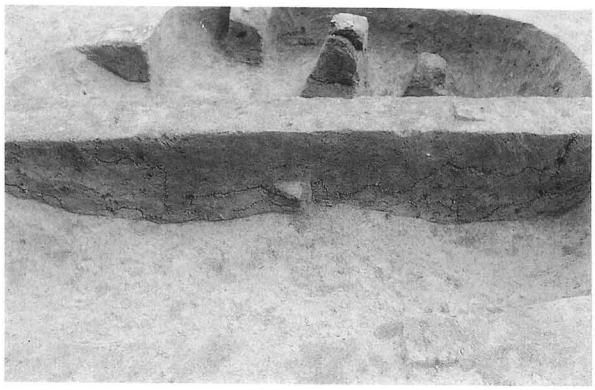
図版6　青葉山E遺跡第7次調査調査状況（4）
Pl.6　Features of location Ⅱb and Ⅲ, views of location Ⅲ and Ⅳ at AOE7



1．Ⅴ区遺物出土状況（北西から）



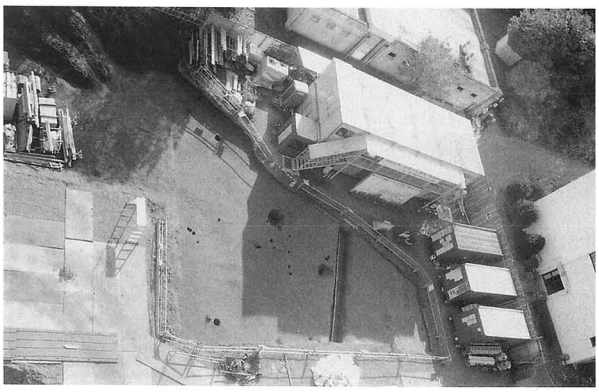
2．Ⅴ区全景（北から）



3．10号土坑セクション（北から）

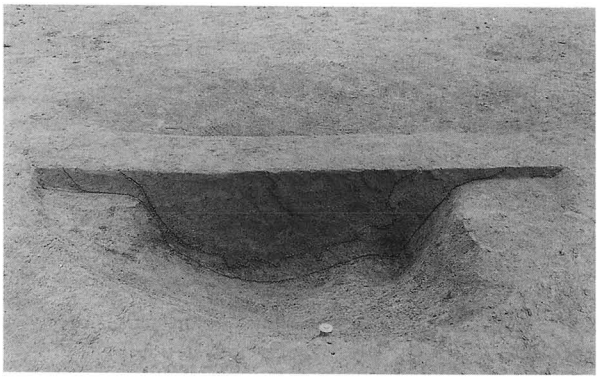
4．10号土坑完掘状況（北から）

5．Ⅵ区遺物出土状況（北西から）



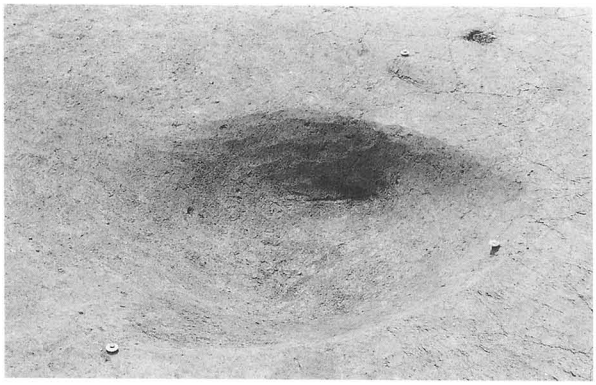
6．Ⅵ区全景（北東から）

7．Ⅶ区全景（西から）



8．11号土坑セクション（西から）

図版７　青葉山Ｅ遺跡第７次調査調査状況（5）
Pl.7　Views of location Ⅴ,Ⅵ,Ⅶ,　features of location Ⅴ,Ⅵ,Ⅶ at AOE7

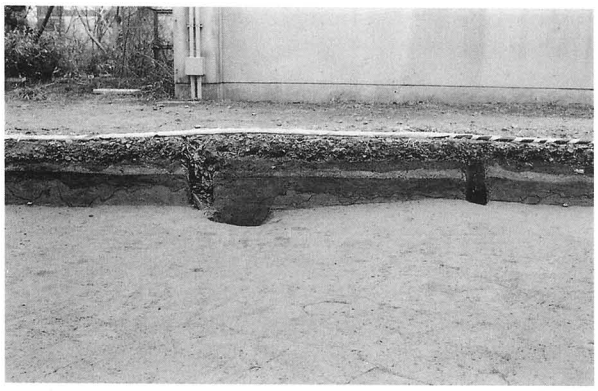


1．11号土坑完掘状況（北から）

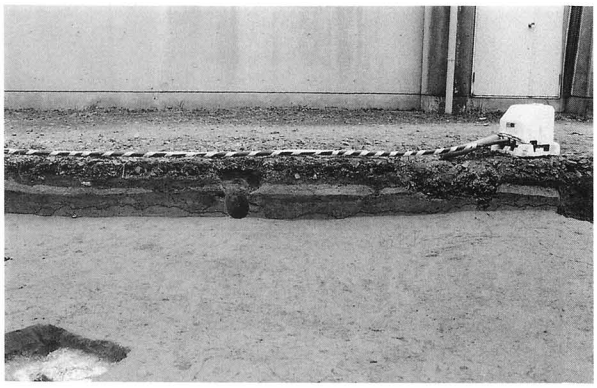
2．BO・BP-30区南壁セクション（北から）

3．BP・BQ-30区南壁セクション（北から）

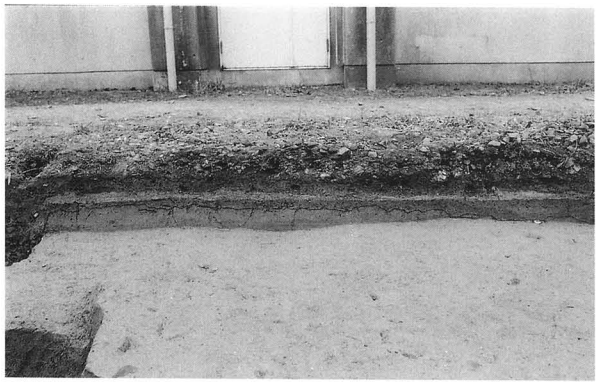
4．BR-30区深掘区セクション（北から）



5．BS-30区南壁セクション（北から）



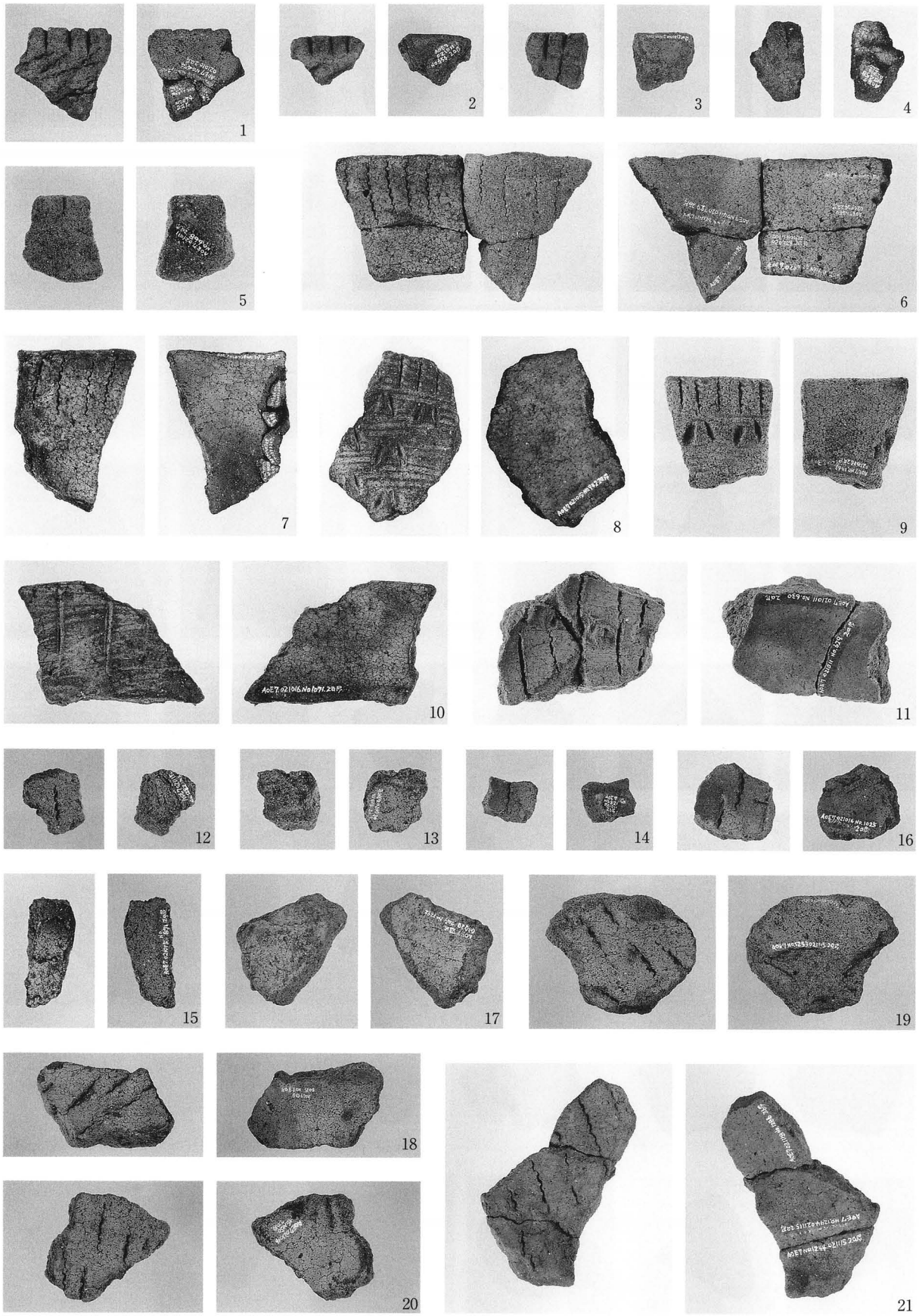
6．BT-30区南壁セクション（北から）



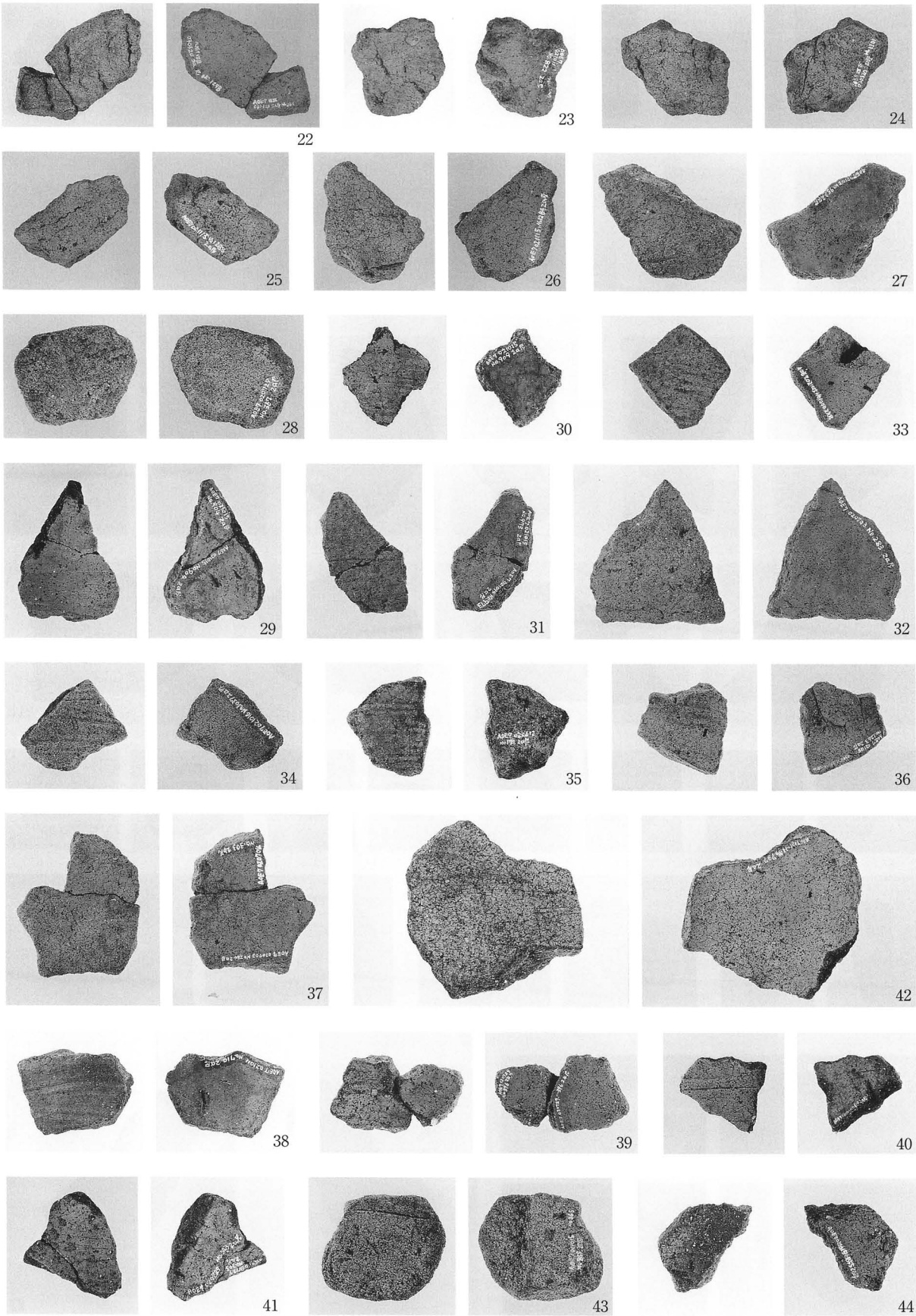
7．CA-30区南壁セクション（北から）

8．CB-30区南壁セクション（北から）

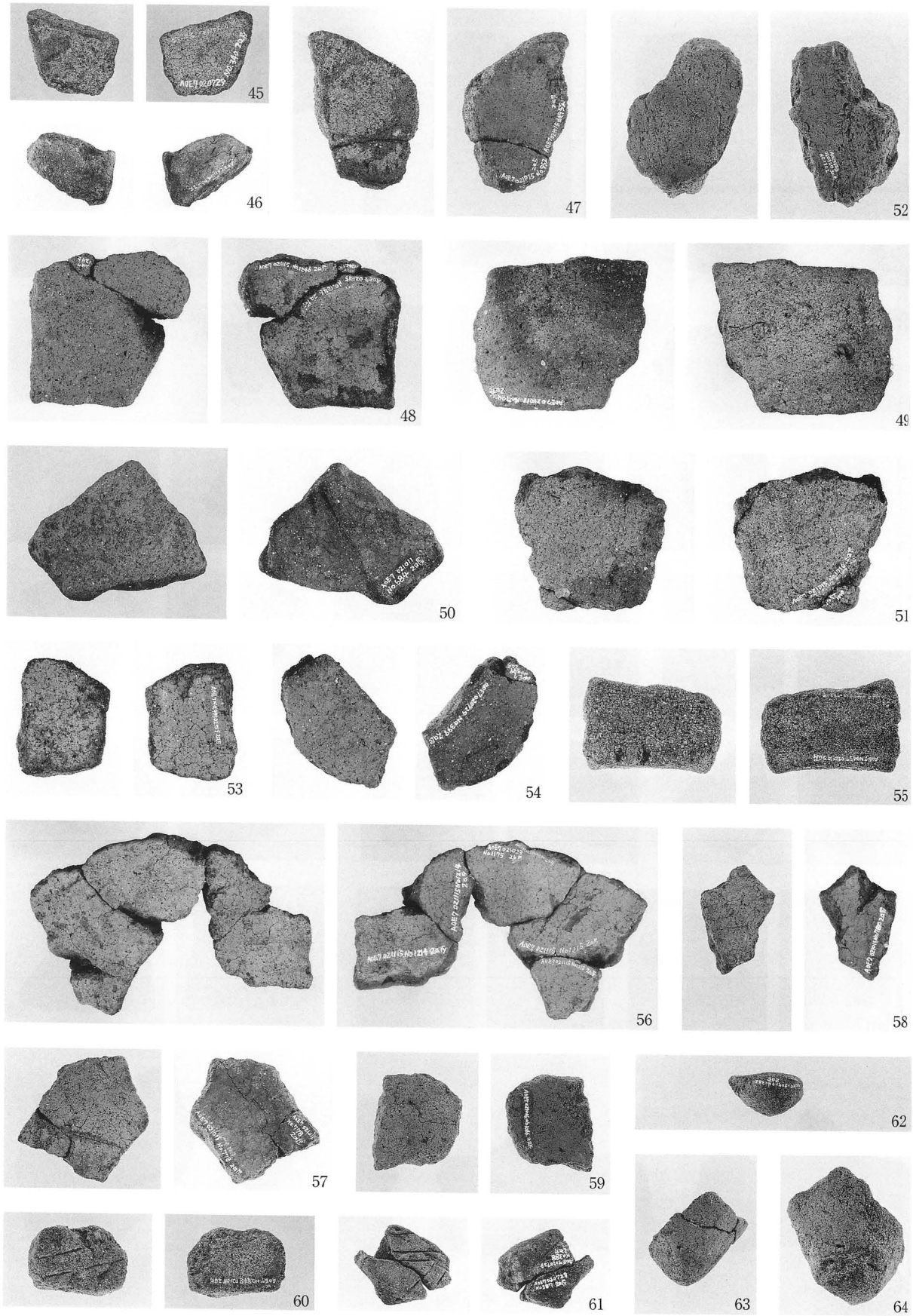
図版８　青葉山Ｅ遺跡第７次調査調査状況（6）
Pl.8　Feature and cross section of location Ⅵ and Ⅶ at AOE7



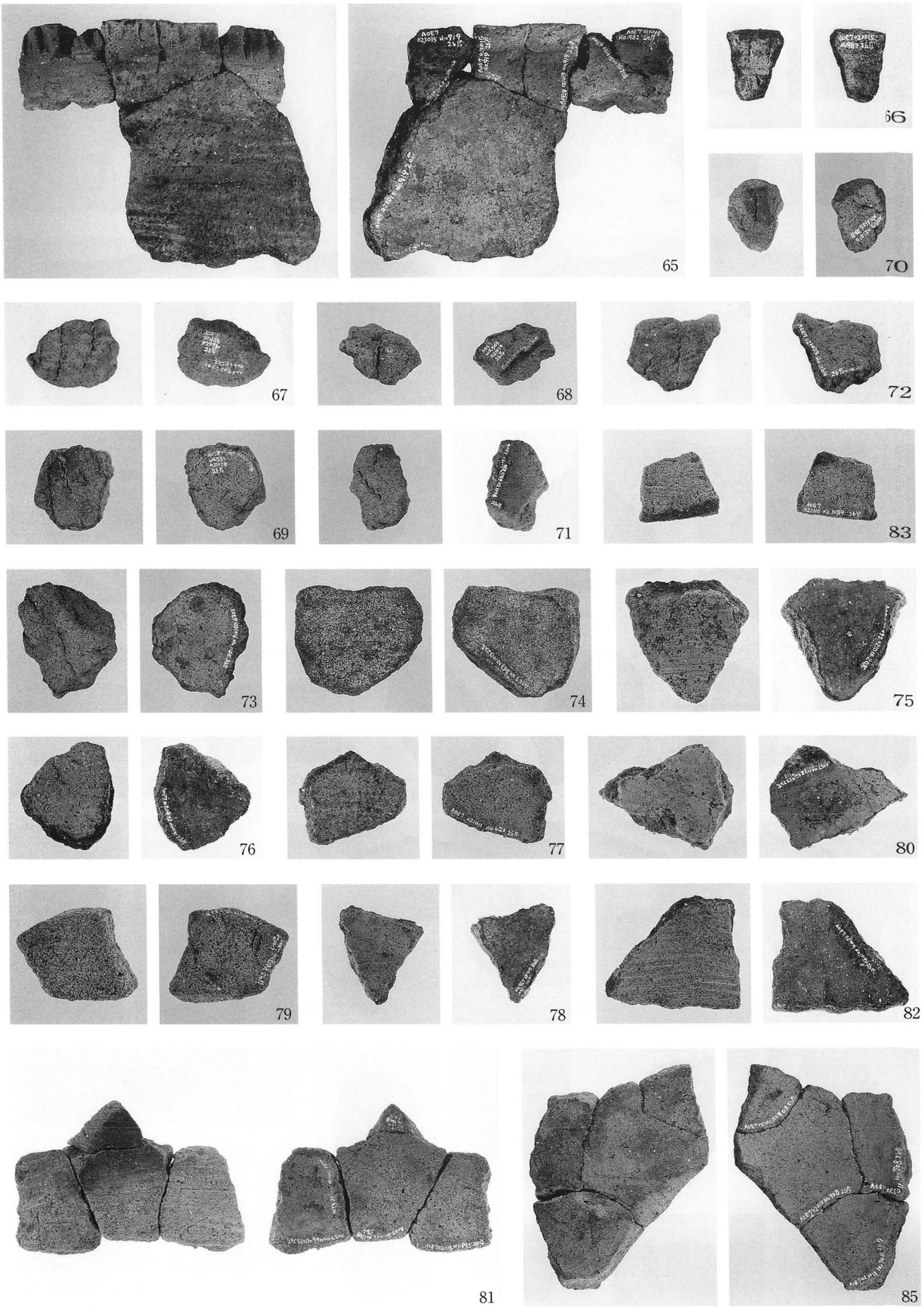
図版 9　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（1）　　2a層　S＝1：2
Pl.9　Pottery from AOE7（1）



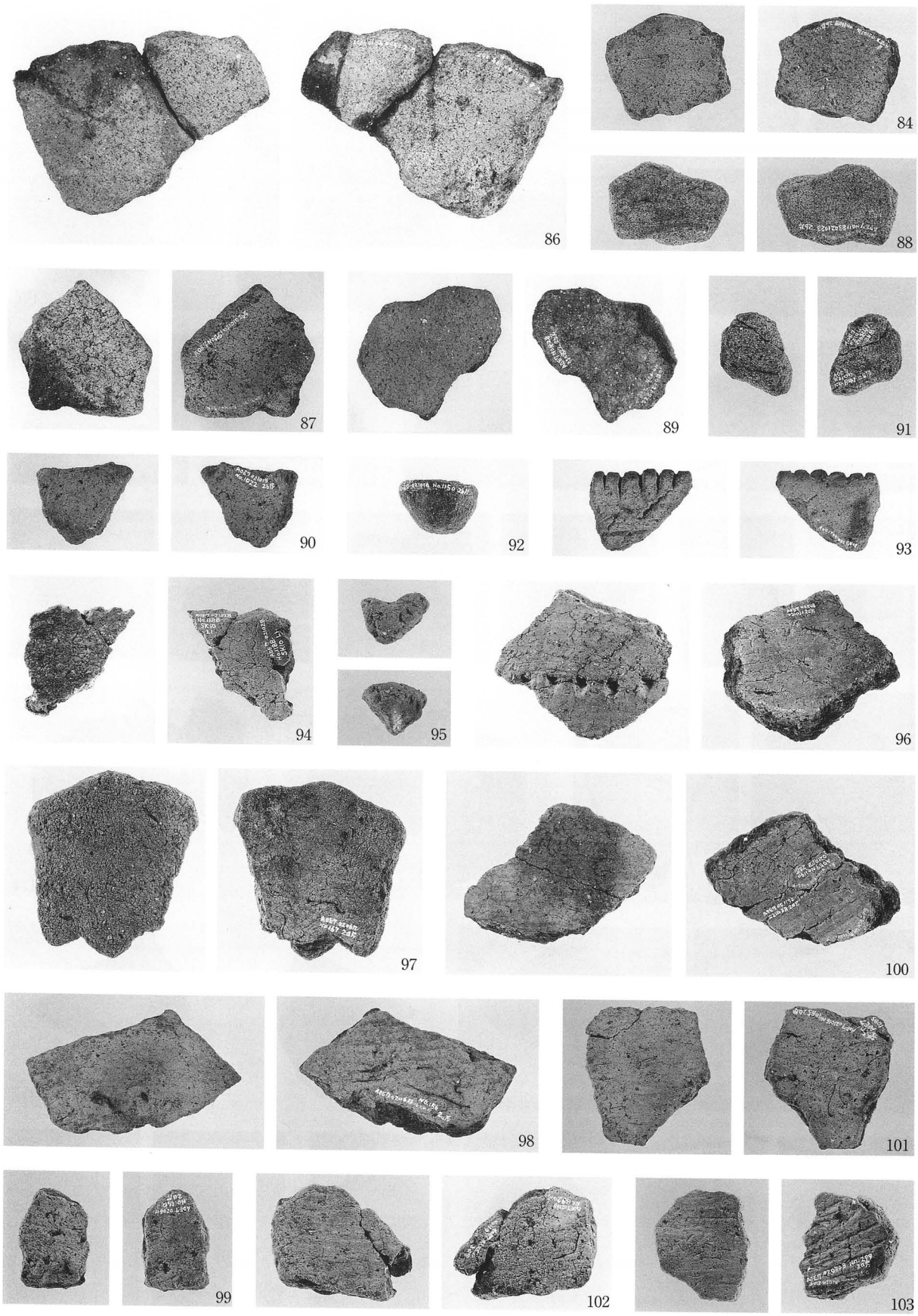
図版10　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（2）　　2a層　S＝1：2
Pl.10　Pottery from AOE7（2）



図版11　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（3）　　2a層　S＝1：2
Pl.11　Pottery from AOE7（3）

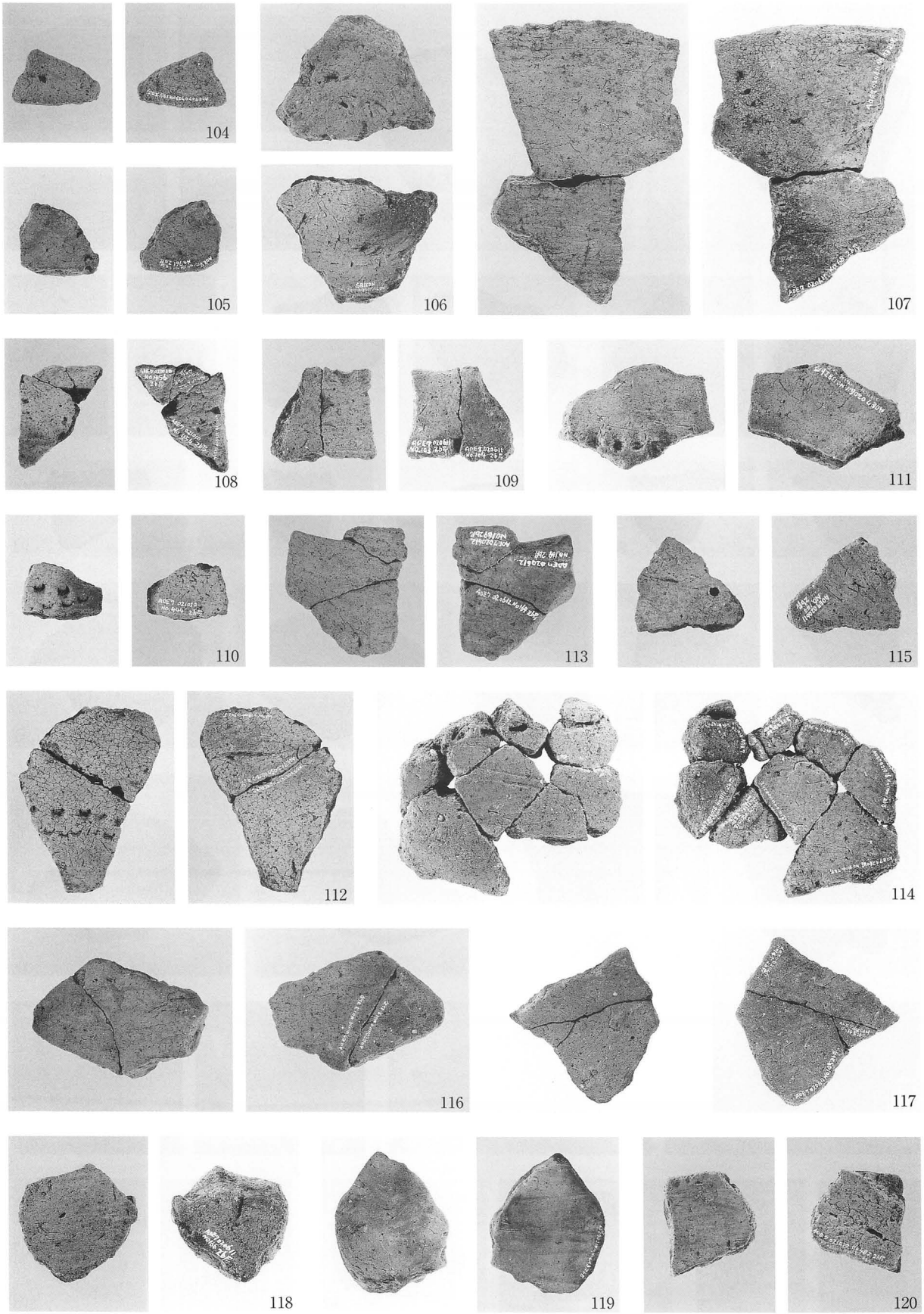


図版12　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（4）　　2b層　S＝1：2
Pl.12　Pottery from AOE7（4）

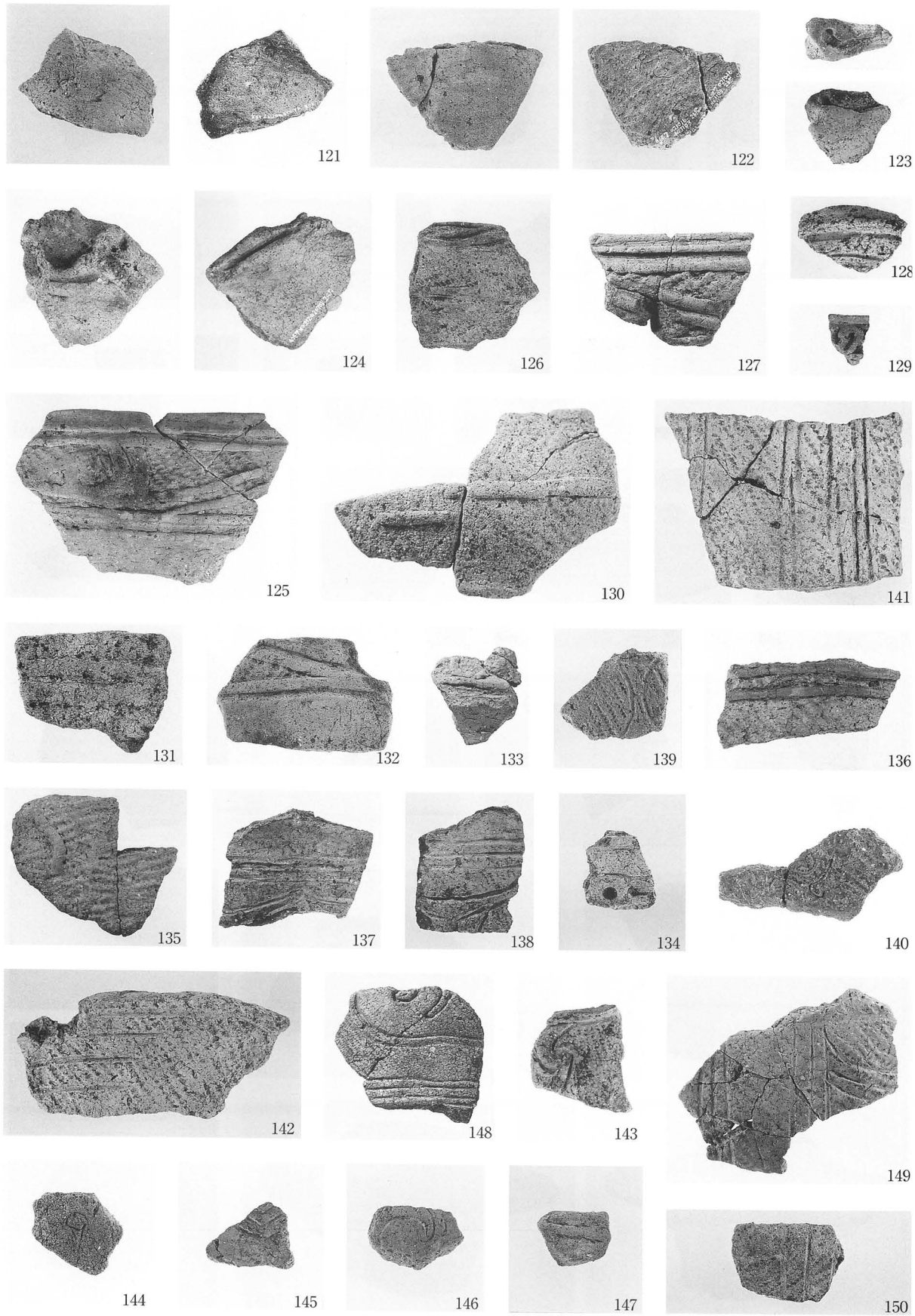


図版13　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（5）
Pl.13　Pottery from AOE7（5）

S＝1：2
84・86～92　2b層
93　層不明　94　10号土坑
95～103　2a層

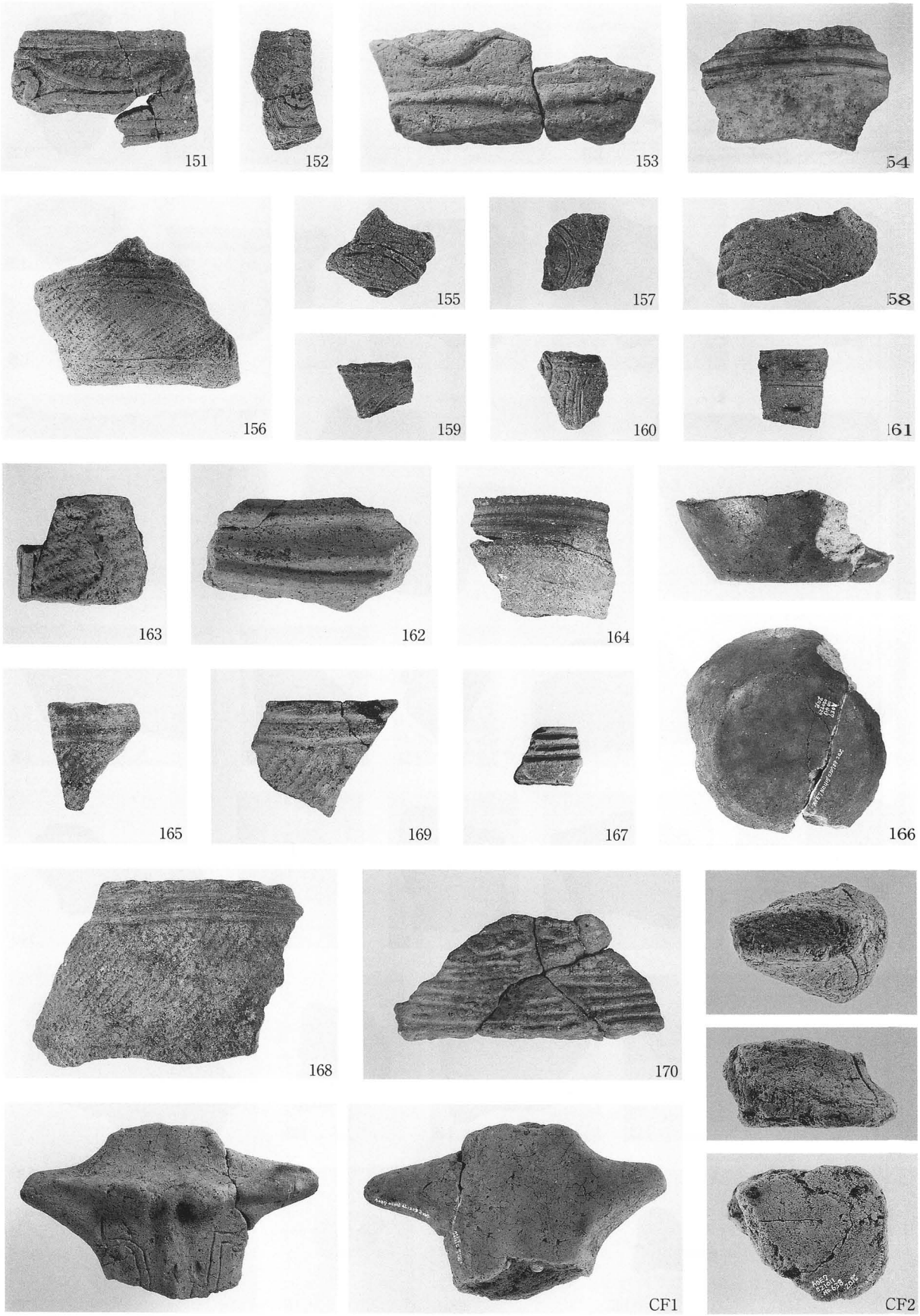


図版14　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（6）　　104～106　2a層　S＝1：2
Pl.14　Pottery from AOE7（6）　　107～120　2b層



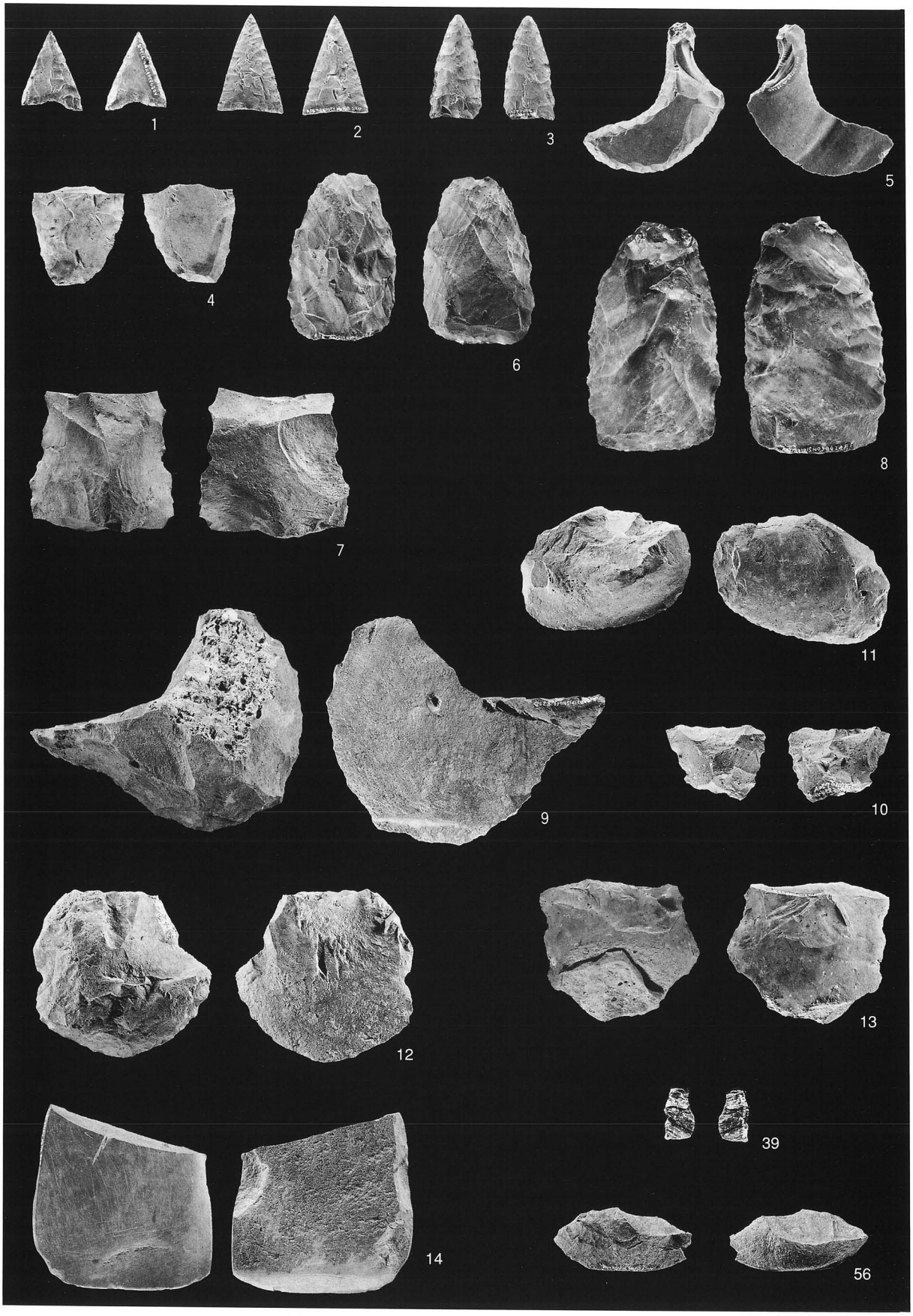
図版15　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（7）
Pl.15　Pottery from AOE7（7）

121・122　2b層　S＝1：2
123～150　2a層



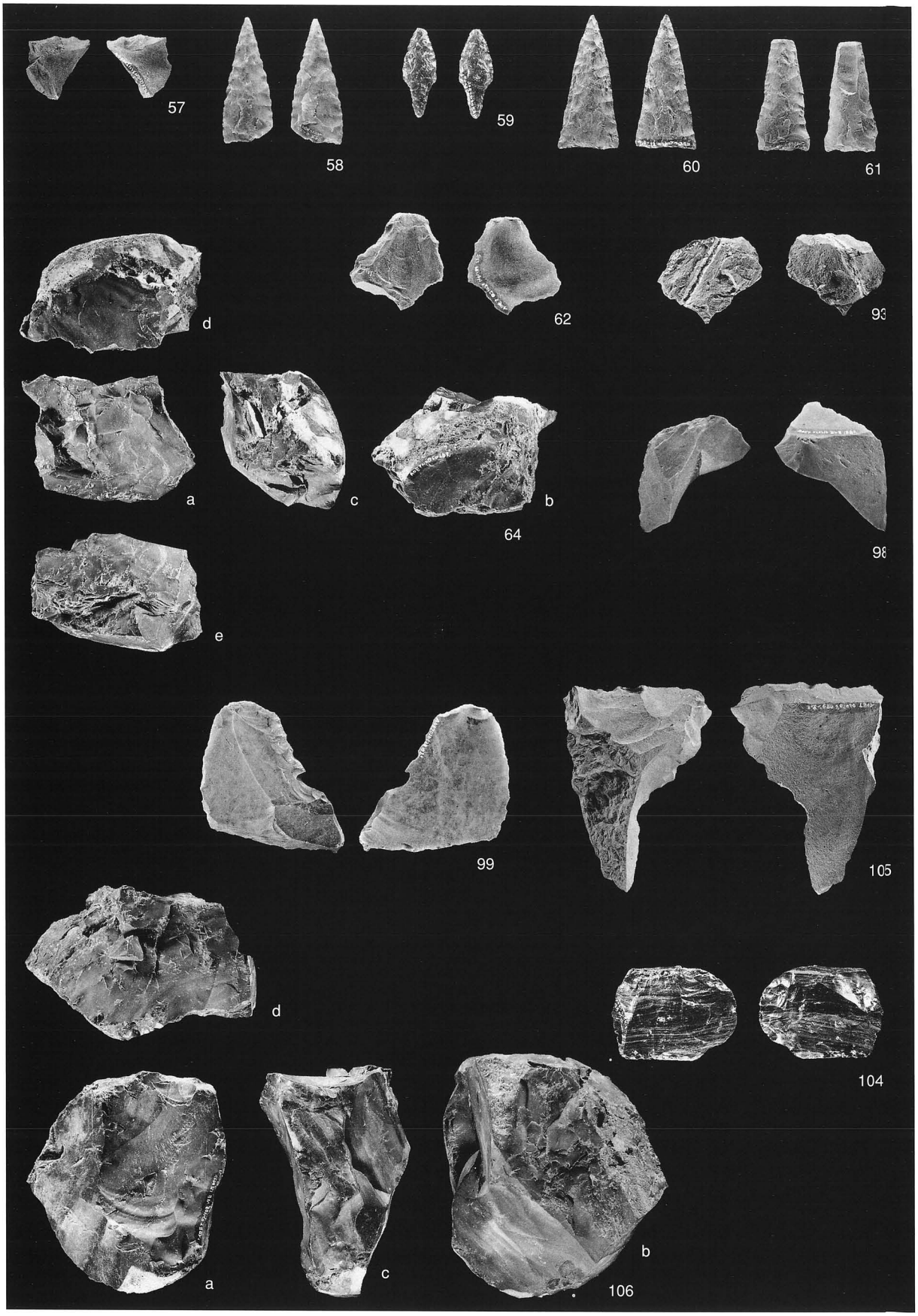
図版16　青葉山E遺跡第7次調査出土土器（8）・土偶
Pl.16　Pottery from AOE7(8) and clay figurine

S＝1：2
151～161・170　2b層
162・163・169　旧表土
167　ピット44
164～166・168・CF1・2　2a層

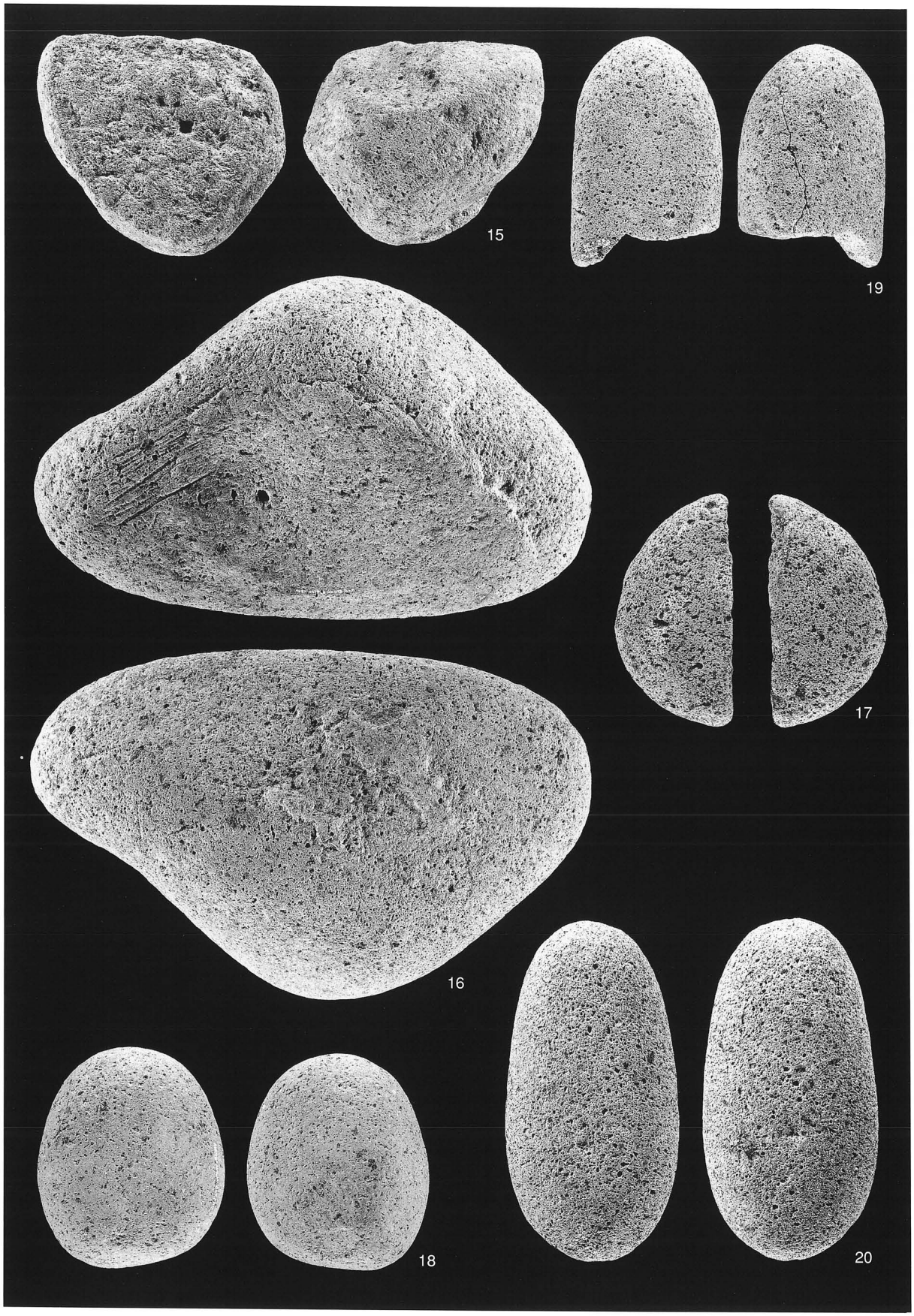


図版17　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（1）
Pl.17　Stone implements from AOE7（1）

S＝2：3



図版18　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（2）　S＝2：3
Pl.18　Stone implements from AOE7 (2)



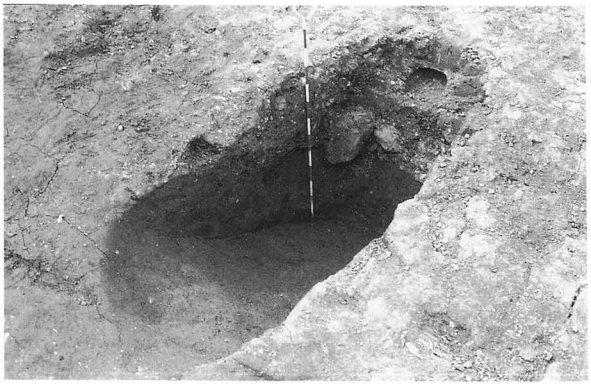
図版19　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（3）　S＝2：5
Pl.19　Stone implements from AOE7 (3)

図版20　青葉山E遺跡第7次調査出土石器（4）　S＝2：5
Pl.20　Stone implements from AOE7（4）

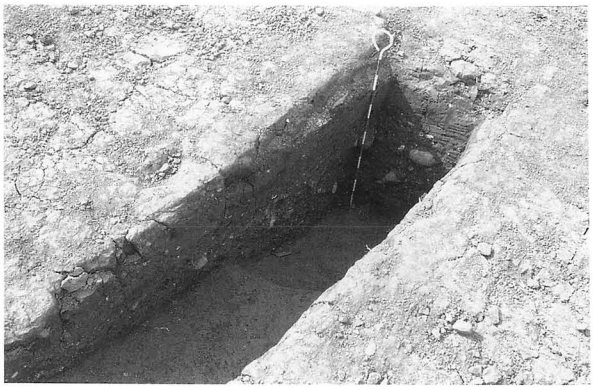
1．調査区全景（北東から）

2．調査区全景（北東から）

3．第８トレンチ全景（北東から）



4．第３トレンチ全景（南から）



5．第４トレンチ全景（南から）

6．調査区南側斜面（南西から）

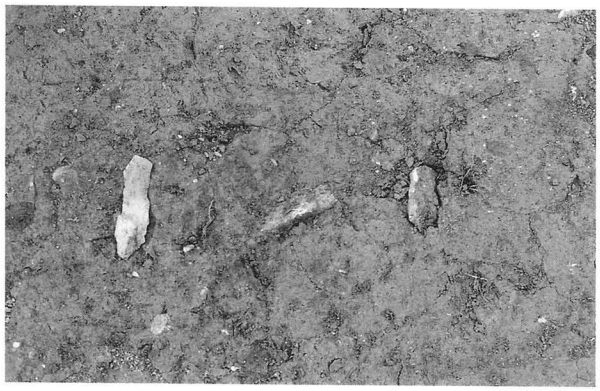
7．石器出土地点（北から）

図版21　青葉山E遺跡第８次調査調査状況（1）
Pl.21　Views at AOE8（1）

1．南側斜面ローム層残存状況（東から）

2．南側斜面ローム層残存状況（北から）

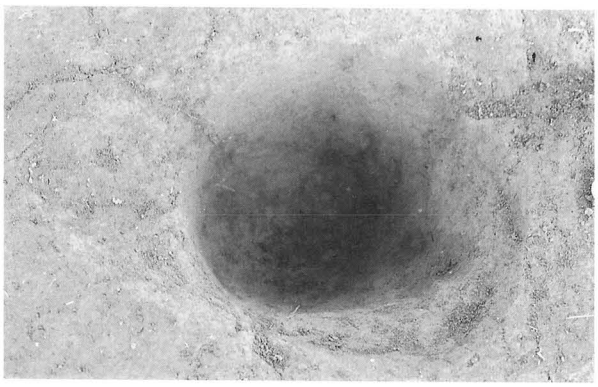
3．ローム層残存部断面（東から）



4．剥片出土状況（南から）

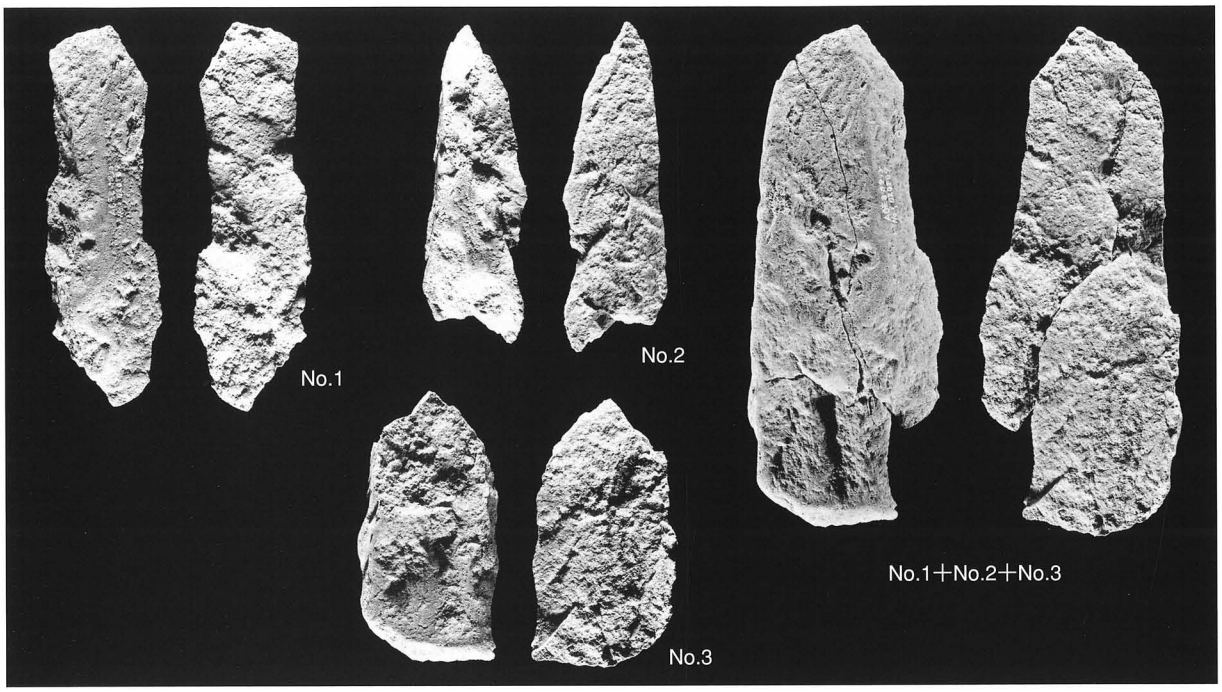
5．剥片出土状況・インプリント（北から）

6．ピット１セクション（南から）



7．ピット１（北から）

図版22　青葉山E遺跡第8次調査調査状況（2）
Pl.22　Views at AOE8（2）



図版23　青葉山E遺跡第８次調査出土剥片　　S＝１：２
Pl.23　Flakes from AOE8

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とうほくだいがくまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書 名	東北大学埋蔵文化財調査年報
副 書 名	
巻 次	20
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	阿子島香・藤沢　敦・柴田恵子・高木暢亮
編 集 機 関	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
所 在 地	〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平二丁目１－１　TEL022-217-4995
発 行 年 月 日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
せんだいじょう 仙台城 ぶけやしきあと 武家屋敷跡	みやぎけん 宮城県 せんだいし 仙台市 あおばくかわうち 青葉区川内41	04100	01033	38° 15′ 32″	140° 50′ 57″	2003.3.13～3.19	28.6	川内北地区厚生会館前上屋取設工事
あおばやまいせき 青葉山E遺跡	みやぎけん 宮城県 せんだいし 仙台市 あおばくあらまき 青葉区荒巻 あざあおば 字青葉６－３	04100	01443	38° 15′ 26″	140° 50′ 11″	2002.5.7 ～ 2003.3.28	1800	理学研究科総合研究棟（Ⅲ期）新営
あおばやまいせき 青葉山E遺跡	みやぎけん 宮城県 せんだいし 仙台市 あおばくあらまき 青葉区荒巻 あざあおば 字青葉６－３	04100	01443	38° 15′ 26″	140° 50′ 11″	2002.7.26～8.21	750	工学研究科共通駐車場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区 第８地点	城館	近世	溝・ピット	陶磁器・瓦・金属製品	
青葉山E遺跡 第７次調査	散布地	縄文時代 早期～晩期	土坑・ピット	縄文土器・石器	
青葉山E遺跡 第８次調査	散布地	縄文時代		石器	

東北大学埋蔵文化財調査年報20

平成18年３月31日

発行　東北大学埋蔵文化財調査研究センター
〒980-8577 仙台市青葉区片平２丁目１－１
東北大学生命科学研究科内
ＴＥＬ　022（217）4995

印刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
ＴＥＬ　022（263）1166